



0053209-000

271-147

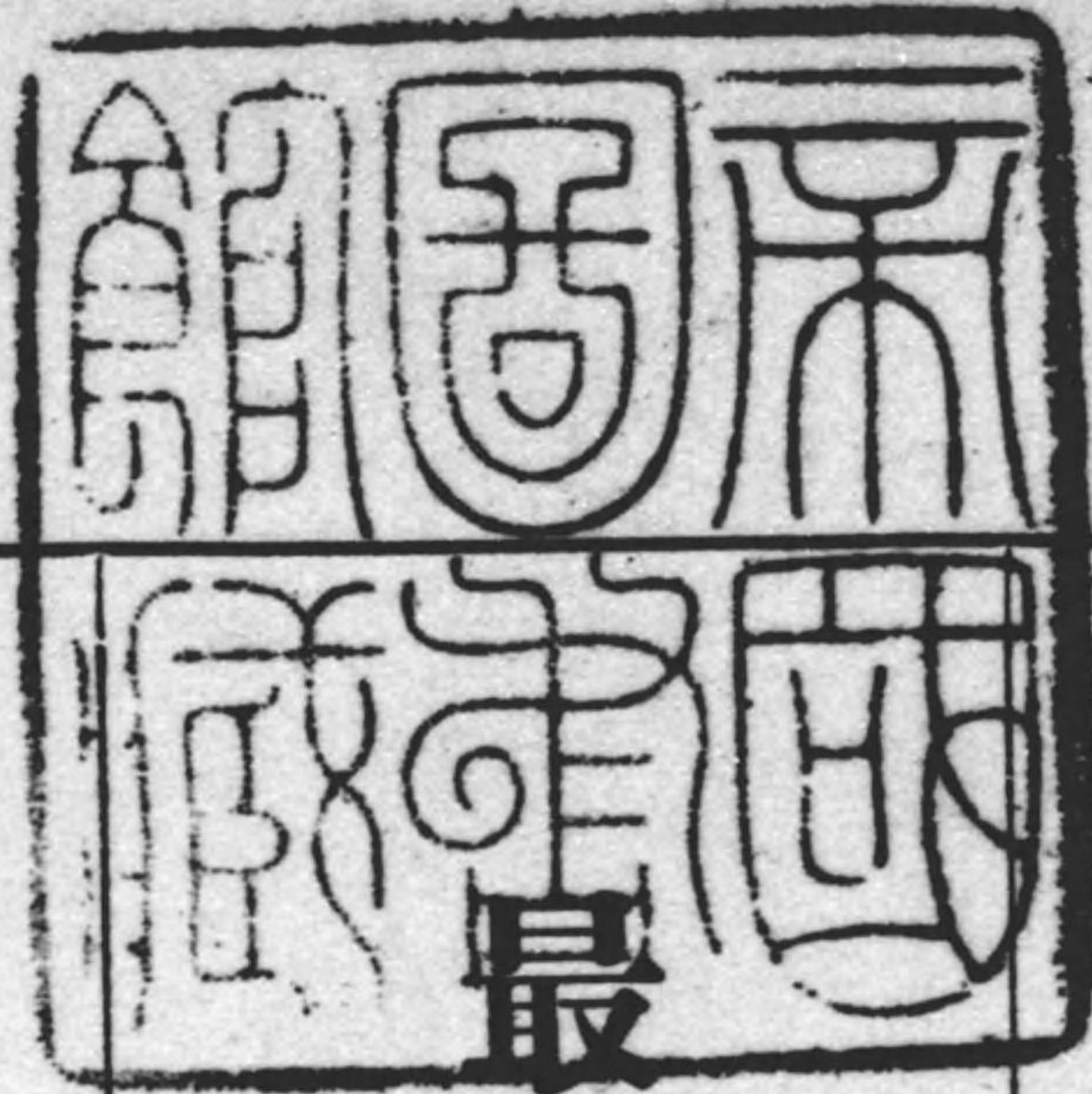
最新家庭教育

今村正一・著

三省堂

昭和9

AHP



今村正一著

新家庭教育

(精神衛生より觀たる)

東京三省堂
大阪



271-147

自序

教育は如何なる時代においても、重要な問題であるが、然も今日ほど社會の各方面の話題に上つて居る時代はない。聞く所に由れば教育の革新は現内閣の大政綱の一つであると言ふ事である。殊に最近の傾向として智識偏重の弊害に目覺め、道徳教育、人格教育に多大の關心をもつやうになつた事は、誠に喜ぶ可き現象である。従來教育と言ふと學校教育のみに限られて居つたかの觀があつたが、これは教育の本義に悖り、その成果をあやまる謬見であつて、眞の教育は家庭から始められなければならない。緒言において述べて居るやうに、家庭は社會國家の基礎であり、人類文化の根源であつて、社會の改良も、國家の改善も先づ家庭から始められなければならない。家庭教育の如何は、小にしては一家の興廢、大にしては一國の成敗にかゝはる大問題である。

著者は豫ねて家庭教育に興味をもち、多少この方面の研究に志を致して居つたが、必ずしも著述をしようとは思つて居なかつた。處が昨年十二月萬世一系の天つ日嗣として皇太子殿下が御降誕遊ばされ、殊に畏れ多くも兩陛下の母性及び幼兒保護に對する貴き大御心を拜し、家庭教育の重要性に對して新しき興味を覺醒せられ、多大の奨励を與へられたので、茲に微力をも顧みずこの著述に當つた次第である。

教育の問題ほど各人各々意見を異にするものはない、如何なる人でも教育の意見をもたないものはない、殊に家庭教育においては意見が區々であつて、殆んどその歸する所がない。また家庭教育に關する文獻を見ても、概してその取扱ひが部分的であり、また常識的である。適々多少學的著述があつても、多くは兒童の思考とか、記憶とか想像とか言つたやうな家庭の智育に偏し、また意識の領域のみを對象として、平面的に取扱はれて居る憾がある。元來人間の生活ほど複雑なものはなく、表面に現はれた意識の世界だけでなく、潛在意識の世界もあれば、無意識の世界もあ

れば、生理の世界もある。従つて眞の教育は全人を目的とし、綜合的立體的に取扱はれなければならない。

殊に著者は教育(智育、德育、體育)の根本を感情の指導にあると堅く信じ、その立場に立脚して本書を書いたのである。即ち思想の善導にしても、學業の成績にしても、素質や學習方法の如何よりも、學習に對する態度や感情の如何が最も大なる關係を有し、また體育のにおいても健全なる精神や感情が、健全なる肉體の土臺であると考ふる者である。

著者は以上の見界に基づき、心學理は勿論、生理學や社會學をも考慮に入れ、殊に最近急速な進歩を遂げた、精神分拆や精神衛生學をも加味し、家庭教育に對して新しき學的基礎を與へんと試みたのである。勿論その研究が淺く、不備の點が少なくないが、それ等の點に對しては先輩の教示を仰ぎ、また將來の研究に俟つて完成を期したいと願つて居る。

著者は元來文辭に拙なく、敘述よくその意を盡さない點の尠なくない事を虞れて

ある。若し本書が幾分にも家庭を幸福にし、第二の國民たる兒童の教養の任にあ
る人々をも裨益し、延いては行き詰つてゐる現下の社會に、光明を與ふる一助とも
ならば望外の幸ひである。

昭和九年五月五日

井の頭恩賜公園南臺の偶居に於て

著者識す

最新家庭教育目次

第一篇 家族別に觀たる家庭教育……………一

第一章 緒言—家庭の起原と教育……………一

家庭の重要性—原始生活と教育—家庭の出現と教育—家庭教育の方法—
家庭教育の現状—家族とその境遇

第二章 母と家庭教育……………七

家庭教育の主任者—母子愛の本質—誤れる母性愛—眞の母性愛—母性愛
と協力—親孝行の教養

第三章 父と家庭教育……………一四

父親の使命—男女別の起原—父親の分野—父子の接觸とその感化—父な
き家庭の缺陷—食卓に生きる父

第四章 夫婦愛と家庭教育……………二

夫婦和合の要—父母は子供の神様—父母の不和とその悪影響—夫婦の不和と偏愛—夫婦愛とオイデパス—子供の教育は両親の協同責任—継父母の場合

第五章 獨り兒の教育……………三

獨り兒の特徴—獨り兒と劣等親—獨り兒の病弱とその原因—我儘育ちの結果とその取扱ひ—獨り兒は夢想家—獨り兒は臆病—お友達を與へよ

第六章 總領の家庭教育……………三六

總領の特異性—總領の危機—總領の猜疑心と反抗心—小供の寝小便—總領の指導方法—總領の性格

第七章 次男次女の教養……………四

理想的家族數—兄弟は仲の悪いもの—兒童の向上心とその指導—次男次女の性格—家庭教育と職業の選擇

第八章 末子の家庭教育……………五三

末子の環境—末子は早熟で勝氣—鹿山少年の場合—末子の泣き蟲とその矯正—末子の偏愛とその影響—末子の危機—末子の指導

第九章 男の子と女の子……………六〇

男女の相違—男女の生理的差異—女は弱い—女子の劣等感とドムボーイ—同性愛と月經不順と盜癖—女性の劣等感とその原因—婦人の病弱とその劣等感—男の子の躰け

第十章 祖父母及び婢僕と家庭教育……………七二

二つの方面から—祖母育ちはなぜ甘いか—祖父母と孫との間の溝—嫁姑の折合—婿と舅との不和が生んだ悲劇—家庭における祖父母の立場—女中と家庭教育

第二篇 年齢別に觀たる家庭教育……………八一

第十一章 緒言—年齢別に就いて……………八一

年齢別の必要—自然年齢とその缺陷—年齢の種類—解剖學的年齢—精神

年齢—智能指数—生理的年齢—學業年齢—社會年齢—其他の年齢測定法—兒童の各時期

第十二章 胎兒期の教養 九

妊娠の生理—妊娠の期日—染色体と遺傳—胎兒の成長—胎兒の内臟機關—胎兒の生活と營養—胎教の原因—妊婦の嗜み

第十三章 乳兒期の心理と教養 九

出生期—初生兒の取り扱ひ—初生兒の産聲—乳兒の肺と心臓—乳兒の齒牙—乳兒の成長—乳兒の感覺—乳兒の視覚—乳兒の生活と感化—乳兒の感情—乳兒の言語と泣聲

第十四章 幼兒前期の心理とその教養 一〇八

幼兒期の區別—幼兒と歩行—幼兒と離乳—自己の發見と我儘—幼兒の言語—幼兒の遊戯—幼兒の病弱とその原因—幼兒の虚言—幼兒の感情—幼兒の心の芽生え

第十五章 幼兒後期の心理と教養 一二八

幼兒後期と社交性—幼兒後期の身體—質問時代—幼兒後期の言語—早教

育と言語—數の觀念—時の觀念とその指導—幼兒と繪畫—幼兒と習慣お伽噺と家庭教育—幼兒後期の指導

第十六章 兒童前期の心理と教養 一三六

兒童前期の身體—小學校入學と兒童—學校と家庭との連絡—小學校入學の試問事項—兒童の好奇心—兒童の遊戯—兒童の記憶力—記憶の個人差—兒童の思考力

第十七章 兒童後期の心理と教養 一三七

兒童後期の身體—天才と低能兒—兒童と讀物—觀察に由る創造教育—家事の手傳ひ—家庭における作業教養—英雄崇拜とその指導—性教育の必要—社交性と少年團—小學校卒業前後

第十八章 少年少女期の心理と指導 一四七

少年少女期の身體—理想我的發見—少年の新入式—理想我的發見と獨立心—兩親の心配の意義—少年少女と犯罪—放浪性とその取扱ひ—自己中心の傾向—少年少女期の智能—お友達の感化—少年少女期の感情—性愛とその指導

第十九章 青年期の心理と指導……………一五

青年期の身體—五感の發達—青年期の智能—思考—想像—思想的傾向—
性愛の發達—青年の道德—職業の指導

第二十章 兒童の退行作用について……………一六

人生變化の階梯—退行作用は何時起るか—退行作用の三階段—乳兒期の
退行作用—幼兒期の退行作用—兒童期の退行作用—退行作用としての病
氣—退行手段としての睡眠—少年少女期の退行作用—青年期と結婚期の
退行作用—壯年期と老衰期

第三篇 感情別に觀たる家庭教育……………一八〇

第二十一章 緒言—感情とはどんなものか……………一八〇

感情と人生生活—感情の効果—ズリツク女史の實驗—感情の種類—部分
感情と全身感情—感情の分類

第二十二章 感情はどうして起るか……………一八八

原動力としての感情—感情の所在—感情の起原及び定義—感情の個人差
の原因—感情行動化と激化—感情緩和の方法—感情の指導—感情の表出

第二十三章 感情の昇華について……………一九

感情教育の重要性—感情發生の順序—現代青年の悩み—感情指導の原則
—感情制御の方法—感情の昇華作用—昇華手段としての藝術—音樂—遊
戲—芝居と小説—宗教

第二十四章 感情の固着・移動及び條件化……………二二

感情の固着とその結果—感情固着の原因—驗の母—感情の移動—パプロ
ヴの實驗—ワットソンの實驗—條件化打破の方法

第二十五章 恐怖の感情とその指導……………三二

人生と恐怖—恐怖の種類とその影響—恐怖に伴ふ生理的變化—家庭教育
と恐怖心—恐怖と夢—幼時の恐怖心—闇に對する恐怖—病氣に對する恐
怖—家畜及び人に對する恐怖

第二十六章 忿怒の感情とその指導……………三六

忿怒と恐怖—忿怒より義憤へ—忿怒の種類と指導—忿怒の原因とその指導—忿怒制御の方法

第二十七章 愛情とその指導……………三四

感情教育の重要性—自己愛—他愛の發達—性愛の發達—性愛と親子愛—異性愛と性教育—母性愛とその内容—社會愛とその發達—青少年の指導と愛

第二十八章 劣等感とその指導……………三五七

劣等感の意義—劣等感の徴候—劣等感を得る原因(一)或る女學生の場合—偉人の子女と劣等感—劣等感と病氣—劣等感を得る原因(二)—劣等感とお友達—自演行爲と劣等感—劣等感矯正の手段—婦人と劣等感—劣等感と嫉妬心—劣等感のよい方面

第二十九章 嫉妬心とその指導……………三七一

嫉妬心とはどんなものか—動物の嫉妬心—幼兒の嫉妬心—カイン・コンプレックス—嫉妬心と寢小便—嫉妬心と病氣—嫉妬心と盜癖—嫉妬心と兒童の性格—兄弟仲をよくする方法

第四篇 環境より觀たる家庭教育……………三六二

第三十章 緒言—遺傳及び素質について……………三六二

素質と遺傳—メンデルの法則—ゴルドンの研究—體質の遺傳—遺傳の一般的法則—優生學と斷種—體質と智能との相關々係—ヒポクリテスの液體說—神經生理學の蓋瘍—身長體重頭圍と智能—骨相學及び性格型態學—内分泌と性格—生物化學的研究—血液型と性格—その他の研究—環境の重要性

第三十一章 環境か遺傳か……………三九七

遺傳説と環境説—遺傳よりも環境—遺傳過信の悪影響—或る養女の場合—孟母三遷の教—遺傳缺陷と補償—ペトウベンの場合—ヘレン・ケラーの教育

第三十二章 環境と家庭教育……………三〇七

人生と環境—人生は流水の如し—二枚の油繪と老母の不運—先づ環境を改善せよ—環境の意義—村井吉兵衛の話—自然的環境と日本精神—社會

的環境—環境としての人間—超自然的環境—普通環境と特種環境

第三十三章 心の芽生え……………三三〇

心は後天的所産である—心の建築とその材料—本能は善か悪か—煩悶と心意の發生—心の發達—大石良雄の話—誘惑と良心—心は環境の所産である—模倣に由る心の發生—「上位心」の特徴—上位心の發生—「上位心」と年齢—決論

第二十四章 習慣の養成……………三三五

習慣の必要—習慣はどうして出来るか—習慣と能率—習慣群—習慣形式の五方則—習慣形成の順序—習慣の可變性—習慣の矯正—習慣と感情—盜癖と虚言

第三十五章 睡眠と家庭教育……………三四五

睡眠の必要—睡眠の生理—睡眠時間數—眠せる時の注意—睡眠時のお伽噺—寢室の注意—安眠の條件—寢小便の問題—感情と寢小便—母の不精と寢小便

第三十六章 食事と家庭教育……………三五六

食事の重要性—何を如何に食す可きや—乳兒期の栄養—離乳に關する注意—獨りで食事する習慣を養へ—咀嚼の問題—恐怖と食事—快感と消化液の分泌—味覺と他の感覺との關係—食事に對する二三の注意—食物の好き嫌ひとその原因—食慾異常とその原因

第三十七章 子供の躾け方……………三七三

躾けの必要—規則は子供のため—親の優越感を除け—輕々に審く勿れ—生理的惡事—無智に由る惡事—不注意に由る惡事—代表的惡事—理論的惡事—身を以つて指導に當れ—消極的命令を避けよ—積極的命令を與へよ—小ごとより仕事—勞働の分擔と家庭の幸福—子供の叱り方—病氣と躾け—躾けの六則

第三十八章 環境としての住宅……………三八九

住宅は教室—小供部屋—居室の通風—居室の溫度と濕度—本箱整理棚の必要—居室の裝飾と調度品

第三十九章 境境としての衣服……………三九七

衣服と保温—熱の傳導と壓縮と濕潤性—保温と布地の色彩—帽子の問題—衣服の選擇—制服の處女—和洋折衷の禮讚—衣服の脱ぎ着—衣服の量

の研究

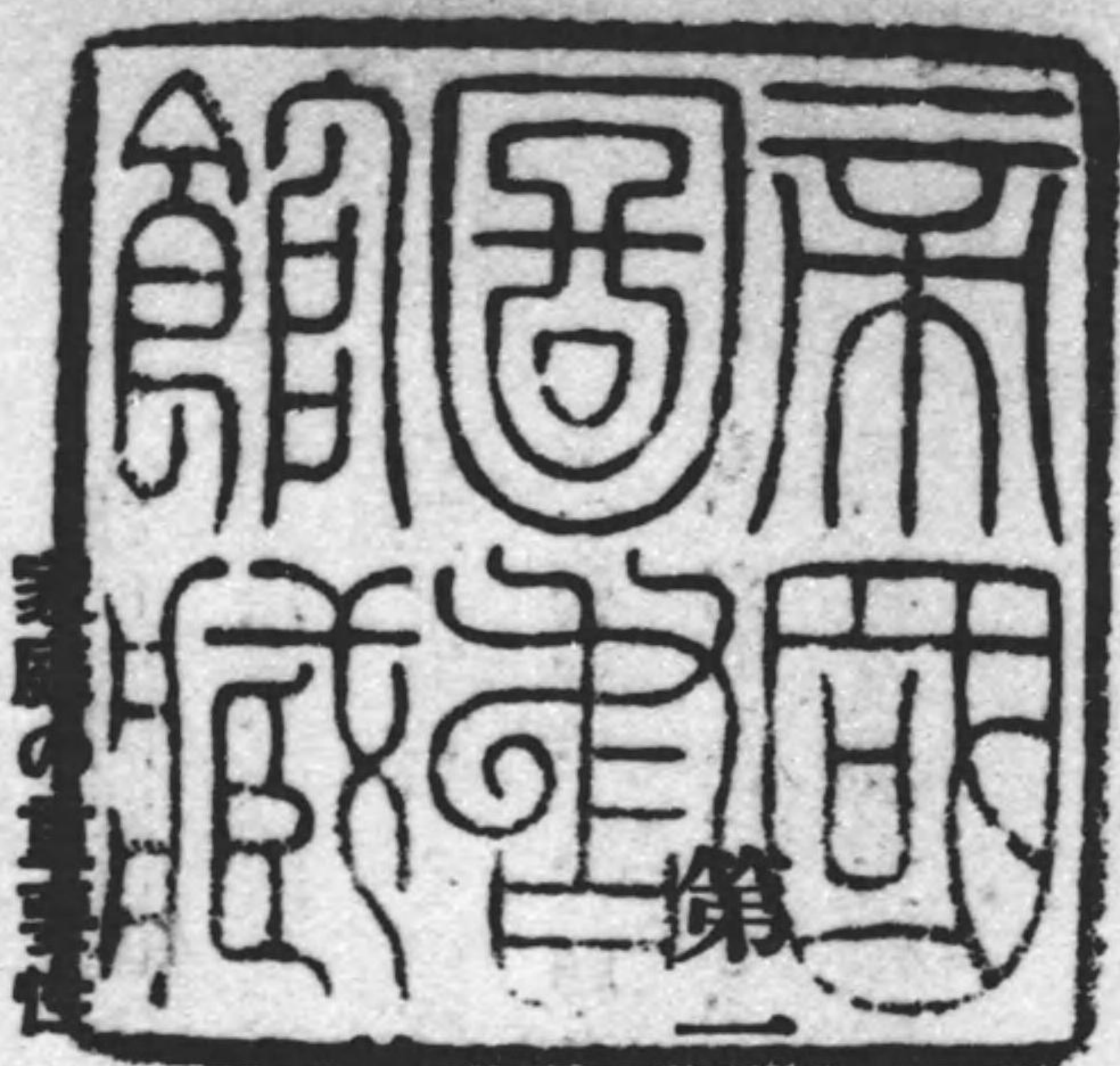
第四十章 家庭における金銭教育……………四〇六

金銭教育の重要性—私有権を尊重させよ—家庭の暮し向を知らしめよ—
定額小遣を支給する方法—贈與か報酬か—遣へ方の指導—小遣帳の記入
—貯金の習慣と貸借—私の経験

附 録 精神衛生について……………四二七

五子さんの失戀と死

櫻内本子嬢の自殺の精神分析



第一篇 家族別に觀たる家庭教育

第一章 緒言—家庭の起原と教育

家庭は社會の基礎であり、國家組織の單位であつて、人類文化の根源である。
家庭はまた血縁の關係を有する、少人數の團體であつて、物質的利害を離れ
た、愛と奉仕の行はれる小さな社會である。而して一國一社會の文化や道徳は、家庭におけるそれ
よりも高くなる事は出来ない、従つて社會の改良も、國家の改善も、先づ家庭から始められなければ
ならない。家庭の如何は、その國の文化の程度を計る尺度であり、小にしては一家の興廢、大に
しては一國の成敗にかゝはるものである。

原始生活と教育

家庭が出現したのは、人類の歴史において餘り古いことではない。人間は
その昔、男も女も住居を定めず、意のままに天然の餌食を求めて山野を跋
渉し、河海の邊りなどを彷徨し、雨期などに際して一時的に洞窟や樹陰などに同居したに過ぎなか

つたのである。従つて今日の如き結婚制度もなく、生れた子女は盡く婦人の手一つで養護せられ、母の所有に屬して居つたのである。社會學ではこの時代を母系時代と呼んで居る。然るに徐々ではあつたが、人口が増加するにつれて、それまで手摺みにしてゐた魚貝も、天然の果實も自由に得られなくなつた。そこで原始人はいろ／＼の工夫や、考案の必要に迫られ、或は銛こを作り、或は釣を垂れ、或は弓矢を案出し、中には定住して簡単な農業や牧畜を営み始めるものも出來たのである。かく一方において物質的の文化が進歩すると同時に、他方においては道德的方面もだん／＼向上し、男女の結婚が行はれ、一夫一婦の習慣や、親子兄弟間の権利や義務などの觀念が、臚げ乍ら現はれ始めたのである。

殊に未開社會における文化の特異性は、宗教の發達であつた。彼等はこと毎に自然の力を恐れ、雨も風も、疫病も不作も、みな神々の仕業だと信じてゐた。従つて鬼神を恐れること甚だしく、その怒を宥め、その祝福を冀ふために、可なり念入りの祈禱や、呪禁まじないの様式が作り出された。例へば農業を營むにも、神々の加護を受けるために、くだ／＼しい種子蒔きの儀式を守り、害虫の豫防にも、刈り入れにも、一々呪禁や祈禱が行はれた。この様にして時の移ると共に、知らず識らずの間に、各方面の文化が積まれ、それと同時に必然的にその文化を次の時代に傳へる必要に迫られるに

至つた。即ち他の言葉をもつて言へば、教育の必要が起つたのである。

家庭の出現と教育

前述の次第で文化が徐々に進歩し、人々は定住して家居を営み、夫婦は同棲して、共に子女の保護教養に當るやうになり、男の子は主として父親に、女子は主として母親について、直接生計に必要な智識技能を習得し、また神々を祭る様式などを教へられたのであつた。これによつて見れば、家庭はその根本において、子女の教養とその愛護のために、出現したものである。アンデルソンの言つたやうに、「家庭は子供のために出來たのであつて、子供は家庭のために出來たのではない」と言ふ事が出来る。然るにその後文化の發展は際限もなく進み、物質的方面における衣食住の問題にしても、従來の如く家庭で何も彼もやる事が出來なくなつて來た。例へば衣服について考へて見ても、綿は印度や米國から買ひ入れ、これを汽船で運搬し、紡績によつて布となし、染色してこれを需用者に供給するのである。かく今日においては總てが分業となり、染色の智識のみでも、染色學校を設けて特別に教授するほどの、豊富な智識を要するのであつて、最早や家庭において、各般に互る智識技藝を教授する事が不可能となつて來たのである。

こゝにおいて我々の祖先達は塾を開き、學校と言ふ特別な教育機關を設け、これに子女の教養の一

部をまかせる事となつた。然し學校における教育は、その必然的な事情のために、主として智識教育に限られて居るのであつて、教養の全部をこれに任せる譯には行かない。殊に性格教育や德育や、躰けや訓練などは、今もなほ家庭において父母の手を俟つことが多いのである。

家庭教育の方法

家庭の教育は多くの場合無意識に行はれるものである。然し意識的であると無意識的であるとに拘らず、その効果は非常に大きい。兒童は滿六歳に達して學校に入學する前に、家庭において大體日常生活に必要な言語を習得し、性格の輪郭を形成し、人間の情味とが、秩序とか、善悪などに關する概念を得るのである。

家庭における教育は如何なる方法によつて行はれるかと言ふと、先づ第一に人格と人格の接觸によつて行はれるのである。元來人間の自覺は、他の人格に接觸し、これと對立した時に始めて起るものである。無人島に住んで他人と接觸する機會のない者には、自己意識も道德觀念も殆んど起らない筈である。我々の經驗に照して考へて見ても、他人と對坐し、または他人を念頭に思ひ浮かべる時に、始めて自分と言ふ明瞭な意識が起るのである。兒童においても同じ事であつて、彼等の漠然たる意識が、父母兄弟その他の家族によつて刺戟せられ、働きかけられ、また模範を示され、智識を與へられ、理想を指示せられる事によつて、自己を發見し、これを比較し、これを模倣し、而

して性格が陶冶形成されるのである。従つて家庭教育において、最も大切な事は兒童が日常接觸する家族相互の關係である。例へば家族の數、家族一人／＼の性格、その年齢、男女の性別などは、直接間接に子女の性格に深い關係を與へるだけでなく、家族全員の氣質や品性などにも影響を及ぼすものである。家族の一人々は相互に教育者であり、また同時に被教育者であつて、父母や祖母が子や孫に感化を與へるのは勿論であるが、同時に子供等もまた知らず識らずの間に、父母や祖母の思想や性格に何等かの影響を與へずには置かないのである。例へば病身の子供を持つた母親が健康となつたり、わがまゝな子供の親が忍耐強くなるのなどはみなこの類である。

家庭教育の第二の方法は、子女が家庭を通じて實社會と接觸する事である。前にも述べたやうに家庭は一つの社會であつて、小さい乍ら生産を營み消費を司つて居るのである。恰も昔の徒弟教育のやうに、子供達は母やその他の家族の炊事仕事や、お掃除などを模倣し見習つて、マ、事遊びをしたり、また時には家事の手傳などをする事によつて、將來の生活の準備として、種々の事を學習し、また父や兄を通じて、實社會の片影をも窺ふのである。殊に農家や商家に育つ子供等はかゝる方法によつて、善につけ惡につけ、吾人が想像して居るより多くのものを、家庭において習得するのである。

家庭教育の現状

吾人は以上家庭教育の教育機關としての意義を述べ、その本來の使命を探ねて、眼を現在の社會情勢や、家庭の實狀に轉ずるとき、寒心に耐へないものがある。十八世紀における紡績機械の發明に端を發した、産業革命は社會の各般に大なる變革を巻き起した。その結果家庭の手工業は奪はれ、たゞに經濟や社會組織に變化を與へただけでなく、家庭の内容にも大なる影響を與へる事となつた。これがために従來家庭にあつて働いて居た父は、家庭の外に職を求めて働くやうになり、子女もまた幼稚園や學校などにおいて費す時間が多くなるにつれて家庭を離れ、幼兒教育にとつて最も大切な、家族相互の人格的接觸が非常に稀薄となつたのである。また他面において家庭の産業が奪はれたため、家庭が直接生産に參與する機會が減少した。従つて家庭は實社會と遠ざかり、社會との有機關係を失ひ、無味乾燥な場所と化し、教育機關としても、著しくその價值が滅殺されるに至つたのである。その他物質文明の發達や交通機關の急速なる進歩につれて、家庭における精神的雰圍氣は愈々粗雑となりつゝある。或る人が言つたやうに、現下の家庭は動もすると、下宿屋や旅館と何等擇ぶ所がないかの觀があるのは遺憾の極みである。宜しくその本來の使命に立ち歸り、その面目を改めなければならぬ。

家族とその境遇

家庭における家族相互の關係は相對的であつて、決して絶對的なものでは

ない。例へば同じ家庭に育つ子女でも、兄である場合と、弟である場合と、獨り兒である場合と、總領である場合と、男の子である場合と、女の子である場合とに由つて、各々その境遇を異にするのである。従つてその教導の方法においても、また各自獨特でなければならぬ。一口に家庭教育と言つても、總ての場合總ての子供達に共通する、萬能的な教育方法はない譯である。故に著者は本篇において、教育者としてまた被教育者として、父母、兄弟、祖父母等各自その異つた立場から、家庭教育の實際問題を述べることにする。

第二章 母と家庭教育

家庭教育の主任者

家庭教育において最も關係の深いものは、申すまでもなくお母さんである。母親は家庭教育の専門家であり、主任者であり、言はば家庭學校の校長さんのやうなものである。幼兒がこの世に生れ出て初めて接觸する人は、お母さんその人である。従つて母親と子供との間柄ほど密接なものはない。兩者の關係如何は、實に兒童の將來の對人關係の如何を決定する根本要素となるのである。

母子愛の本質

母と子の関係の中樞をなすものは愛である。母の愛は兒童の性格建設の核心であり、家庭教育の中軸であると言つても差支はない。元來親が子を愛するの情は、母性愛と言つて一種の本能である。然し本能的な母性愛は必ずしも人間特有のものではなく、動物でも持て居るのである。従つて吾人の家庭教育においては、たゞ單なる本能的な愛でなく、母子間の相互愛でなくてはならない。即ち母親が子供を愛するのは勿論であるが、たゞ一方的の愛でなく、子供達もまたお母さんを愛するやうにならなくてはだめである。それには本能的な愛情の外に、母親の教智と手心とを要するのである。世の中に子供を愛する母は澤山あるが、子供等から眞に愛されて居る母親は餘り多くはない。時には子供が母に甘えたり、朝から晩まで母の側を離れなかつたりするのを見て、子供達が自分を愛してゐるのだと考へるお母さん方もあるが、それは大きな誤りである。彼等は母を愛して居るのではなくて、母を要してゐるのである。母を要して居ると、母を愛してゐるのでは、一見した處では大差はないが、その心理状態において、またその教育的効果において、全く正反對であつて、兩者の間には雲泥の相違があるのである、即ち母を要する心は利己的であり、母に頼る依頼心である。これに引替へて母を愛する心は、與へんとする心であり、積極的態度であつて、奉仕の精神の表現である。

次に幼兒の愛情生活を見ると、これも矢張り本能的である。それが種々な階段を経て、徐々に成長發達して行くのである。初生兒の愛の對象は自己愛と言つて、自分自身である。それが過ぎると今度は保護者愛と言つて、自分を愛してくれるものや、世話をしてくれるものを愛するやうになる。更に滿五六歳になると臙ろげながら、性愛的要素が加はり、男の子は特に母を慕ひ、女の子は父親に愛着を感じるやうになる。然しそれも束の間で、やがて親子間の性愛的要素は、強い壓迫を受け愈々最後の階段に進んで行くのである(第二十七章参照)。

誤れる母性愛

生れたばかりの子供ほど無力のものはない。これを動物と比較して見ると非常に異つて居る。動物の中には生後數分間で獨立して生活して行けるものもある、長くかゝつても數ヶ月乃至二三年を出でない。然るに人間の子供が、成長して一人前となるまでには約二十ヶ年を要するのである。それがために自然兩親を始め、周囲の人達が、子供を愛護し過ぎる傾きがある。怪我をさせまい、失敗をさせまい、風を引かせまい、喧嘩をさせまいと、朝から晩まで心遣ひをし、干渉するのである。その結果兒童は愈々自分の力の弱さを感じ、萬事において消極的となり、遂には自信を失ひ、屢々強い依頼心さへ起すに至るのである。かゝる家庭教育は決して望ましいものではない。元來教育の根本目的の一つは、兒童をして獨立自主の人間とな

し、父母を離れて獨立の生計を營む事の出来るやうな能力を與へる事にあるのである。如何に學問智識があつても、獨立心を與へない教育は失敗である。故に兒童が成長するに従つて徐々に兩親を離れ、丁年に及んで全く獨立の人となる事が、被教育者の希望でもあり、また教育者の喜びでなければならぬ。然るに事實はこれに反し、世間の多くの母親達は、子供達が成人して自分を離れて行く姿を見て淋しく感じたり、不良にでもなつたかの如くに思ひ過して、これを喜ばない傾向があるのである。これを母親の立場から見れば愛であると言ふかも知れない、然し子供の方から考へれば無用の干渉であつて難有迷惑である。かゝる事が直接間接の原因となつて、親子の間に溝が出来てくるのである。あれまでに可愛がつて育てたのに、どうして子供達は母の愛を感じてくれないのかと歎くのも、母親としては無理もない事かも知れないが、深く考へて見れば子供達が親の愛に背いて、親不孝者となるのも、母の誤つた愛の結果であつて、その大半は親の責任である。「親の心子知らず」と言ふが、子供の方から考へれば「子の心親知らず」と言ふ事も出来るのであつて、子供を育てるのに、如何に愛が大切だと言つても、過度の愛、本能的の母性愛のみでは不可である。愛に智識を加へ理解を加へなければならぬ。

眞の母性愛

家庭教育の要諦が、獨立自主の人を作る事にあるならば、兒童自身をして成る

可く多くの事物を觀察させ、出来るだけ多くの事を經驗させ、而してその觀察經驗の内から、兒童自身が、智識や法則を發見し、眞理を學ぶやうに仕向ける事が肝要である。火の熱いのは、實際火に觸れてみたものでなければ分らないと同様に、何事でも經驗なくして學ぶ事は不可能である。かゝる見地からすれば、兒童は何時も安全と成功とのみを、經驗すべきではなく、時には冒険と失敗とに遭遇する事も、また教育上無意義ではない。「失敗は成功の基」と言ふ事があるが、失敗の後に成功があつて始めて喜びがあり、そこに興味が生じ、努力が生じ、更に希望と自信とが湧き出で、人生そのものに對して深い感興を覺えるやうになり、多少の困難があつても、勇氣をもつて獨立自主の道へと躍進して行くのである。この點から考察すれば、眞の母性愛とは先づ第一に子供を理解してやる事である。女の子が人形の足がとれたといつて悲しんだり、男の子が風が破れたと言つて母親に訴へる場合に、大人の立場から見れば、高が人形か風であつて、それしきの事に騒ぐのは馬鹿だと言つて叱る事も出来る。然しそれが子供達にとつては、親が子を失つた事のやうな、また大人が大切な器具を壊した時のやうな大問題なのである。故にその氣持を以てこれに同情を表してやらなければならぬ。よく大人と子供とは單に量の差でなくて、質の差であると言はれてゐるが、誠にその通りであつて、人は年齢に應じ性に應じ、その興味や立場を異にするものであるから（第

二編参照)、父母はその時々、の兒童の心理を考察し、その要求に應じて教導して行かなければならぬ。

母性愛と協力

更に眞の母性愛は協力である。子供達のために母が犠牲となるのは、美はしい事ではあるが、さればとて親が何も彼もしてやる事はよくない。またそれと同時に萬事子供任せにする事も教育的ではない。子供のやる事を親が援助してやると言ふやうな風に、親子間の協力協同が必要である。前節に述べた人形や凧の場合でも、お母さん獨りで修繕するのでもなく、また子供獨りでやるのでもなく、子供と母とが協力してやる處に眞の愛が現れ、教育が行はれるのである。之に由つて子供等は人形が直つたと言ふ喜びを味ふと共に、修繕の方法を學習し、母に對して感謝の念をもち、また自分がそれに參加したと言ふ満足をも感ずるのである。故に母親は出来るだけ子供の友となり、遊び相手となつて、所謂「親子同志」の生活をして行くことが望ましい。

親孝行の教導

次に子供が親を愛する様になるにはどうしたらよいかと言ふ事を考へて見よう。「子を持つて知る親の恩」といふ諺があるが、この言葉の意味は自分が子供を生んで親となり、子供の世話をして見て初めて親の愛を體驗し、親に對する恩愛の情を感ずる

様になると言ふのである。然し子をもつてから親を愛するのでは餘りに遅過ぎるのである。そこで種々な工夫をこらし、手段を講じて一日も早く親孝行の子供に育て上げる必要がある。それがためには子女に人形を與へることなども、確かに一方法である。子供等が人形に對するとき、母が子供に對するやうな氣持をもつて、暑さにつけ、寒さにつけ、これをいたはり、人形の世話をすることによつて、子供ながらに幾分でも母親としての體驗をなし、自然に母の立場を理解し、母を愛するやうになるのである。また男の子であれば、家畜や小鳥の世話をするとか、父の手傳などをしたり、家庭の仕事を手傳したりすることによつて、父を愛し母に同情するやうになるのである。成程子供が家庭の手傳をする事は、却つて邪魔になる場合もあり、時には器物を毀す事もあるが、それが教育上効果のあるものであるとすれば、多少の不便は忍ばなくてはならない。また父母の誕生日などを子供達に祝はせるのも良い方法である。著者の知人の家庭には五人の子供があるが、その子供達が協同して父母の誕生日毎に五錢十錢と據金し、秘密に記念品を調べて、父母を喜ばせる事を年中行事の一つとしてゐる。かく親子間の相互愛を増すには、父母が子供のために犠牲を拂ふ丈けでなく、子供も亦幼時より兩親のために盡すのでなければならぬ。俚諺に「家貧しうして孝子現はる」といふ事があるが、勿論貧家の子弟全部が孝子になると言ふ譯にはゆかなくとも、貧しい家

庭では親が子供を保護するよりも、子供が親のために盡す機会が多くなる。而して彼等が親のために働く處に、自然に親を愛する情が湧き出るのである。これに反して無爲徒食の有閑階級の家庭に、不良の子女の多いのは、畢竟愛護が過ぎるからである。これを要するに、母の愛は、盲目的であつてはならない、また一方的でなく相互的でなくてはならないと言ふ事を強調するものである。

第三章 父と家庭教育

父親の使命

家庭教育といへば、すぐお母さんを聯想させるほど、母親と家庭教育とは密接の關係をもつて居る。それだからと言つて、その全責任をお母さんに負はせることは、家庭教育そのもののために感心したことではない。前にも述べたやうに、家庭における教育は家族全員の相互間の接觸によつて行はれるものであつて、たとへお母さんがどんなに賢明な方でも、またお母さん獨りがどんなに努力しても、家族中に一人でもこれに協力しない者があれば、折角の心盡しも充分の効果を收める事が出来ないのである。殊に一家の家長である父たる人が、家庭教育において重要な地位を占めて居る事は、申すまでもない事であつて、從來この方面におい

て一般に認識の缺けてゐたことは誠に遺憾とすべきである。

人類の最高目的は何であるかと問はるれば、立派な人間を造る事だと言ふ事が出来る。人類共同の目的はこの善き人、善き世界を造ることに外ならないのである。斯様な見地からすれば、政治も産業も、經濟も學問も、その他人類の所有努力は、悉くこれ善き社會の基礎となる善き人を造る手段であると言つても差支はない。けれどもよき人を造ることは決して容易の業ではない。過去において子供を育てる事などは、男の知つた事ではなく、妻に任せて置けば澤山であると言つたやうな、考へ方をするものも少なくなかつたが、これは間違つて居る。人を造る事は、家を造ることよりも、田を作ることよりも、詩を作ることよりも、金を作ることよりも、一層大切であり、また六ヶ敷い事であり、やり甲斐のある仕事である。

男女別の起原

下等動物の生殖には父親を要せないものもある。例へばアミーバの如きものは、細胞の分裂によつて繁殖するのである、然し分裂によつて出来た二個の個體を、精細に驗べて見ると、必ず大と小があつて、大の方は小の方より早く分裂して再び大小二個の細胞となるが、小の方の細胞は榮養を吸収し、生長した後でなくては分裂しないのである。かく下等動物が繁殖するには男女の性別はないが、分裂によつて出来た個體には、大小即ち親と

子とがあるのである。而して親の方が再び分裂して繁殖するには、餘り多くの時も活動も要せないが、子の方は活動して餌食を求め、成長發達した後でなければならぬ。従つて親の方は靜的となり、子の方は活動的となつたのである。處が生物が徐々に進化し、その組織が一層複雑となり、分裂に至る過程も次第に長時間を要し、且つより多くの榮養を要するやうになるにつれて、遂には分裂を専門に司るものと、榮養供給を専門にするものとに分れ、各々分業となつた。而してこの滋養分を供給する役目は、活動的な子の分擔となり、繁殖は靜的な親の仕事となつたのである。子が親に滋養分を供給する状態を見ると、先づ自から榮養分を攝取し、これを親の肛門または口から注入して、親の繁殖を助成するのである。これが徐々に發達して、高等の動物となるに及んで始めて男女の性別が出現し、親の方が女となり、子の方が男となり、滋養分の供給が射精作用と變り、滋養分を受ける女性の方から見れば、受胎作用となつたのである。この事實は蜂や蟻などの昆蟲界において、明かに認める事が出来るものである。彼等の社會においては、概して雌が雄よりも大きく、雌は靜的で雄は動的である。また雌が雄より主要なる位置を占めて居るのを見るのである。然るに更に一層高等の動物になると、妊娠の期間も、養育の期間も著しく長年月に亙るため、榮養物供給の任に當る男性の負擔がだん／＼重くなり、遂に男が女より大きくなり、また男性が女性より上位

を占めるやうになつたのである。

父親の分野

かくの如く動物進化の過程を辿つて見ると、父親の家庭教育における立場が分明となるのである。母が愛を代表して居るとすれば、父は力を代表し、また物資供給の方面を分擔して居るのである。而して父親の家庭における行動は勿論、家庭の外における總ての行動も、直接間接擧げて善き子供を造るための努力であると言ふ事が出来るのである。前章において「家貧しうして孝子現はる」と言ふ言葉を引用したが、これは單に眞理の一面を言つたに過ぎないのであつて、決して貧乏な事が家庭教育の理想であると言ふ譯ではない。一般に見れば貧家の子弟は、中流以上の家庭の子弟に較べて、總べての點において不利である。殊に物質の缺乏は、直接間接に、兒童の榮養や健康に悪い結果を來すばかりでなく、精神的にも不安の原因となり、劣等感を起さしめ、屢々自暴自棄に陥らしむることさへある。その他貧家に育つ子女が受ける弊害は物質を過重視することである。彼等は欲しい玩具も買つて貰へず、食べたいお菓子も充分食べられない。かく幼時において満たされなかつた、彼等のお菓子や玩具に對する欲望が、青年になつても彼等の腦裡を離れない物になる。その結果彼等は早く大きくなつて、思ふ存分好きなものを買つたり、旨い物をたべて見たいと言ふことを、片時も忘れないのである。従つて彼等が成人して

自由がきく年頃になると、急にこの不満が爆發して、所謂不良の傾向を示すに至る。若しその願望が思ふやうに遂げられない場合には、或は争つたり、或は盗んだりして非常手段に訴へる事もある。更に貧しい家庭の子女は、幼少の頃に、自然無理な労働を強ひられる場合が少くない。そのために彼等が成長するに従つて、却つて勤勞に對する興味を失ひ、遂にはこれを厭ふやうにさへなる。かかる過程を経て、貧家の子弟の多くが、或は懶惰となり、或は酒色に耽溺し、或は盜癖を得て身を持ち崩すやうになるのである。

父子の接觸とその感化

次に子女は父親を通じて、家庭に居りながら實社會に接觸することが出来るのである。殊に男の子等は自分達のお父さんが社會に出で、人生の行路において惡戰苦闘してゆく有様を見て、子供ながらに實生活の片鱗を窺ひ、これによつて將來自から社會に處するための底力と、準備とを與へられるのである。これに反して父親を早く失つた子供や、父が居つても子供と接觸する機會が少なく、主として母の手一つで育つ子供は、實生活に對する豫感を缺き、一面においては社會を甘く見て樂觀的な傾向を有すると同時に、他面においては空想的なお目出度い人間となり、また自信と勇氣とを缺き、非社交的となり、臆病で心配性な人間となり勝ちである。

父なき家庭の缺陷

家庭は老若男女の協同生活であり、一個の小さな社會であるとするれば、母親ばかりでは不完全な事は申す迄もない。また子供は母親の感化を受けると同時に、父親の感化をも受けなければならない。處が前にも述べたやうに、經濟組織が家庭の自給自足であつた往時においては、父母共に家庭にあつて、子女の教養に當つて居たが、機械文明の發達につれて、大規模産業時代となり、父親が家庭に在つて子女に接觸する機會が少なくなつた。これが現時の家庭教育の重大なる缺陷の一つである。今日家庭に起る種々な不祥事も、その原因の一半は確かに父が家庭に不在勝ちだと言ふ事に存してゐる。

食卓に生きる父

家庭の現状を見ると、父は朝早く出勤し、屢々夜遅く歸宅すると言ふ様な有様であつて、子供と父親とは益々接觸する機會が少なくなりつゝあるのである。さる家庭で六つになる男の子が、或る日曜の朝、新聞を読みながら食事をして居る父親を見て、「お母さんあの新聞の蔭に居る人は誰ですかと尋ねた」と言ふ話があるが、子供が六つになるまで、お父さんの顔を見覚えなまいと言ふのは少し極端であるが、これに類似した事實は決して少なくない。たまたま家庭に居つても、新聞を読み耽つて居て、子供の仲間に入らないではなんにもならない。成程父親の仕事場は家庭の外であり、社會の事情も複雑となり、多忙になつて來たことは事

實である。然し心懸け次第では多少の改善は不可能ではない。而して家庭において父が子女に接觸する最もよき機會は、食事の時である。一家打揃つて團樂のうちに夕食を共にする事は、一日の中で最も楽しい時間であつて、父親の居らない食卓は、最も重要な精神的要素を缺いて居ると言つても差支はない。父をとり圍んで食事を終り、暫くは子供達の家庭や學校における話を聞いてやつたり、また父が實社會において、見聞した事などを話してやつたりする事が、家庭教育においてどれほど大切であるかと言ふ事を考へて見れば、多少の事は犠牲にしても成る可く家庭に歸つて、家族と食事を共にするやうに努めなければならない。また社會一般においても、父たるものの教育的意識を喚起し、その重要性に覺醒せしめると同時に、父たるものの家庭教育者としての立場を尊重するやうにしなければならない。某女學校では毎年十一月の第二日曜日を「父の日」として守り、當日父を招待して、父の恩と言つたやうな題材を主とした劇をやつたり、生徒自作の「父の日の歌」を歌つたりしてお父さんの勞をねぎらふこととしてゐる。これは五月の第二日曜の「母の日」と相對して、今後各方面において實行される事を希望する次第である。

要するに、人間の生活において必要な精神的要素は、現實に即した自信と勇氣と希望とである。この三つのものは家庭教育における三位一體であつて、これを與へない教育は決して完全とは言は

れない。而してこの自信と勇氣と希望とを與へるものは、お母さんよりも、お父さんその人である。フオスデック教授が會て「我々は家庭のために、自からを犠牲にするか、それとも自分のために、家庭を犠牲にするかの二つの道がある」と言はれたことがある、我々父たるものは、何人でも敢て家庭や子供を、自己の我儘勝手のための犠牲にしようと思つて居るものはない筈である。たゞ從來家庭教育における父の立場の重要性を充分知らなかつたまでである。

第四章 夫婦愛と家庭教育

夫婦和合の要

母として子に對する場合や、父が家庭の子女に及ぼす感化影響については既に述べたが、父と母との相互の間柄の如何が、また直接間接に家庭教育に甚大なる關係をもつて居るのである。本章においては、この夫婦の間柄と家庭教育との關係について述べる事にする。

教育勸語の中にも仰せられて居るやうに、夫婦は互に相和して行く事が大切である。また互に相信じ、互に尊敬し合つて、生活して行かなければならない。然し夫婦が互に相和すと言つても、夫

婦が同じでなくてはならないと言ふ意味ではない。前にも述べたやうに、家庭教育における父の分野と、母の分野とは各々異つて居るのであつて、寧ろ父は父、母は母として、各々異つた立場から、各自その特異性を發揮し合はなければならぬ。要は兩親間の精神的了解と、相互の間の連絡である。これを植物に譬へて見れば、父親は幹で、母親は花、子供はその果實のやうなものであつて、立場はそれ／＼異つて居つても、そこに一絲亂れざる統制が必要なのである。一個人としてはどんなに立派な奥様でも、また社會に出ては如何に立派な紳士であつても、夫婦として家庭にあつて相和する事が出来なくては不可である。若し兩親の間に間隙があるとすれば、それがどんなに小さくても、子供達はこれを見出さずには置かないのである。彼等は敏感にこれをかぎつけ、その程度に應じて、或は淋しく思ひ、或は不安を感じ、或は悲しみ、或は怨むのである。

父母は子供の神様

客觀的にはどんなにつまらない兩親でも、幼兒達の目には、この世の中にお母さんほど美しく優しい人はなく、またお父さんほど偉い人はないのである。彼等にとつて、お父さんやお母さんは、神様の次であると言ひたいが、實際には母親や父親は子供達の神様であり、偶像それ自身である。電車の中などで時々夜遅く、みすばらしい風采をした憐れつばい母親の胸に抱かれながら、安々と眠つて居る幼兒を見受ける事がある。私はそんな時に、頼り甲斐もなさ相な母を、かくまで信頼して居る幼兒を見るにつけて、いぢらしくてたまらなく感ずることがある。殊に幼弱な子供達の目から父親を見ると、全智全能としか思はれないのである。よく子供達が自分々々の父親の自慢をして居るのを聞いて微笑を禁じ難い事がある。或る時巡査の子供が、お父さんが巡査で、毎日サーベルを下げて居る事や、近所の人々が恐れて居る事などを自慢して居ると、側に居つた撒水人夫の子供が「うちのお父さんはもつと偉いよ、お父さんが水を撒きに歩くと、皆んな逃げるよ」と自慢したと言ふお話があるが、よく子供の心理を現はして居る。かく幼なき人々が信頼し、崇拜的である父と母が不和であつたり、また相争ふのを見る

とき、彼等が途方にくれるのも、全く無理ではない。

父母の不和とその悪影響

夫婦間の不和には、それ／＼理由があるに違ひない、だから互にその自説を主張するのである。時には父母が子供等にまで自己の立場を理解させ、彼等を自分の味方にしたい一念から、争ひの渦中に引き入れようとする場合さへある。然したゞでも大人の感情を理解する能力のない兒童等が、悲しみと歎きと、不安に満ちて居る場合に、兩親間の感情の行違ひなどを、正當に解釋する事の出来ないのは勿論であつて、どちらが善くて、どちらが悪いのかを判別する能力のある筈がない。これに由つて、子供達の當惑は

一層加はり、彼等の心はおののくのである。殊に子供の教育方針や躾けの問題などについて、両親の間に意見の相違のある場合には、子供達の精神が一層不統一となり、その結果神経衰弱となつたり、學業に身を入れる事が出来なくなつたりするやうになる。かゝる場合に處するため、子供達は家庭において父に對する時と、母に處する場合とそれ〴〵態度を異にする必要を生じ、延いてはそれが子供の心に二重道徳を植ゑつける原因ともなるのである。よく昔から嚴父慈母と言つて居るが、父が嚴重過ぎると、母はこれを補ふために、優し過ぎるやうになり、家庭教育上種々の弊害が起つて来る。或る小學校五年の男の子が、或る日両親の許可なく、お友達のうちに遊びに行つて、夕食後歸宅した、すると嚴格な父親が非常に怒つて、子供を叱責し、その罰として食事を與へずに寢かせたのである。すると優しいお母さんが、これを不憫に思ひ夜中密かに彼を起して、と馳走を食べさせた」と言ふ話がある。かゝる場合において父が悪いのか、それとも母が悪いのか、と言ふやうな論議立ては暫らく別として、その結果子供に悪い影響を與へる事は想像に難くない。また或る曇天の日、學校に行かうとする愛兒に向つて、お母さんが「今日は雨が降り相だから、高下駄を履いてお出なさい」と注意した。するとこれを聞いてゐた、お父さんが側で「いや今日は雨は降らないから、駒下駄でも大丈夫だ」と反對な事を言つて、双方共に譲らなかつた。かゝる場合に一番迷

惑するのは子供である。父と母とが雨が降る、いや雨は降らない、高下駄をはけ、いや駒下駄でよいと、議論が盡きないので、どうしてよいか分らなくなつて、とう〴〵片足に高下駄、他の足に駒下駄をちんばに履いて、學校に出かけたと言ふ話がある。これは作り話かも知れないけれども、これに類似した事は屢々家庭において起るのである。よく仲のよくない夫婦が、夫の留守に子供達に父の悪口を言つて聞かせたり、また子供の面前で母を叱つて辱しめたりすることがあるが、これが子供達の腦裡にどんなにひどくかを想ふと、戰慄せざるを得ない。前にも述べたやうに、かゝる家庭に育つ子供等は精神の統一が出来なくなり、だん〴〵不安を感じ、著しく内氣となり、自信を失ひ、臆病となり、何事にも努力する事が出来なくなつてくるのである。殊に成人の後に男の子も、女の子も共に結婚を嫌ひ、活氣なく厭世的な人となる場合が少くない。

夫婦の不和と偏愛

両親の一方が結婚生活に不満を感じ、その愛慾の生活が満たされない場合に起る他の問題は、子供に對する愛が非常に變調になつたり、偏頗になつたりすることである。これがまた中々面倒なこととなるのである。一般に夫に不満を感じる母親は、子供を溺愛する傾向を示すものである、殊に多くの場合において、男の子を偏愛する様になり、これに反して妻にあきたらない父親も、その満たされない愛のはけ口を子供に求めて、彼等を

感傷的に愛する様になる。而して父親の場合には主として、女の子を偏愛するのが通弊となつてゐる。著者の知人に音楽家がある。夫婦共個人的に見れば誠に立派な方であるが、主人は東京の人で、奥さんは關西の方であつて、どうしても氣が合はない。一度は別居した事もあつたが、子供達のためにとて忍耐して再び同棲するやうになつたのである。すると主人は娘を偏愛し始め、何かにつけて息子を罵倒して娘をほめ、反對にお母さんの方では息子を庇つて夫の留守の時などに、彼を慰めたり、愛撫したりしたのである。その結果息子は女性的な女々しい性格となり、遂に強度の神經衰弱に犯され、これに反して娘は男性的な、オテンバとなり、現に兩方とも結婚を嫌ひ、一生獨身で通すと言つて、兩親を悩まして居るのである。かく夫婦の圓滿を缺く場合に、子供に對する愛が偏頗になるのは、その根柢に性愛的動機が潜在して居るからである。勿論これを意識してやつて居るものではなく、すべて無意識的に行はれるのであるが、父母はこれに由つて各自その満たされぬ愛慾の情を補はうとするのである。かく夫婦愛の缺陷を、子供愛をもつて満たさうとする事は、非常に不自然であつて、家庭教育上面白い現象である。その對象となる子供等こそ迷惑である。前にも屢屢述べた様に、かゝる環境に育つ子は、子供の方でもまた父母を平等に敬愛する事が出来なくなり、男の子は母を慕ひ、女の子は母を侮蔑して父を尊敬し、成人の後にも人を好き嫌ひする

ものである。かくして成長した子女が結婚する場合に、男子は母と酷似した、容貌や性格をもつて居る婦人を選らび、女子もまた同様であつて、父と共通點の澤山ある男子に嫁せば幸福であるが、さうでないとその程度に應じて、或は夫を疎んじ、夫を嫌ふやうになるのである。世の中に、個人的に見ると立派な男女であつて、かゝる事情のために、夫婦の間柄が圓滿に行かない例は決して少くない。かゝる場合には當事者間にもお互になぜ不満なのであるか、その原因や理由が分らず、たゞ何んとなく物足りなく、不満だから不満だと言つたやうな感じがするのである。世間でよく言ふ、家風に合はないと言ふやうなのはかゝる場合を指すのである。かく考へて見れば結婚愛夫婦愛が、兒童の教養上如何に大切であるかを知る事が出来る。

夫婦愛とオイデパス

夫婦愛が家庭における子女の教養上大切なことは既に述べたが、何事でも同じく程度問題であつて、夫婦愛もまた過ぎてはならない。父母が子女を愛する場合に、無意識的に性を選び、父は女の子を、母は男の子をより多く愛する傾向を示すやうに、子供の方でもまた自然に性を選び、女の子は徐々に父に親しみ、男の子はより多く母を慕ふのが普通である。故に夫婦愛を露骨に子供達に見せつけるやうな場合には、敏感な幼兒はその爲めに同性の親に對して強い嫉妬心を感じる事がある。その結果女の子は母を疎んじたり、男の

子は父を自分の競争者の如く感じて、父に反感をもつやうになる事がある。新婚當時に生れた總領が猜疑心の強いのは、そのためだとさへ考へられて居る。ギリシヤの神話に、オイデパスと言ふ青年が、父親を殺害して母と結婚すると言ふ筋の話があるが、あれなどは確かにこの心理を物語つたものである、故に父母たるものはこの邊の事も心得て置かなければならない。

子供の教育は兩親の協同責任

兩親のどちらが、より多く好い感化を子供達に與へるかと言ふ事は、子供がどちらを、より多く愛するかと言ふ事によつて定まるのである。彼等は自分の好きな人を好んで模倣し、不知不識の間に、その感化影響を受けるものである。總べて感化と言ふものは、與へる方でも受ける方でも、無意識であつて、感化を與へてやらうなどと考へて、わざとやつた事は却つて子供の反感を買ふものである。然し如何なる場合でも子女の教養は、片親だけの感化では決して完全に行くものではない。理想的に言へば、兩親から平等に愛され、また子供の方でも兩親を平等に愛し、而して兩親から平等に感化を受けなければならぬのである。よく「この子はお母さん兒です」とか、また「お父さん兒です」とか、得意相に話す親もあるが、子供は兩親の子供であつて、お父さん兒であつてもならないが、同時にお母さん兒であつてもならない。學校などにおいて出來の悪い子供は、多くの場合片親のかけた子

供である。また不良少年少女の群に入るものも、多くは母親のない子供や、父親のかけた子供である事は、周知の事實である。然し折角兩親が在つても、片親から偏愛され、偏頗の感化を受ける子は、程度の差こそあれ、片親のない子供と同じ様な不良の傾向を示すものであるから、兩親間の間柄の如何は、家庭教育において非常に重要な事となる。

繼父母の場合

以上の心理から見ても、最も問題となるのは、なまぬ仲即ち繼父母の問題である。後添ひとなる人も、またその子供等としても、始めは一生懸命に努力して、圓滿にしようと努めるのである。處がまゝ母の場合であれば、實母を失つて繼母を迎へるまでの數年の間即ち父が獨身で居つた間、子供の愛は父一人に注がれ、また父の方でも、子供を不憫に思つて愛溺し勝ちである。そこへ新しいお母さんを迎へるのであるから、どんなによい繼母であつても、一旦出來た父子間の偏愛の傾向は容易に直るものではない。従つて繼母になづまないのである、今まで一身に集めて居つた父の愛をも、幾分繼母に奪はれるのであるから、それに對する嫉妬心やら不満やらが手傳つて、自然に間隙が出來てくるのである。さうなると繼母の方でも折角努力した甲斐がなく、遂に我慢が仕切れなくなつて、三度に一度は角を出すやうになるのである。さうなると、いままで無意識であつた憎惡の念が、意識的となり、母がこんな事を言つたから無理

だとか、あんな事をしたから惨酷だと考へるやうになり、また繼母の方でも負けずに自分の立場を辯護するやうになつて、加速度的に繼母子間が悪化して来る。この場合に最も悪いのは、繼母と娘とであり、次は繼父と男の子の場合である。繼母と娘との不和は、無意識ではあるが性的要素が多分に關係し、そこに嫉妬心が伴つてくるからである。たゞでさへ父は女の子を偏愛する傾向をもつてゐるのが、妻を失つた場合に一層この傾向が強くなる。従つて母を失つた父と娘との情愛は更に固くむすばれることになる。それが繼母によつて奪はれるのであるから、その嫉妬心の強いのも當然である。かゝる場合において娘が盜癖を得たり、不良少女的の傾向を帯びたりする事が少くない。これは多くの場合母を困らせるための手段であり、また反抗の手段であると見る事が出来るのである。また繼父と息子との間柄の悪いのも、同じ心理に基くものであるが、男子は一般に女子ほど嫉妬心が強くないから、繼母と娘との場合ほど複雑ではない。これに反して繼母と息子の關係や、繼父と娘との間柄は比較的簡單である。時には繼母と息子や、繼父と娘との關係は、實父母の間柄よりも、濃やかな事がある。これは實母子間の性愛は、強い自制的壓迫を受けて制限されるが、繼母子の場合にはそれほど強くないためである。また配偶者の死後直ちに後添を迎へた場合と、死後數年間を経て迎へた場合とでは、前者の方が遙かに簡單に行くものである。

第五章 獨り兒の教育

獨り兒の特徴

大人ばかりの中に育つ獨り兒の教養ほど、家庭教育において六ヶ敷いものはない。獨り兒と言へば、多くは無氣力で、臆病で、神經過敏で、學業成績が悪く、自信を缺き、劣等感を抱き、友達が少く、空想的であるのは、周知の事實である。獨り兒の環境の特異性は、彼を取り巻いて居る人々が、みんな大人であると言ふ事である。従つて獨り兒には子供らしさが缺けて居る。毎日朝から晩まで聞く話は、大人同志のお話であり、また見てゐる事も、大人達とする事のみである。獨り兒はこれ等の言葉や行爲を、或は意識的に、或は無意識に模倣するため、自然ませて小ましやくれとなり、早熟で一寸見ると如何にも賢く相になるのである。然しこの賢くさも、多くの場合表面だけであり、猿の人真似式であつて、創造的智識に乏しく、成長するに従つてそれが表面に現はれ、理解力乏しく、數學などの學課が不得意となるものである。また道徳的方面においても、兄弟の澤山ある子供だと、兄弟同志で遊んだり、喧嘩をしたりする間に、自然に我儘がとれ、善惡の標準を主として自己の經驗から學ぶのであるが、獨り兒の場合には智識

を獲得するのと同じく、自己を取り巻いてゐる大人の道德的標準を、そのまま模倣して鵜呑みにして仕舞ふのである。従つて獨り兒は一般に行儀作法は正しいが、成長するにつれて、融通のきかない固苦しい道德型の人となるものが少くない。

獨り兒と劣等感

前にも述べたやうに、獨り兒が発見する世界は、大人のみの世界である。而して子供の目から見た大人の世界は、實に驚異そのものである。彼は自分の力弱さと、大人の力強さと、また大人の智識と自分の無智と、その懸隔の甚だしさに、驚きの眼を見張るのである。従つて早く大きくなりたい、偉くなりたいと言ふ希望は、總ての子供達の頭を支配する共通の願望であるが、特に獨り兒の場合において最も強く現はれるのである。彼等がお母さんの下駄をはき出したり、またお父さんの帽子をかぶつたりするのも、この早く偉くなりたいとあせる本心の發露であつて、笑ふ事の出来ない眞剣な努力なのである。かう言ふやうな願望や野心は、兒童の成長發達のためには、是非なくてはならない必要條件ではある。然しこれもまた程度問題であつて、餘り強過ぎてはならない。殊に獨り兒のやうに、自分と周囲との隔りが甚だしく、従つて早く偉くなりたいと言ふ希望が非常に大きい場合には、いくら努力しても到底及ばないために、却つて失望落膽し、劣等感と言つて自分は駄目なのだと言ふ、自暴自棄の考を起させて仕舞ふ

場合が少なくないのである。特に獨り兒の兩親が傑出した人である場合に、この弊害が甚だしいのを見る。その結果彼等は何事に對しても消極的となり、或は臆病となり、或は自信を失ひ、時には自分の中にある満たされない不平から、イラ／＼した氣分となり、氣六ヶ敷い感情家となることがある。

獨り兒の病弱とその原因

獨り兒の家庭教育における他の缺陷は、育て過すと言ふ事である。一般にかゝる家庭においては子供が珍らしく、何事にも手が届き過ぎるのである。従つて兩親を始め家庭全員の注意が子供に集中され、子供の教育に一生懸命になり過ぎたり、また子供に對して高い期待をかけ過ぎたりするやうになる。その結果一面において兒童は、兩親が自分に對して抱いて居る理想が高過ぎて、それを實現する事の不可能な事を知り、非常に失望して、神経衰弱や其他の病氣にかゝるのである。よく世間には所謂教育熱狂家があつて、朝夕兒童の通學を送り迎へたり、學校を參觀したり、家に歸れば兒童が自習する側について離れないで、口癖のやうに將來偉い人になれとか、立派な人間になれとか言つて、子供を獎勵するものがあるが、之が子供にとつてどれだけ重い負擔であるか分らない。殊に唯でさへ悲觀し勝ちな獨り兒にとつて、この周囲の期待が非常に強い壓迫となり、遂に最後の非常手段として、病氣に

なつて仕舞ふのである。而してこの場合の病氣は、決して單なる病氣でなく、父母が自己に對して有する期待の緩和を懇請し、自己の責任解除を要求する目的を有して居るのである。若し兩親がこの邊の心理を覺らず、早く病氣を直して勉強させようと努力すれば、却つて病氣が慢性となつたり、時には病死や自殺の原因となる事がある。故にかゝる場合に處する手段としては、たゞ醫藥のみによらず、兩親を始め周囲の人々が調子を下げ、兒童に對する期待を低下し、彼等が感じて居る壓迫感を少しでも軽減してやるやうにすれば、自然に自信を恢復し、徐々に全快するものである。近來教育熱の盛んになるにつれて、この種の病人や自殺者が少くないのは憂慮す可き事である。

我儘育ちの結果とその取扱ひ

育て過された獨り兒の他の一面を見ると、所謂内辨慶と言つて、家庭においては唯我獨尊の暴君となり、召使ひの者共は勿論、父も母も自己の意のままに使役し、恰もそれが自分の實力であるかの如くに自負し、自分が偉いからだと言ふやうな誤つた自尊心を抱くものであるが、その辯強い依頼心もち、彼が一步家庭の外に踏み出すと、全然打つて變つて、臆病な意氣地のない子供となるのである。それは彼の家庭が安全過ぎるために、外が不安で仕方がなくなるのである。彼れにとつては自轉車も、電車も、自動車も、牛も馬も犬も、みな心配の種なのである。また家庭の父母が優し過ぎるために、家

庭外の他人が怖かつたり、家庭の人々が自由になり過ぎるために、自分の自由にならない他人に對して不快を感じたり、癢に障つたりするのである。而して獨り兒の最大危機は、楽しい彼の家庭を出て、小學校に入學する時である。この時の彼は恰も、樂園を追はれたアダムやエバのやうな、苦い經驗を嘗めるのである。學校に行けば家庭に居る時のやうに、教師も學友も自分を特別扱ひにしてはくれない。そこで彼の心には淋しさや、不安や不満が一杯になる。その結果流石の内辨慶も、學校では臆病な子供となり、憂鬱な黙り屋となるのである。その不安や不満が特に強い場合には、急に頭痛を起したり、腹痛を催したり、また吐瀉したりして、教師や學友達の注意を自分に集中させたり、介抱を餘儀なくせしめるやうな、常識ではどうしても判斷する事の出来ない様な手段にさへ出るものである。前にも述べたやうに、この種の病氣は單なる病氣でなくて、所謂我儘病であるから、その取扱ひにも手心を要するのである。若し周囲の人々が心配相な顔をしたり、親切に介抱し過ぎたりすると、愈々この傾向が慢性となつて、始末が悪くなるものである。由來獨り兒や我儘の子供に病弱な者の多いのはこれがためである。英語にホールサム・インアツテンションと言ふ言葉がある。これを譯すれば健全なる不注意と言ふ意味であるが、これがこの我儘病の取扱ひに必要な心構へである。即ち一通りの手當はしなければならぬが、努めて冷靜な氣分を持ち、知つて知



らん顔をし、子供に向つてそんな病氣はすぐ直ると言つたやうに調子で、病氣を無視するやうにする、自然病氣が再發しなくなる。

獨り兒は夢想家

獨り兒は家庭において、自分と對立して張り合つてくれる、喧嘩相手がないために、一面においては社會を非常に甘く見、また他面においては夢想的となる傾向がある。元來幼兒は實社會の經驗に乏しく、實際の世界と想像の世界との區別がつき難く、一般に空想的であるのが普通である。勿論想像力の養成は大切であつて、多少空想であつても差支はない。然しこれもまた程度問題であつて、想像が過ぎて空想となり、空想が更に夢想となつては病的であるから、避けなければならない。獨り兒には家庭にお友達がない。その結果彼は自然に想像のお友達を作つて、それと遊んだり、物語つたりするのである。これを側で聞いてみると可笑しいやうである。彼は恰も本當のお友達と遊んでゐるやうに振舞つたり、獨語したりするのである。それがだん／＼昂じて來ると、何事につけても空中樓閣を築くやうになり、夢想的となり、現實の世界を遠ざかり、困難な事にでも遭遇すると、直ちに夢想の世界に逃避して仕舞ふのである(第二十章参照)。その結果彼は屢々神經衰弱となり、無意識的に現實の世界を無視し、成人の後、實社會に立つて生活するに不適當な人となり終るのである。

獨り兒は臆病

獨り兒が臆病な事は度々述べた所であるが、その當然の歸結として、彼は他人の前で無口となり、また競争や試験を嫌ふやうになる。それは競争して負けて笑はれたり、また物を言つて笑はれたりするのを恐れるからである。従つて獨り兒は競争に弱く、試験を受けるのも下手である。家庭でやればなんでもない事が、學校でやると出来なかつたり、平素は容易に出来る問題が、いざ試験となるとさつぱり出来ないと言ふ様な譯で、折角實力があつても、その能力を充分發揮する事が出来ないものである。それがために學業も不成績となり、兩親を始め自分も教師も劣等だと考へるやうになつて、愈々出来が悪くなるのである。そこで彼はこの不名譽を幾分でも挽回するために、學校の學課以外の課目、例へば機械だとか、飛行機だとか、繪畫や音樂などの様な、學校で試験される心配のない事に興味を向けるやうになる。

お友達を與へよ

以上において吾人は獨り兒の環境の特異性と、その結果とについて述べた。その中で最も目立つ事はお友達がないと言ふ事である。これをもつて見ても獨り兒の家庭教育に必要な條件は、適當なお友達を得ると言ふ事である。故にこの缺陷を満たすためには成る可く早い時期において、少し年上なお友達や、年下のお友達や、同年輩のお友達など、一三人を選んでこれと交はらせ、彼等の社交性を満足させ、またこれに由つて前述の諸缺點を

取り除くやうに努めるがよい。これがためには可なり思ひ切つて、家庭を解放し、理解ある家風同志の協力を必要とするのである。

第六章 總領の家庭教育

總領の特異性

總領の教育は獨り兒に次いで六ヶ敷いものである。それは總領が生れた當初の數年間、即ち次の弟なり妹なりが生れる迄、獨り兒であるからである。従つて前章に述べた、獨り兒の心理とその教養とは、或る程度まで總領の心理と教養とにあてはまるのである。申すまでもなく總領は初兒である。初兒は出産からして難産なものも多く、且つ父母が若くて育兒に無經驗なために、種々な失敗もし、また自然珍らしがられ、育て過される事も少なくない。昔から「總領の甚六」と言つて、總領が他の子女に較べて、出來が悪かつたり、身體が虚弱だつたり、神經質であつたりするのも、決して理由のない事ではない。

一口に總領と言つて決して一様ではない。總領が女兒である場合と、男兒である場合とではその趣を異にするのである。所謂「一壺二太郎」と言つて、一般に總領が男兒である場合よりも、女兒

である方が問題は簡單に行くのである。また總領はその次に生れてくるものの性や性格によつても、種々な影響を受けるものである。一般には總領が男兒である場合には、二番目の子が女兒であると云ふやうな風に、性が異つて居つた方が、同性であるよりも双方のためによいのである。これに反して兩者とも女兒であるとか、また男兒であるとか言ふ場合には、二人の間に競争が生じ、自然面倒な事が起り易いものである。總領とその次に生れる子供との年齢の相違も、また問題になる。兩者の年齢が、非常に接近してゐるか、それとも六七才以上も隔つて居れば、比較的簡單に行くが、三四歳位の相違であると非常に面倒である。それは幼兒は滿二才即ち數へ年三才位の頃に、初めて自己と言ふものに目覺め、自分と言ふものを發見し、急に利己的となり、また我儘となるからである(第十三章参照)。たゞでさへこの年頃の子供は取扱ひ悪いものであるが、特に次の子供が生れた場合においては、彼の新しく目覺めた利己心が、弟妹の誕生によつて強く刺戟されるため、その不安が募り、愈々利己的となり、我儘となるのである。

總領の危機

總領の危機は次の子供が生れる時である。前にも述べたやうに、彼は初兒であり獨り兒であつて、數年の間父母の寵愛を一身に集め、また家族の注意の的として、一家に君臨して居つたのである。そこに今のいまままで、夢にも思はなかつた赤ん坊が、突如

として出現して来て、彼の最愛の母を奪ひ去り、家庭における彼の地位と特權とを剝奪するのであるから、彼は恰も王位を退けられた廢帝の如き立場に立つのである。従つて彼の惱むのも、もがき妬むのも、怒るのも決して無理からぬ事である。この場合において總領の煩悶や失望は、彼が獨り兒の時代に、どんな取扱ひを受けて居つたかと言ふ事によつても多少趣を異にするのである。若し彼が我儘に躰けられ、可愛がられ育て過されて、何んでも自由にし、朝から晩までお母さんを占領して居つたと言ふやうな場合には、所謂「恩が仇」となつて、その失ふ所が大きい丈に、その悲しみ苦しみもまた大きいのである。これに反して獨り兒の時代に普通に愛せられ、また規律正しく育てられ、夜分もお母さんと寢床を別にして寝むやうな躰けを受けて居れば、赤ん坊が生れてもその失ふ所が少ないために、その嫉妬や苦惱も左程ではない。更に總領の立場は、父母が新しく生れた弟妹を如何に取扱ふかによつても異つて来る。例へば總領の前で赤ん坊を褒めたり、過度に愛撫したり、夜分母が赤ん坊を抱いて寝たりするのを、見せつけられたりすると、口にこそ出さないが、彼の悲しみ嫉みは甚だしく、その結果、總領の性格が歪んでくるのである。これはたゞに總領のために悪いばかりでなく、また赤ん坊のためにもよい事ではないから、成るべく避けなければならぬ。要するに家庭教育においては、出来るだけ兄弟を平等に愛し、玩具や食べ物なども公平に與へ、

相互に嫉妬心を起させないやうに注意する事が肝腎である。

總領の猜疑心と反抗心

總領の精神的方面を一言で盡せば、猜疑心が強く保守的であると云ふ事である。彼は自分の特權を弟妹に奪はれた事を深く遺恨に思ひ、全力を盡して自己の地位を保持しようと思ふのである。若し何人でもこれを危くするものがあれば、容赦なく退けて顧みない。源頼朝がその弟義經を追ひ、兄思ひの義經を最後まで、反逆者扱ひにしたのはこの適例である。また總領の黄金時代は過去であつて、彼が曾て獨り兒として父母の寵愛を一身に集めて居つた時代が、彼にとつて一生の花であつた。故に彼はその昔を戀しく思ひ、著しく回顧的となり、將來の希望薄く、消極的となり、厭世的となり、また保守的となる。處が弟妹達はこれと反對の理由で積極的となり、進歩的となるのである。その結果兄弟の性格が異ひ仲が悪くなり、遂には親に反抗したり、自ら求めて孤獨に陥るのである。

子供の寢小便

彼は屢々兩親を始め總ての人々が自分を憎んで居るのではないかと言ふ偏見をもち、強い反抗心を抱くものである。而してその反抗の手段として多種多様の形式をとるのである。最も普通なのは父母の言ひ付けを守らなかつたり、學校や家庭において問題を起して、兩親を困らせる事である。また時には、寢小便癖もこの反抗心の現れである事がある。

る。幼兒は二才前後になると寢小便をしなくなるのが普通であるが、暫らく寢小便をしなかつた總領が、二番目の子供が生れると共に、急に寢小便を始めるやうな場合は、十中八九まで、奪はれた寵愛に對する反感不平に基く復讐手段であると見て差支ない。従つてかゝる事情の下に起る寢小便を直すには、單に藥や食物の加減のみでは充分な効果を得る事が出来ないものである。それにはどうしてもその根本に横はる不平不満を満たしてやらなければならない。その外總領は反抗の非常手段として、獨り兒の場合と同じく、頭痛や腹痛などの病氣に訴へる場合も少なくない。

總領の指導方法

總領の立場は必ずしも悪い方面ばかりではない。指導宜しきを得れば、彼等は兄であり、姉であると言ふ優越感から、弟妹の良き模範とならうとする殊勝な考を起すものである。若しその度毎に兩親から褒められ、また獎勵されると、彼は徐々に自信を増し、弟妹を愛撫し、彼自身の内的安全感を確立して積極的態度となり、獨立的人格者となるものである。然しこれも程度問題であつて、餘り兩親が兄たり姉たる責任を強調し過ぎて、一寸にも「兄さんの癖に」とか「お姉さんですからそれくらゐの事は」などと言つた風に、總領としての義務を高調し過ぎると、彼は却つてその負擔に對して重荷を感じ、往々正反對の結果となる事がある。殊に兄や姉が弟妹の面前で、比較されたり、批評されたり、叱られたりすると、彼等は非常

に面目を失し、立腹するものであるから注意しなければならない。總領が人と競争するのを厭ふのも、その始めは兄たり姉たる者が、弟妹と競争して、萬一敗けては面目がないと言ふやうな、引込思案からくるのである。それがだん／＼昂じて來ると、遂にはお友達と競争したり、また學校の試験に對してさへ、不安を感じ忌避するやうになる。その結果獨り兒の場合と同じく、彼はその興味を學校で評價される心配のない、學課以外の事柄に向け、器械いぢりやと、音楽などに熱中するものである。

總領の性格

總領は一般に、弟妹に對して特權を要求し、權利を主張するものであるが、この傾向も、兩親が總領に對して權利を行使し、義務を強調する場合において一層強く現はれるのである。彼は家庭においては弟妹や目下の者を壓迫し、社會に出でては部下に對して嚴格であるが、先輩や上役に對して比較的よく、他人に對しても温厚な人格者であると考へられるものである。これに反して、次男や末子は、冒險的で、強者や長上に對しては強い反抗心を有するが、弱者や部下に對しては無條件に憐憫の情を現はし、屢々骨肉も及ばぬ同情を表すものである。また總領は弟妹に對し、表面的には如何にも自負心を有し、優越感をもつて居る如くに振舞ふが、内面的には小心抑翼々で、負け惜しみが強く、他人の失敗を喜び、その成功を妬むと言ふやう

な卑怯な性格を現はすものである。また初兒である彼は、萬事につけて先驅者であるため、自然他の子供達より、神経を使ふ事が多く、所謂苦勞性であつて、心身共に虚弱となり勝である。斯様な経路を経て總領は甚六となるのである。

以上述べた處によつても、總領の逢着する諸問題と、その特異性の大體を知る事が出来るのである。而してこれが指導教養にも、種々の暗示を受ける譯である。吾人は今こゝにこれを繰返す必要はない、たゞ上述の悪傾向の原因となるやうな事を避けて、出来る丈けそのハンデキャップを軽減するやうに努める事が肝腎である。

第七章 次男次女の教養

理想的家族數

同じ父母から生れ、同じ家庭に育つた兒童でも、その家庭における順位の如何によつて、各自異つた立場に置かれることは、既に屢々述べたところである。たゞに家庭における順位だけでなく、兄弟の數や性の如何がまた兒童の發達に重大な關係をもつて居るものである。アドラーと言ふ人は、多くの經驗の結果、家庭教育と言ふ見地から見ても、

も適當な家族數を八人とし、父母の外に、男の子三人と、女の子三人が最も理想的であり、それより多くても粗製濫造となり、また少なくともよくないと考へて居る。近來若い夫婦の間に、家族の數を人意的に制限し、少數の子供を立派に育てようとする傾向があるが、多少の例外はあるにしても、大體において少數の子供を立派に教育する事は教育學の原則から見て不可能とされてゐる。假りに家庭に三男三女が居るとすれば、次男次女はその中間であつて、家庭教育上最も健全な分子である。然し家庭における子女の教養は、以上の外に素質の相違は勿論、生れた當時の家庭の物質的精神的狀態、兩親の健康、春生れた子供と、冬生れた子供などの相違によつて、複雑極まる影響を受けるものであるから、その取扱ひもまた決して簡單には行かない。

兄弟は仲の悪いもの

人間性の根本の一つは、偉くなりたと言ふ事である。而して人間の努力の多くはこの動機の支配を受けて居ると言ふ事が出来る。偉くなりたと言ふ心理を解剖して見ると、少くとも二つのものがその根柢に横はつて居る。その一つは自分より以上の競争者が居ると言ふ事である、競争者がゐなければ、偉くなりたと言ふ向上心は起るものではない。次にその競争者に對して、多少に拘らず、羨望嫉妬の感情を有して居ると言ふ事である。如何なる人にも、この競争心と、羨望嫉妬心のないものはない。従つて次男次女の

教養を考へるに當つても、この根本心理を無視する事は出来ない。次男次女の家庭における競争者は誰であるかと言へば、稀れには父であり、母である場合もあるが、主として長男であり長女である。従つて次男次女の受ける第一の刺戟は、總領の性格や、學業成績の如何によつて、左右されるのである。昔から兄弟のやうに仲がよいと言ふが、兄弟は最初の競争者であり、互に羨望嫉妬し合ふものであつて、必ずしも仲のよいものでもなければ、また同じ性格を現はすものでもない、一般には總領が神經質で臆病なのに引換へて、次男次女は元気で、冒險的であるのが普通である。然し兄や姉が頑健で學校の成績がよい場合には、弟や妹はその影響を受けて、反對の結果を生じ、意氣消沈し、學業の成績も面白くなくなる場合が少くない。彼等は兄や姉と競争して勝つ見込があれば、希望を生じ元氣を出して努力するが、競争しても到底勝目がない場合には、全然競争を避け、他の方面に向つて活路を開かんとするのである。故に若し兄が數學に得手であるとすると、弟は初めから數學に興味を覺えず、學校に行くにも數學の本を忘れたり、家に歸つても數學の復習を怠る様になるのである。彼は寧ろ兄の不得意な國語とか、文學などに興味をもち、その方面において頭角を現はし、兄を凌駕しようとして試みるのである。また姉がピアノに堪能であると、妹は折角音樂的天才の素質をもつて居つても、これを發揮しないで、他の方面に向ふのである。これを両親から見ると、

同じ兄弟でありながら、どうしてこれほどまでに異なるものかと怪しむ位である。然しこれは必ずしも素質や遺傳の相違ではなくて、寧ろ環境の違いから受ける結果である。斯く考へてくると、優秀な兄姉をもつ弟妹は非常に不利となり、これに反して總領が鈍感な場合には次男次女は有利の立場に置かれる譯である。然しこれも父母や教師の指導の如何によつては、多少緩和する事が出来る。例へば數學に得意な兄をもつて居る場合でも、弟の目前でこれを賞讃する事を慎み、寧ろ弟は兄にも優つて數學的素質が豊である事を暗示してやり、努力さへすれば兄を凌駕する事が不可能でない事へのめかしてやれば、弟も勇氣と希望とをもつて努力するのである。然しかゝる指導は六ヶ敷いものであるから、一般には兄姉に顯著な才能のある場合には、中等學校は勿論、小學校の頃から別な學校に入れ、正面衝突を避け、異つた研究、異つた職業へと向はしめるやうに指導する事が安全である。よく世間では姉さんがピアノが上手だから、姉にピアノを教へさせれば、妹も簡単にピアノを習ふ事が出来るなどと經濟的な事を考へたり、弟の英語の出来ないのは、態々家庭教師を頼まなくても、大學に行く兄に見て貰へばよいなどと、都合のよい事を考へるものである。これは普通の考へとしては一應尤もな事であるが、心理學の原則に反した考へ方である。抑も、弟が英語の出来ない原因は、兄が英語に堪能であるからである。故にその原因である兄さんに英語を教へさせようと

しても弟が氣乗りのする筈がない。これは恰も火を燃さんとして水を注ぐやうなもので、勞ばかり多くて効果の少ないものである。

兒童の向上心とその指導

よく父や母が子供に向つて、獎勵のつもりで、偉くなれとか、勉強せよとか口癖のやうに言ふが、あれは考へものである。多くの場合においてそれが獎勵にならないで、却つて反對に失望落膽の原因となる事が少くない。先きにも述べた通り、偉くなりたいと言ふ考へは、低能兒でない限り、幼い子供の頭を支配する共通の願望である。試みに五六才の男の子供に、あなたは將來何んになる積かと尋ねて見ると、彼等は十中八九までは、僕は東郷元帥になるんだとか、陸軍大將になるのだとか答へるのである。實際兒童の向上心の旺盛な事は父兄には到底想像もつかないほどである。然るにその上にまた父母から、偉くなれ勉強せよと言はれるために、愈々向上心が高まり、遂には自分の實力がこれに伴はなくなり、却つてその結果彼等は屢々失望落膽して仕舞ふのである。殊に多くの場合偉くなる唯一の手段は讀書する事であると考へ、子供等は手當り次第病的に讀書し、自然運動を怠り交友を疎略にし、健康を害し、神経衰弱となり、變人となるものである。かゝる子供が學校に行くと、そこには先生が待ち構へて居つて同じやうに、偉くなれ勉強せよと言ふのであるから、彼等は愈々怖氣づき、根

氣がつきて學業に精が出ないことになる。さうなると今度は愈々小言が激しくなり、落第點をつけられ、操行點を丙にされる。それで問題が解決すればよいが、却つて悪化する場合が少なくない。元々子供が勉強しなくなつたのは、彼等に向上心がないからではなくて、寧ろそれが過當に刺戟され過ぎるからである。子供に限らず總ての人間の有する向上心は、單なる向上心ではない、その根柢に強い名譽心と言ふものが潜んでゐるのである。彼等の偉くなりたいと言ふ向上心の裡には、偉くなつて人に認めて貰ひたいと言ふ、根本動機が働いてゐるのである。従つて大人と言はず子供と言はず、或る事に成功した場合に、成功それ自身よりも、その成功を他人がどう言ふ風に考へてくれるかと言ふ事に、大なる關心をもつのである。折角努力してもそれが認められないと、彼等は自暴自棄となり、今度は反對に悪い事をしたり、病氣になつたり、極端になると自殺をしてまで、世人の注意を喚起しようと言ふやうな事さへやり兼ねない。これに反して僅かの努力でも、父母や教師に認められると、彼等はこれに満足し、一層落着いた氣持ちをもつて、眞摯なる努力を繼續して行くのである。古來教育の原則として「叱るより褒めよ」と言ふのはこの心理を言つたものである。

次男次女の性格

以上は主として智能に對する兄弟相互の影響や感化について述べたのであるが、性格や職業などについても同じ様な考慮が拂はれなければならない。

例へば總領の性格が勝氣であると、弟妹は一般に温厚となり、これに反して兄や姉が温厚な場合には、弟や妹は元氣であつたり、また屢々亂暴だつたりするものである。その他朝起きの習慣などにしても、總領が朝寝坊だと妹や弟は早起となり、反對に姉や兄が早起きであると弟妹は朝寝坊をやると言ふやうなものである。かゝる場合に弟や妹の素行を矯正する積りで、お姉さんのやうに大人しくしなさいとか、お兄さんのやうに早起きになれなどと訓戒する場合には、弟妹は父母の思惑に反して、却つて益々亂暴になつたり朝寝坊をしたりするやうになる事がある。これは前節において述べたと同じ心理で、弟妹に自分達の立場を、父母に認めて貰ひたいと言ふ切なる願望があるからである。處が兄や姉が温厚であつて、自分が少し位大人しくしても、到底認めて貰へないと觀念すると、彼等は前途に光明を失ひ、失望落膽して粗暴となり父母にまで反感をもち、両親を困らせるのである。故に若し兄や姉が温厚であつても、また早起きであつても、弟妹の目の前で、これを褒めたり、兄と弟とを比較したりせず、弟妹は弟妹としての美點を發見してやり、これを認めてやると、彼等の亂暴や悪い習慣も自然に矯正されて行くものである。

家庭教育と職業の選擇

職業の選擇についても、兄弟姉妹間の比較や競争は、不健全であつて兩立しないものであるから、成る可く異つた職業を選ぶ方が

無難である。この場合において、父の職業と子女の職業との關係について述べる事も無意義ではない。一般に子供は父母の職業に對して種々な意味において、多大な關心をもつものである。子女の中には、父の職業を尊敬するものもあれば、物足りなく思ふものもあり、また嫌ふものもある。父母の職業を尊敬する場合にも、たゞ單に尊敬するだけで、自から進んでその職業を繼承しようと言ふ希望や勇氣の起らないものと、父の職業に憧れこれを受け繼いで行かうとするものがある。父が偉大でその道において大成した人である場合には、子供等は父の職業を尊敬はしても、進んでその後繼者とならうとはしない。これは父のやうに成功を収める事が覺束ないと言ふ懸念があるからである。これに反して父がその道において思ふ様に成功しなかつた場合、即ち子供から見れば父を凌駕する可能性がある時には、子女は父の業を繼いで熱心に努力し、屢々大成する事がある。例へば父が一生涯下級の官吏で終つたとか、平巡查であつたとか言ふ様な場合には、子供は屢々父が望んで得られなかつた、高位高官の地位を獲る事がある。これに反して父が大實業家であるとか、大政治家であると言つた様な場合には、子供をして無理にその職業を繼承させても、大成しないものである。然るに世間では屢々この心理を無視して、何んでも彼でも父の職業を繼がせようとしたり、また兩親の虚榮や欲望を満足させるために、子女の興味や傾向に何んの頓着もなく、勝手に子供達

の職業を決定する事がある。三代目に賣家札が出たり、不肖の子供が續出して兩親を惱ますのはここに原因があるのである。然し一般的に言へば、偉人の家庭に育つ子女は、その素質においても、環境においても、有利な條件と可能性とに恵まれて居るのであるから、子女の興味や傾向を考慮して適當に指導すれば、決して悲觀したものではなく、相當な成功を收める事は寧ろ當然である。

第八章 末子の家庭教育

末子の環境

獨り兒や總領の育て難い事は既に述べた所であるが、末子の教導も決して簡單には行かない。或る所へ最近一週間に相談に來られた方は、三人が三人とも末子の問題であつた。考へ方によつては末子は總領よりも育て難いとも言ふ事が出来る。彼の家庭における環境を一言にして言へば、彼を取り巻いて居る家族がみんな自分より年長であると言ふ事である。彼は何時でも家庭において一番小さな存在である。この點において末子は獨り兒の環境に類似してゐる。然し獨り兒の場合には同じく年長者でも、父母や祖父母などであつて、年齢においても、智慧や力においても懸隔が甚だしく、また相互の間に餘り競争心や嫉妬心は起らないが、末子

の場合には兄さんや姉さんなどが存在し、其の間に激しい競争心や嫉妬心が起るのが普通である。末子は時々「いま五年たてば十二才になるから兄さんにまけるものか」などと、はかない空想に耽るが、それも暫くすると、五年たてば兄さんは十七歳になるんだと言ふ事に氣づいて、軽い失望を感じるのである。結局何時までたつても、猫の尻尾で追いつく望みがないと言ふのが、彼の場合である。末子が怒りつばいのも、我儘なものも、非社交的なものも、みな彼の環境の然らしむる所である。

末子は早熟で勝氣

末子の智的生活は一般に早熟である。これは彼が幼少の時から兄や姉の側で、種々な事を聞きかじつたり、習ひ覚えたりするからである。大概の末子は四五歳位になると、可なりませた事を言ふやうになり、親の欲目には「この兒はなんと利口なんだらう」と見えるものである。このませた智慧と兄や姉に対する反抗心とが結合して、末子を理窟つばい子供にして仕舞ふ。彼は兄や姉や兩親が何か不合理な事をしたり、言つたりすると、すぐけんつくを喰はせたり、彼等を凹ませるやうなこさかしい小理窟を言ふのである。これは必ずしも末子に限らず、周圍に自分の競争者や反對者が居る場合には、誰でも理窟つばくなつたり、また自然固苦しい道徳家になるものである。それは各々自己の立場を擁護するに必要な手段なのである。末子が一面において非常に批評的で、他人の缺點によく目がつき、また他面において自分の立

場を辯護し、屁理窟を列べるのはこれがためである。然しかゝるこさかしさは、彼の生活のどこかに無理のある證據であつて、決して衰めた事ではない。また彼の屁理窟も強がりも、多くは虚勢であり、自負心の缺乏から來た空威張りである。

次に末子の感情の方面を見ると、彼が著しく氣むづかしくて、勝氣であると言ふ事に氣がつく。彼は小さい辯に（或は小さいから、と言つた方が適當かも知れない）決して姉や兄に負けてはゐないのである。元來人間には自己保存本能と言つて、自分の安全を欲する強い欲望をもつて居る。而して弱いものほど勝氣で、この安全に對する欲求が強く、少しでもこの感情が亂されると、非常に憤慨するのである。彼は周圍の總ての人々が彼を馬鹿にしてゐるのではないかと邪推し、兄や姉が一寸笑つても自分が嘲笑されてゐる事のやうに感じ、他人の話をして居つても、自分の悪口を言つて居るのではないかと氣を廻はして、兄や姉に反抗してかゝる。然し彼は兄や姉と争つても到底勝ち目がないので、自然無茶苦茶な事を言つたり、亂暴を働き、自分を迫害の中に居る小英雄に擬して、悲壯なる假想を逞うする事がある。

鹿山少年の場合

智的早熟と勝氣の感情とか結びついたのが、鹿山某と言ふ少年の場合である。彼は今小學校五年生である。鹿山少年のお父さんが先週著者の知人を

訪問した三人の中の一人である。お父さんは「親の口から申しては變ですが」と前置きして、次の事をお話された「息子は學校において非常に出來がよく、只今は五年ですが、五年の課程は勿論、六年生の學課も容易に出来るので、昨年の二學期から六年生の方に行つて、尋常六年の生徒と一緒に勉強して居ました、處が六年生の仲間に這入つても矢張り一番になつたので、今回受持の先生と相談の上で、某府立中學の入學試験に應じた。すると試験係は正當な試験もしないで、落第にしたので、少年は非常に残念がり、どこかの私立中學でもよいから入學したいと申します、彼は尋常六年に行くのなら、もう馬鹿らしいから嫌やだと言つて居るが、どうしたものでせう」との相談であつた。私の知人がその方は末子ですなと言ふと、お父さんはさうですと答へた。お父さんはなほ語を續いて、昨年東京市の懸賞論文に一等で入選し、上野動物園の一ケ年間のパスを頂いた事や、日滿協會の論文にも當選した事や、少年自から大日本史を編纂して居る事や、兄や姉は勿論、父や教師にも屢々理窟を言つたり、けんつくを喰はせる事や、讀書が好きで朝から晩まで書物ばかり読んで居る事や、先日来支那の佛教と言ふ本を借りて來て讀んだが、支那の佛教を理解するには、印度の佛教と哲學との知識がなければ駄目だと言つて、大人でも難解の印度哲學の書物を、圖書館に通つて讀破した事などを細々と話した。それ等の話を聞き終つて、私の知人は鹿山さんに言つた、それは決してほめた

事ではない、早熟も負けず嫌ひも、そこまで行くと全く病的です、それでは喉ぞ健康が悪いでせうと尋ねると、鹿山氏は少年の運動嫌ひの事、青さめた顔をしてゐる事、今年の正月にも何んとかして運動をさせたいと思つて、風あげに連れて行くと、何時の間にか獨りで家に歸つて來て、書齋に閉ぢ籠つて居つた事等を話した。友人は鹿山氏に向つて、今の間に何處か刺戟の少い所に轉地でもして、一ケ年間休養させ、健康の保證がついてから中學に入れた方がよいと忠告して歸したのである。これは鹿山少年に限つた事ではない、小兒が學問に熱中すると言ふのは一種の神經衰弱の結果である。神經過敏と言ふ事と、出來のよいと言ふ事とは、殆んど同意義である。殊に所謂遊び盛りの小學生が學問に熱中すると言ふ事は、不自然であつて寧ろ憂ふべき事である。かゝる兒童が成長すると強度の神經衰弱にかゝり、十で神童二十で凡人、三十頃になると癡人同様になるのである。鹿山少年の如き例は極端であるが、末子群の中にはこれに類似したものが少くない。

末子の泣き蟲とその矯正

末子が女の子である場合には鹿山少年の場合と正反對に、弱蟲で困るものである。これは彼女が兩親を始め周圍の人々から寵愛され、兄さんや姉さんと喧嘩などをする場合にも、理否の如何に拘らず、父や母が末子に加勢し、小さいものをいぢめる者は馬鹿だなどと、兄や姉を叱りつけ、末子をかばふからである。たゞでさ

へ自分の小さい事や無力な事に愛想をつかせてゐる彼女等は、これによつて愈々劣等感を得て弱蟲になつて仕舞ふ。さあさうなると、彼等は自分の弱い事を保護色とし、この弱さを利用し、自分のやうな弱い者は當然總ての人々から保護を受け、同情される可き權利があるかの如くに考へ、弱き事を武器とし、所謂「泣いて勝つ」と言つた卑怯な戦法に出るのである。これが泣き蟲の心理状態であり、末子の場合である。私の知つてゐる今年十七才になる末娘は、學校の通學以外には、一寸と外出するにもお供を要し、市内の某區に嫁して居る姉を訪問するにも獨りでは出られないほど氣の弱い娘である。また彼女は非常に臆病で、この年まで夜は獨りで寝る事が出来ないと云ふことである。夜分などにもガツと戸の音がしても怖がつて、家人を呼び起す始末である。これなどは何れも自分の弱きを賣り物にする、我儘から來るものであるから、この種の我儘や、泣き蟲を矯正するには、子女に自信と勇氣とを與へる事が必要である。而して子供に自信を與へるには主として家庭の躰けに依らなければならぬ(第三十七章参照)。

末子の偏愛とその影響

前にも述べたやうに末子ほど兩親に愛されるものはない、それは種々の理由がある。兩親について見れば年老いて愈々愛情がこまやかになり、また子供について見ると、彼はこさかしくて幾つになつてもベビーで家庭の愛嬌者

である。従つて兩親が末子を深く愛すると同時に、末子の愛も強く兩親に結付けられる事になる。その結果彼の愛情は他の人々へは發展しないのである。普通の場合には、幼児の頃は父母を愛するが、弟や妹が出来る、父母の愛が弟妹に移り行くに従つて、子供の愛情もまた父母を離れて、兄弟やお友達に向ふものである。然るに末子の場合には、親子愛が餘り強く深くなり過ぎて、成長の後も固着して離れない。その結果末子は一般に非社交的となるのが彼等の通弊である。これを總領の場合と較べて見ると正反對である。前者は社交的で人に親しみ易く、後者は兩親にこそ愛嬌のよい子供であるが、他人に對しては不愛嬌で、利己主義な我儘ものである。かゝる事情の下に育つ末子が女性である場合には、屢々同性愛となり、異性に對して反感をもち、偏頗な性格を現はすやうになる事がある。また男子である場合には、母子間の愛情が一層強く固着し、屢々父を自分の競争者の如く考へて、疎み憎み妬む事さへあるのである。

末子の危機

末子に限らず我儘育ちの子供が學校に入學すると、種々な事が表面に現はれて來て問題を起すものである。家庭に居つてお山の大将であつた彼も、學校においては案外臆病者である。家庭で育て過された子供の特徴とも言ふ可きものは、お友達が出来ないと云ふ事と、先生に親まないと言ふ事である。その結果學校に行くのがだん／＼面白くなる。

學校に行くのが面白くなければ、自然學業に身が這入らなくなる。家庭に居る頃は大變利發な子供だと思つてゐたのが、學校に行くとさつぱり出来なくなるので、兩親は不思議でならなくなる。時には、先生が悪いのではないかと、考へ過ごしたりする。然しこれは多くの場合誤りであつて、どんなに素質がよくても、我儘育ちの非社交的な子供は決して出来るものではない。最近私の知人を訪問した三人の中の他の一人の、石山さんの場合はその一例である。石山さんの娘は去年の四月小石川區内の第二流の某私立女學校に入學したのであつた。處が先日學校から呼び出され、主任の先生のお話によると、彼女は學校において學業成績が悪いばかりでなく、先生の言ふ事を聞かず、反抗的でもて餘して居るから、轉校して貰いたいと言ふ事であつた。この娘は四人兄弟の末娘であつて、お父さんは九年前に死亡し、お母さんの手一つで育つた愛娘である。お母さんにして見れば自分達にあれば優しい娘が、そんなに悪い筈がないと考へ、先生の態度を誤解してゐるやうに見える。そこで彼は我儘育ちの子供が、家庭と學校とにおける態度の相違について、参考となるやうなお話をして歸されたのである。

末子の指導

以上は主として末子の弱點を指摘し、これが矯正について述べたのであるが、末子もその指導宜しきを得れば、兄や姉の經驗を利用し、精神的浪費より免れ、

彼等の保守的な態度に比して進歩的となり、拔群の出世をする事がある。吾人は屢々冒險家や探検家や革命家として、新方面を開拓する有用な材を、末子群から發見するものである。

第九章 男の子と女の子

男女の相違

同じ子供でも女の子の教育と、男の子の教育とは種々な點において異つて居る。近來女と男とはその根本において區別がないなどと言つて、男女の同權たるべき事を主張するものがあるが、これは何等科學的根據のない感情論であつて、婦人自身のためにも、社會のためにも喜ぶ可き事ではない。然し女と男とが異つて居ると言ふ事は、男女の優劣の問題とは全然別個の問題であつて、男女が同じだから同權だと言ふ議論が必ずしも成立しないやうに、異つて居るからと言つて、同權でないと言ふ譯もない。進化論から觀て、男女何れが先きに存在して居つたかと言ふと、寧ろ生殖を司る女性が先きであつたのである(第三章男女の起原の項參照)。また原始時代においては、母系時代と言つて、女が家長であつた時代も存在したのである。然るに其後物質文明や智識文明が長足の進歩をするにつれて、分娩や育児に精力を用ひて居た婦人が

遅れて、物資の獲得や、智識の蒐集にのみ精力を傾倒してゐた男子が、優先的地位を得るやうになつたのである。かく考へて見ると男女の優劣論は、時代思潮と密接な關係があるものであつて、決して絶對的のものでない事を知るのである。今や時代は再び母性の意義に目覺め、精神文明の重要性に覺醒し、婦人の地位も徐々に向上しつゝある事は誠に喜ぶ可き事である。

男女の生理的差異

男女の相違の根本は、どこにあるかと言へば、先づその生理的差異である。男女の生理的相違の内でも最も顯著なものは、生殖に關する諸機關である。男女の生殖機關を比較して見ると女子の生殖機關は男子のそれより遙かに複雑である。男子には女子の卵巢に相當した精囊はあるが、子宮に相當するものを全然缺いて居る。殊に婦人の月經はその重要な特異性である、この月經は二十八日(週期)には多少個人差がある)毎に來潮して、多くの精力を婦人から奪ひ去るのである。更に妊娠十ヶ月間の苦痛、分娩時に受ける種々の外傷、授乳から受ける精力の消耗等を數へ來れば、女子が男子に比して、體力の上において如何に多くのハンデキアツプを有して居るかを知らる事が出来る。次に内分泌の點について見ても兩者には種々の相違がある。殊に生殖腺から分泌されるホルモンにおいて、男女間に顯著な相違を認める事が出来る。男子が年頃になると聲變りがしたり、筋骨が逞しく、鬚を生じ所謂男らしくなるのも、女子の皮下

脂肪が増加して曲線美を呈し、皮膚が艶々しくなるのも、みなこの男女の異つた生殖線のホルモンの内分泌に基いて起るのである。更にこの生理的相違が心理的相違に關聯し、その感情方面においても男女間に著しい違ひが生じてくる(第二十二章参照)。婦人が所謂母性愛と言つて、優しい感情や柔和な愛情を發露し、男子が所謂男らしい剛健な氣象を現はすのもこれがためである。

女は弱い

男女の生理的・心理的相違を総合して見れば、女子は男子より總ての點において弱いと言ふ結論に達するのである。然し弱いと言ふ事は必ずしも悪いと言ふ事ではなく、寧ろ婦人の特徴であると言ふ事が出来る。而して女性の弱さは、やがて婦人の生活態度の根本基調をなして居るのである。由來婦人は依頼心が強いとか、社交的であるとか、他人中心と言つて、自分に對する他人の言行態度に強い關心を有して居るとか考へられて居るが、これ等はみな婦人の弱さから來る必然的な生活態度なのである。また感情の方面においても、婦人が心配性であるとか、嫉妬深いとか虚榮心が強いとか言ふ事は、矢張りこの婦人の弱さから來てゐる。力が正義であり、物質が萬能であると考へられてゐる時代においては、弱き事は惡であり罪であり、女は魔物であり無意義の存在であるかの如くに取扱はれるが、前にも述べたやうにこれは絶對的のものではなく、時と共に移る一種の時代的偏見に過ぎない。強き事の中に善もあり惡もあると同様

に、弱き事の中にも惡もあり、また善もあるのである。例へば依頼心と言ふと惡く聞えるが、この相互に相倚り相頼む精神が發して社交心となり、協同心となるのであつて、強いものばかりでは、家庭の平和や社會の協同は期せられない。また嫉妬深いとか、心配性とか言へば、如何にも惡く響くが、かゝる感情の他の一面には婦人の注意深さや、愛情の濃やかさが示されて居るのである。而してこの愛情、この細心の注意が、母として妻としての必要な條件ではないか。勿論現代の様な社會組織においては、婦人の多くが種々な意味において曲弊アヒュスされて居るがために、動動もすると婦人の美點が覆はれ、その欠點のみが顯者に現はれてゐる場合も少なくない。何れにしても婦人の弱いのは婦人の特徴であり、男子の強いのは男子の特徴であると言つて差支ない。シエクスピーヤが「弱き者よ汝の名は女なり」と言つたのは、彼が果してどう言ふ意味で言つたかと言ふ事を詮議立てる必要はあるまい。人類に關する限りこれは永久不變の事實であり、また婦人に對する最高の讚美の言葉であると思へる事が出来る。柔よく剛を制すると言ふ語があるが、男女に柔剛の差別がある所に、道德の基調が生じ、社會生活の妙趣が湧き、國家の消長がかゝつて居るのではあるまいか。處が近來所謂自覺したと稱する婦人達の中には、男かぶれがして、男子に反抗して行かうとする傾向を示すものが少くないのは、婦人自からを知らざるためであり、また不健全なる思想と言ふ可きで

ある。所詮男女の差は、智識や物質の量的差異でなくて、内容の差であり、質の相違である。従つて家庭教育においても、男子と女子との間に自然異つた方法手段が講ぜられなければならない。

女子の劣等感とトムボーイ

過去における人類の足跡を尋ねて見ると、一種の男女の争闘史の如き觀がないでもない。而して今日の現状は言はば男性が征服者で、女性が被征服者の様な立場に置かれてゐるのではあるまいか。その結果男子は一種の優越感をもつて女性に臨み、女性もまた自から被征服者の地位に甘んじ、劣等感を抱くやうになつたのである。どこの國でもさうであるが、殊に我國においてはその弊が強く、その結果女が女である事を嫌ひ、自己の性に對して不平を感じ、男子を羨望するやうになつたのである。

幼児が男女の性別を意識し始めるのは、大體四五才の頃である。この頃の子供等がよく「僕は男だ」とか「私は女だ」とか話し合つて居るのを聞く事がある。然し彼等の性意識は漠然たるものであつて、その内容や意味の理解を缺いて居るのである。それは彼等が「お母さんは男？ 女？」などと尋ねてゐるのを聞いても明かである。また彼等の或るものは、大きくなれば女でも男になれる位に思つて居るものも少くない。東京市内の某幼稚園に通つて居つた女の子が、一家と共に一ヶ年の豫定で滿洲に行く事になり、幼稚園の先生に暇乞ひのために挨拶に行き、お母さんが一ヶ年たて

ばまた戻つて参りますから、その時は宜敷くと言ふと、側から女の子が、「私こんど歸つてくる時は男になつてくるわ」と言つたとの事である。これは決してこの女の子に限つたことでなく、多くの子供が無意識的にこんな事を考へて居るのである。著者は曾て某女学校の二三年生約三百名の生徒に、あなた方は女であつた事をどう感じますかと尋ねた。すると殆んど全部の生徒が「女などつまらない、男になりたかつた」と答へて自分を非常に驚かせたのである。これを見ても如何に婦人の劣等感が一般的であるかが分る。自分の性に満足しない女の子は、機會の許す限り男の子と遊び、所謂トムボーイ（男の様なまねをするオテンバ娘の稱）となつて無意識的に男の子を模倣し、屢屢粗暴の行動をするものである。彼女等が年頃になると、君だとか僕だとか言つたやうな亂暴な言葉遣ひ、煙草を吸つたりするのである。近頃水の江某（一名ターキー）と言ふ男装をする女優がある相であるが、この男装女優は女學生間に多くのファンをもつて居ると言ふ事である。次に掲げた手紙は、或る女學校の上級生から、水の江某を紹介してくれと、お友達に依頼したものであつて、劣等感を有する現代の女學生氣質の一面を代表したものである。

「やす子さん、ターキーのレターさんきゆう、

おゝ僕のターキー！

ボクあのレターをよんで、こうふんしちやつたわ、だつてあんまりすてきなんですもの、貴女なんか浅草が近くていゝわねえ、

ボクなんか、ちよつと出るにも大變よ、さつして下さい、ウヘヘー、

もうターキーの事となると勉強なんてそつちのけだわ、もう死んでもいゝからターキーと話がしたいわ。

あゝ、あゝあんまりこうふんしたのでなんて書いていゝかわかんないのよ。

あしたは試験なの、今勉強しようと思つたけれどターキーの事を思ふと勉強なんて頭に入らないから、このレター書いてるのよ。

もう朝から勉強なんて手につかないの、一日中ターキー、ターキーの事ばかり、あゝもう死んぢやいそうよ、ボクも英語でベチャ／＼話せるといゝわね、そしたらターキーに紹介してもらへるわ、ウヘヘー

きつと／＼君三月に紹介してよ、うれしい／＼ボク紅十六君も大好き、ハッピー、スターでせう、可愛いゝわねえ、

それから月島も好きよ、それから青葉もすい分いゝでせう、三日にはせひ／＼いらつしやいね、

ウエルカムするわ、ターキーのお話たくさんしてね、三日までまてなかつたらどうしよう、三原山よ、タンゴローザはいつまでやつてるの？ おしへてよ。ちやまたレター頂戴ね、これから勉強しなきゃならないから

これで バイバイ

ターキーの

ターキーの

やす子さん

バルホーより

同性愛と月經不順と盜癖

女子が劣等感を得て、自己の性に對して不平を抱くやうになると、トム・ボーイになる事は既に述べた所であるが、或る者は

反動的に男子を極端に嫌ひ、延いては結婚を厭ふやうになる場合がある。この種の婦人は好んで職業婦人とならうとする傾向がある。殊に女醫や女記者や看護婦になつたり、また社會主義者や共産黨員となるものも少なくない。然し最も普通な現象は同性愛に陥る事である（第二十七章参照）。男に同性愛が少なく、女子に多いのはこれがためである。かゝる婦人は結婚しても夫婦關係を樂まず、屢々性的不感症のものも少なくない。また婦人の月經異常も、性に對する不満が原因となる場合があると考へられてゐる。これは月經が婦人の特徴であつて、月經を経験する毎に自分の女性た

る事を強く意識し、不快の感情を伴ふためである。また婦人の盜癖も自己の性に對する不平不満から來る事が少くない。元來盜癖の心理は、たゞに物質が缺乏して居ると言ふだけでなく、心に不平不満のあると言ふ事が主要條件である。而して婦人が自己の性に失望し、強い不満を抱いて居る場合に、無意識的發作的に萬引行爲などとなつて現はれる事がある。殊にかゝる盜癖が婦人の月經時に最も多く現はれるのも、注意す可き現象である。

かく婦人が自己の性に對して不平不満をもつと言ふ事は、たゞに一個人の問題だけでなく、大きな社會問題である。どんなに女子の高等教育が盛んになつても、その根本において性を肯定しないやうな教育は有害であり無益である。或る意味において今日の女子高等教育は、男子に對する反感を助長させ、自己の性に對して不満を抱かしめるやうな傾向はあるまいか。もしあるとすれば憂ふべき事であり、矛盾の甚だしきものである。所詮婦人の教養の根本は、先づ婦人達が自からの性に對して満足を感じ、喜びを感じた上の事であれば絶対に不可能である。

女性の劣等感とその原因

著者が曾て小學校の五六年の女生に、なぜみなさんは女が嫌やですかと尋ねた事がある。すると或る者は「でも女は弱蟲だから嫌だ」と答へるものもあり、「昔から偉い人はみんな男なんですもの」と答へる子供もあり、中に

は、女の子だと自由に遊べないとか、木登りが出来ないからつまらないなどと答へるものもあつた。また或る時同じ年頃の女生徒に、なぜ男になりたいかと言ふ題で作文を書かせると、男の子は大事にされるから男の子になりたいと言ふ意味の事を、長々と書いた。これ等の事を綜合して見ると、女子が劣等感を得る原因に對して多くの暗示を與へられるのである。よく女の子の後に男の子でも生れると、人も我も男の子だと言つて大切にするのである。また家庭において父や母が娘を叱る時に、よく「女の子の癖に」などと言ふ事があるが、あれがどれ位罪のない女性の氣持を害するか分らない。或る女學校の三年生の手紙の一節に「私の父母は口癖のやうに、お前は女だから女學校でも卒業すればそれでいゝと言つて居ります。それは私だつて女である事は知つてゐます、然し餘り言はれると腹が立ちます、私の兄はこの春仙臺の二高を卒業して帝大の試験の準備最中です、父母は兄の事だと一生懸命ですが、私には餘りかまつてくれません……」と書いてあつた。女子の多數が何んとはなしに、かう言つた両親の態度から、女子はつまらないものだと言ふ考を受ける事が少くない。その他父が母を虐待する場合、父が吞氣で母ばかり苦勞して生活して居る家庭に育つ女子なども、劣等感を得るものである。殊に母が既に強い劣等感を有し、自分が女であつた事に不満を感じて居る場合においても、その不満が自然に子女に傳染するものであるから、氣をつけなければ

ばならない。

婦人の病弱と劣等感

ハドフキルドと言ふ人の著書に出てゐる一婦人の例は、この關係において興味あるものである。この婦人と言ふのは、ロンドンの郊外に住む年の頃二十三才の人であつた。彼女は少女時代から兎角健康勝れず、或る時は胃病だと言はれ、また或る時は心臟病だと診断されて、常に醫藥に親しみ、醫師の手當を受けてゐたが、一向に効果がなく、病勢は募るばかりであつたので、最後にハドフキルド氏を訪れて精神分析を受けたのである、その結果病氣の原因について次の様な事が判明した。彼女は三人の姉妹の總領であつたが、まだ七八才の頃、或る日母に連れられて近所の家を訪問したのであつた。處が、その家には揃ひも揃つて同じ年頃の男の子供が三人居つたのである。その折に母は如何にも妬まし相に、彼女の頭を撫でながら「ほんたうにうちでは女の子ばかりで困ります」と愚痴をこぼした。これを耳にはさんだ彼女は、なぜお母さんは私が女で困るのだらうと考へて見た。勿論彼女にそんな事が合點がゆく筈がなかつた、それ以來彼女はほんとなく自分の性に對して不満を感じ、母に對しても反感をもつやうになつたのである。話をつゞめて言へば、この不平不満が不安となり煩悶となり、憂鬱となり、神經衰弱となり、食慾不振となり、榮養障害となつたのである。かく不用意に發せられた母

の一語が子女の一生を支配するやうな大問題を惹き起すのであるから、心しなければならぬ。

男の子の躰け

最後に男の子の躰の事について一言述べて見よう。男子は女子より奮闘的であり、また利己的である。彼は自分の幸福のために他人を要しない、また周囲の人々の喜びや悲しみにも比較的無頓着であつて、自己満足の境地に浸る事が出来るのである。

彼はまた冒險的であり積極的であつて、禁止された事は却つてやつて見たいと言ふやうな癖をもつてゐる。従來男子の教育は學問第一で、家事の手傳や家庭の躰などは等閑にして居つたが、これは誤つた考へである。女子に禮儀作法が必要なら、男子にも禮儀作法が必要である。女子は十四五才から先きになると自然家事にも手傳はされ、學校においても家事や育児などについて教へられるが、男子はそんな事には全然無智であり無關心である。かゝる男子が成長して父となつた時、果してどうであらうか。洋服のボタン一つつけるにも妻を煩はし、御飯の炊き方は勿論、炭火のつき方も掃除の仕方も知らず、家庭においては何一つ出来ない片輪者となるのである。或る若い將校が家庭に歸つて子守をさせられたとき、子守歌を知らないので、一、二、一、二、と號令をかけ乍ら子守をしたと言ふ話を聞いた事がある。昔は家事を知らないのが男の誇りであつた時代もあつた。然し今日のように忙がしい世の中で、然も女中を置くと云ふ事は容易でない時世においては、男子も家庭

において或る程度まで家事の手傳をする必要がある。夫婦が共同共勞する處に、眞の家庭の和樂があるのである。よく男子は家庭における妻の働きを簡單に考へ、ぶら／＼遊び暮してでも居るかの様に考へて居る者も少くないが、それは所謂認識不足である。而して男子が將來家庭において妻の協同者となるには、幼少の時から家庭においてそれ相當の躰けを受けなければならない。殊に最も缺けた點は家庭における男女間の禮儀作法である。男の子は幼時から姉や母に對してたゞ親しむだけでなく、相當な敬意を拂はせるやうに躰け、かりそめにも女性を卑めるやうな事があつたら、嚴重に戒めるがよい。

第十章 祖父母及び婢僕と家庭教育

二つの方面から

祖父母は家庭における重要な家族であり、家庭教育においても可なり深い關係をもつて居る。従つて家庭教育より見た祖父母の立場を考へる事も決して徒勞ではない。祖父母の家庭教育の關係を二つに分けて、祖父母と孫との關係と、祖父母と孫の父母との關係とに分けて考へる事が出来る。前者は直接祖父母が孫に對して感化を及ぼす場合で

あり、後者は主として祖父母と子供の父母、即ち姑と嫁、舅と婿との關係であつて兩者の間柄の如何が、間接に孫の教養に及ぼす影響感化である。

祖母育ちはなぜ甘いか

昔から「お祖母さん育ちは三百文安い」と言ふ俚諺があるが、祖母育ちの子供は、可愛がられ過ぎ、甘やかされ勝ちであるのが普通である。祖父母は一般に自分の子供より孫の教養に對して、より深い興味をもつものである。どうして祖父母がそんなに孫に關心をもち、孫を甘やかすかと言ふとこれには種々な理由がある。祖父母が一定の責任ある仕事をもたず、比較的閑散であると言ふのもその理由の一つであらう。更に自分に對する息子の愛が嫁に奪はれ、娘の愛が婿に奪はれ、そこに缺陷を感じ、これに羨望嫉妬とまでは行かなくても、一種の淋しさが加はり、その缺陷を満たし、その補償を得んがために、孫を愛玩すると言ふこともあり得るのである。また祖父母は經驗も豊富なために、何事につけても無經驗な嫁や婿に對して、心許ないと言ふ老婆心から、大切な孫の教育に參與し干渉する向も少ない。祖父母の愛護が行届き過ぎたり、溺愛に流れ、自己満足となり勝ちなのは、これがためである。

祖父母と孫との間の溝

祖父母と孫との間の問題は、兩者の相違の大きいと言ふ事である。祖父母は長い間社會にあつて、所謂具さに辛慘を嘗め盡し、何事

につけても相等の経験を有して居る。これに反して孫は全く無力であり、無経験である。また祖母は過去を重んじ、過ぎし日の追憶に生活し、何事をするにも過去の経験から割り出され、著しく保守的である。これに反して兒童は希望に輝き將來の理想に生きて居るのである。従つて祖父母の黄金時代は過去であり、幼き人々の黄金時代は將來にある。かく兩者の間には甚だしい懸隔があり、謂はば兩者は各々人生の兩極端を代表して居るやうなものであつて、祖父母と孫との間に、精神的理解の缺けて居るのもまたかゝる事情の然らしむる所による。

嫁姑の折合

次に祖父母と父母、殊に祖母と母即ち嫁と姑との間柄が孫の教育に及ぼす關係を考へて見よう。夫婦間の圓滿が子女の教育に絶對の必要條件である事は既に述べた所であるが、それにも増して必要な事は祖父母と父母との圓滿な關係である。處が古來嫁と姑との關係は六ヶ敷いものであつて、夫婦の間柄よりもその圓滿を缺く可能性が多いのである。嫁と姑との折合ひの悪くなる原因は一つにして足りない。年齢の相違、個性及び趣味の相違、智識及び教養の相違、道德觀念の相違等々挙げ来れば限りもない。この外若い夫婦達に對する嫉妬心の加はつて居る事も見遁す事は出来ない。この嫉妬心かもとで起つた感情に理窟をつけ、理論の假面を著せて互に争つても決して果てるものではない。殊に祖父母と父母との感情の行き違ひが、表面に

現はれる場合に、多くは孫の躰の問題に關聯して起るものである。従つてこれが子女の家庭教育に及ぼす弊害は想像以上に甚だしい。

婿と舅との不和が生んだ悲劇

夫婦が不和になつた場合に父は父、母は母で、思ひ／＼自分の氣に入つた子供を勝手氣儘に愛するやうになると同じ心理で、嫁姑の間が圓滿を缺く場合にも祖父母と父母とが、それ／＼自分の好きな子供を手馴づけるのである。かくして嫁姑間の不和の影響が子供達に波及し、祖父母が長女を愛する場合には、父母は自然に次女を愛すると言ふやうな譯で、こゝに愛のバランスが破れ、その結果不良兒が出來たり、家庭の悲劇が起つたりするのである。左に祖父母が愛育した子供を中心として起つた、悲劇の實例の一つを述べて見よう。この事件は某地の方面委員である著者の友人の取扱つたものであつて、文中私と書いてあるのは友人の事である。

「K青年は或る都市の醸造家の長男である。彼が生れた時兩親にも勝つて喜んだのは、初孫を得た祖父母であつた。當時祖父母は別宅に隠居して居たので、彼等は初孫であるKを自分達の住んでゐる隱宅に連れて往つて、世話をするのを無上の楽しみとした。Kの生家の兩親は醸造業者の常として、多忙なるまゝに却つてそれをよいことにして、後に起つてくる悲劇を夢にも知らなかつた。

一寸附記しておきたい事は、Kの父が婿養子であると言ふ事である。彼はKの家の小僧から番頭になり、而してK家の長女の婿に選ばれた人で、舊家によくあり勝ちな、功利的な立場から、嫁になる可き娘の意中も聞かずに、親達が勝手に選んで夫婦にしたと言ふ道順をふんだ間柄であつた。悪いことには、Kの母は養子を好いて居なかつた、彼女は自分の夫になつた養子を、自分の家の番頭扱ひにし、輕蔑して居つたのである。養父母とても同じことで、養子を番頭扱ひにし、口汚く罵ることも度々であつた。Kはかゝる環境の裡に成長した。彼には一人の弟と二人の妹とが、次から次へと生れた。

Kは祖父母には愛されたが、Kの父には愛されなかつた、その代りKの父はその弟を愛した。母はどちらかと言へば、Kを愛して弟を輕んじた。妹達に對しては、兩親とも同程度の愛をもつて居た。Kは少年時代を通じて祖父母の家に過した。然しKが商業學校へ入學すると共に、勉強の傍ら商業見習のため、實家に連れ戻された。この時からKの愛憎は始まつたのである。彼はまた一回も彼の父を父と呼んだ事はなかつた、食事も數へる位しか父と共にせず、勿論打ち解けて父と子とが親しく物語るやうな事は殆んどなかつた。父もKを眼中におかぬ態度をKに示すのが常であり、これに反して弟の方を熱愛して居つた。

Kは商業學校を卒業してからも、父が店に居る時には決して姿を店に見せなかつた。彼はよく外出をして家に落付いて居る日は稀であつた。その理由を祖父母は養子なる父の責任として責めた。これに對して父の方では反對に祖父母の罪に歸した。それが原因で兩者の間には、常々暗雲が深ふやうになつた。かくて不愉快な年月は過ぎて、祖父母に残された生命はだん／＼短くなつた。或る日祖父母は養子夫婦を呼んで、後繼の事を相談した。處がKの父は當然Kに後繼さす可きだとの衆議を排して、Kの弟に家名を繼がすべき事を強調して、問題を複雑に導いた。これが累を家庭に及ぼし、KとKの弟との間の不和の原因となつたのである。丁度その頃Kは私の宅を訪れて、彼の一身上の相談をもちかけた。Kの相談を受けた私は、事件が甚だ複雑してゐるので、何れ再會を約して別れた。私はそれから數日後の朝、私が病床でその日の新聞を擴げて見ると、驚かされたことは、Kが私を訪ねてから數日後の朝、私が病床でその日の新聞を擴げて見ると、驚かされたことは、Kの弟が鐵道自殺をしたと言ふ記事であつた。この事を知ると直ちに、私は病を押してKを訪ねた。Kの弟の自殺の原因は、家族の者にさへ不可解であつた。この事があつて以來、Kは急に愛憎の度を増して、一ヶ月後には無斷家出をして仕舞つた。幸に彼が停車場で切符を買つたのを、驛員が知つてゐて教へて呉れたので、行先きが分り、私は彼を追ひかけて、或る温泉場の旅館の一室に、遺書

を認めて居る所を發見して連れ戻したのである。その以後祖父母や兩親の依頼によつて、私はKを自宅に引きとつて、Kの心持ちを常態に復せしむる方法を講ずることにした(以下略)。

家庭における祖父母の立場

以上の實例によつても分るやうに、祖父母が初孫に及ぼす感化、それに關聯して起る祖父母と父母との不和、それが子女等に與へる種々の惡影響は際限もなく複雑である。これは家庭教育上容易ならぬ問題である。氣の毒な事ではあるが、孫の家庭教育者として、祖父母はその責任者でもなければ、また適任者でもない。然し祖父母が孫の教育者として適任者でないからと言つて、彼等が邪魔だと言ふ譯ではない。祖父母には祖父母の立場があり、嫁や婿にはまた別個の立場がある。殊に祖父母は家庭における最高の尊族であり、家庭の傳統の保持者であり、一家の功勞者として尊敬を一身に集めて居るのである。故に彼等は常々子や孫達の感謝の目標となり、またその奉仕のまとなり、家庭の長老として、若き人々を愛するより、寧ろ彼等の愛を喜んで受ける立場に立つべきである。また嫁や婿の立場から見ても彼等が祖父母に奉仕して行く態度は、やがて我が子が自分に對する態度となり、家庭における親孝行の實物教育として、必要缺くことの出來ない條件である。かく考へて見れば祖父母の存在は家庭教育において重要な意義を有して居る事になるのである。然し祖父母がかかる自覺に達す

るのは決して容易なことではない。若き人々に修養が必要である様に、老人にも老後に處する修養が必要である。申す迄もなく人間は年齢が進むに従つて立場が異つてくる。子供には子供としての道があり、青年には青年の處世道があり、父となり母となれば、人の親としての修養が必要である。また職業から見ても、官吏や軍人であつた時と、退職して實業界に入つた時とは、その立場が異なり、従つてこれに處する道が多少異なり、修養も異なる筈である。故に我々は一生涯その立場々々によつて、異つた修養をしなければならぬ。殊に老後に處する道については一層その感が深いのである。然るに多くの場合、祖父母がいつまでも自分が若かつた時、即ち父であり母であつた時のまゝの標準をもつて生活し、孫に接して行かうとする處に無理が起り、彼等の不幸は勿論、孫をも不幸に導く結果となるのである。

女中と家庭教育

最後に一言、女中や婢僕の事を述べてこの項を終る事とする。女中は家庭にあつて子供達と接觸する時間が比較的長く、その交渉が可なり深いのである。場合に由つては、婢僕の感化影響は父母のそれよりも深い事がある。従つてその人選にも周到の注意が必要である。然し如何に人選を嚴密にしても、將來は兎も角、今日においては、女中にでも出るやうのものは一般に教育の程度が低く、性格的にも暗いものが少くない。尤も女中にも

下働きの勞働本位の女中もあり、奥女中もあり、子守もあり、家庭教師的のものもあつて、一樣ではないが、何れの場合においても、外の仕事は兎も角大切な子供の教養は、女中任せにする事は危険であるから、出来る丈け父母の手によつて行はなければならない。

主婦が女中に對する扱ひ方もまた大切な問題である。女中だから缺點だらけなのは當然である。だからと言つて主婦が何時も女中を叱つてばかり居つたり、ぶつ／＼不平を言つたり、或はこれを酷使するやうな事は家庭教育上面白い事ではない。かゝる主婦の態度はやがて子供等の女中に對する態度となり、延いては子供等が家族外の他人に對する態度にも、多少の影響を與へ、德育上面白からぬ結果を來すのであるから、女中の待遇の改善は、單に社會正義の點のみでなく、家庭教育上から見ても重大なる問題である。勿論女中であるから自から働きが異ふ。然し精神的待遇においては成る可く自由を與へ、家庭の一員として人間の一人として尊重して行く事が、たゞに女中そのものためだけでなく、家庭の幸福のためでもある。畜生と同居すれば畜生となり、人と同棲すれば人となり、幼き人々の心は、その環境に由つてどうにでもなるのである。かく考へて見れば、女中の人選や、その待遇などに對しても、なほ一層の深慮が致されなければならない。

第二篇 年齢別に觀たる家庭教育

第十一章 緒言——年齢別に就いて

年齢別の必要

兒童は「小形の大人ではない」と言ふ事は近來よく言はれる言葉であるが、實際その通りであつて、大人と子供との差は、量の相違ではなくて、内容の差であり、質の差である。これを解剖學的に見ても子供の骨と大人の骨とは、その長さが異つて居るのみでなく、骨と骨との割合も異つて居る。例へば兒童の大腿骨と頭蓋骨との割合は、大人のそれと非常に異つて居る。又骨の長短の割合丈けでなく、骨の質に於ても非常に異つて居る。概して幼兒の骨は軟骨が多く、石灰分が少い、之に反して大人の骨は石灰分や磷を多量に含み硬化して居る。本能に就いて見ても、食欲の如く生後直ちに現はれる本能もあるが、社交本能の如きは數年後になつて始めて現はれ、性慾本能の如く十數年後に現はれるものもある。また近來は内分泌が人間の生活に非常に關係のあるものであると言はれて居るが、その内分泌の如きも年齢によつて非常に

異つて居る。例へば胸腺の内分泌は幼兒期において最も盛んに行はれ、十三四歳に達すると全く萎縮して仕舞ふが、生殖腺の如きは青年期に至つて分泌をはじめるのである。また感情の如きも年齢によつて非常な相違があるものであるから、家庭教育に於ては、その年齢に應じ、適宜な方法を講じなければならぬ。

自然年齢とその缺陷

普通年齢と言ふと自然年齢の事を言ふのである。即ちあの人は何年何月生れであるから、今何才何ヶ月であると計算するのである。これは最も一般的の年齢計算の方法であつて、普通の場合にはこの自然年齢を使用しても差支はない。然し正確に言へば兒童の發育の状態は、各自異つて居つて決して一樣ではない。これを外形的量的の方面から見ても、身長體重を始め、頭圍、胸圍、内臟機關等發育の状態が、各々個人／＼によつて異つて居る。早熟の兒童もあれば、晩成の子供もある。殊に智能や情意などの精神的方面に於いては、その差が一層甚だしく所謂十人十色である。然るに今日に於ては自然年齢をもつて唯一の成長發達測定の標準として、滿六歳になれば誰でも就學を強制せられ、滿十二歳にならなければ、如何に優秀兒でも中等學校の入學試験に應ずる資格はない。處が實際に調べて見ると、滿六歳の兒童の中にも、滿八歳の精神年齢に達して居る子供もあれば、滿四歳以下の精神年齢の兒童もあるの

である。斯かる見地からすれば、家庭においても學校に於ても、兒童の精神及び肉體の發達を測定し、それに適した教育を施すことが必要である。例へば或る子供は滿五歳で小學校に入學を許可することも出来ると同時に、他の子供は滿七歳でなくては入學を許可しないと云ふ事が制定されてもよい譯である。

年齢の種類

年齢を正確に測定するには兒童の身體や、智能や、道德などの各方面に互つて觀測し、これを一々一定の標準に當て嵌めて決定するのである。今その主なる標準を挙げれば自然年齢の外に、解剖學的年齢、精神年齢、生理的年齢、學業年齢(教育)、社會年齢(道德)等である。年齢測定に當つて注意すべき事は、男女の性別である。女子は概して十歳前後から、男子より發育が早く、十三四歳になると約一ヶ年位男子より早熟し、十六七歳になると再び男子と同等となり、その後は男子の方が先きになるのである。各種の年齢を正確に測定する事は決して簡單ではない。これにはどうしても専門家を煩はさなければならぬ。従つてこゝにはその大略を述べる丈けにとゞめて置く。

解剖學的年齢

解剖學的年齢と言ふのは、主として兒童の軟骨の硬化の状態によつて決定する標準である。身長をはじめ、肉體發達の基礎をなすものは、骨格であるか

ら、骨の成長及び充實をもつて發育の標準とするのは當然の事である。前にも申した様に、初生兒の長骨は殆んど全部軟骨である。それが徐々に長大し、骨化して硬化するのである。骨の成長の有様は場所により多少異つて居るが、非常に面白いものである。例へば上膊骨の如きは、初めは三個の軟骨から成立し、中央の長い骨を骨幹といひ、前後の短い骨を骨端と言つて居る。その三個の軟骨の兩端が伸びて遂に一本の軟骨となり、それが徐々に骨化して、一人前の強い骨になるのである。

殊に腕骨の骨化は種々の點に於て、八歳以下の兒童の解剖學的年齡を決定する標準として非常に便利である。腕骨は八個の骨片から形成され、約一ケ年に一個の割合で骨化し、普通滿八歳になると、全部骨化するのである。骨化した骨をX光線で見ると黒く映り、軟骨と明らかに區別することが出来る。故に或る特定の兒童の解剖學的年齡を知らうとすれば腕骨をX光線に照らして、その黒點を數へればよいのである。ピヤノやオルガンなどの様に指先を使用する學習は、腕骨が全部骨化してから始める可きものであると考へられて居る。若しそれ以前に始めると、神経質な小供となり、結局大成しないのである。

精神年齢

精神年齢を測定するには、智能検査即ちメンタルテストに依る。これはフランスのビネーと言ふ人が創設したものであつて、今日では日本でも可なり一般化して

來た。その方法を述べると、先づ各年齢に應じた檢定標準(試験問題)があり、それに由つて測るのである。試みに滿七歳の精神年齢の檢査標準を擧げて見ると大體次のやうである。(久保博士兒童心理學に據る)

- (一) 三個の一錢銅貨と、三個の二錢銅貨とを與へて、その總計を尋ねる。
- (二) 右の手はどれ、左の耳はどれと尋ねて、これを指示せしむる。
- (三) 未完成の繪を示して、不足した部分を指摘せしめる。
- (四) 赤黄青緑の四種の色を示して、その名を尋ねる。
- (五)(六) は略す。

今或る兒童の精神年齢をテストする場合に、大體適當と思はれる標準たる六個の問題について試み、その結果一部分は正解し他の一部分は不能又は誤つたとすれば、順次に標準を低下してゆき、遂に六問題全部が正解出来る年齢標準まで下り、更に反對に順次に年齢標準を高めて、遂に六問題共全部不能の標準まで上げて行くのである。かくして得た結果を計算するのであるが、その計算の方法は次の様にするのである。先づ全部正解を得た標準が滿七歳のものであるとすれば、滿七歳を基準にし、滿八歳の標準六問題の中、四問題の正解を得たとすれば、一問題を二ヶ月(六分の一)と

計算して八ヶ月を得、次に満九歳の標準六問題中、三問題が出来たとすれば、これを六ヶ月と計算し、満十歳の標準は全部不能であるとすれば零であるから、以上の三つを加へた總和を以つて、その兒童の精神年齢とするのである。即ち7歳十ヶ月十6ヶ月=8歳2ヶ月となる。

智能指數

次に智能年齢を自然年齢で除して、これに百を乗じて整数としたものを智能指數と言つてゐる。智能指數とは、或る特定の年齢の兒童の智能が、その年齢の常態の人に比して、幾何位の割合になるかを示すものであつて、今假りに満十歳の兒童の精神年齢が八歳二ヶ月だとすると、その兒童の智能指數は、 $\frac{8\text{歳}2\text{ヶ月}}{10\text{歳}} \times 100 = 82$ 即ち八十三となる。而して智能指數の多寡によつて、兒童を大體左の通り區別するのである。

三五以下	白痴
二五—五〇	痴愚
五〇—八〇	愚鈍
八〇—九〇	遲鈍
九〇—一一〇	普通兒
一一〇—一二〇	優良兒

一一〇—一四〇	秀才
一四〇以上	天才

生理的年齡

生理的年齡と言ふのは、主として生殖機關の成熟の程度によつて測定する年齢である。女子に於ては月經の來潮、乳房の發達、發毛の程度、男子に於ては聲變りなどが、生理的年齡を測定する手掛りである。女子の初經の年齢は榮養や、氣候環境などの關係で多少の遲速があるやうである。一般に妊娠時及び生後の榮養の悪い兒童や、氣候の暑い所に育つた者、性的刺戟の多い環境に育つた子女達は、性的成熟が早いと考へられて居る。我國の女子が月經を初めて經驗する年齢は、満九歳から十七歳までの間である。然し最も多いのは満十三歳乃至十五歳である。而して男子の性殖機關の成熟は、普通女子より一ケ年乃至一ケ年半遅れて居る。

生理的年齡を廣く解釋して内分泌腺の消長をも考慮に入れる人がある。この種の人々は、人生を幾つかの時期に區分し、胸腺時代(嬰兒期)、松果腺時代(兒童期)、生殖腺時代(青年期)などと名付けて居る。胸腺時代と言ふのは、心臓の上部にある黄色を帯びた胸腺の内分泌の旺盛な時期を言ふのである。これは前にも述べた通り、嬰兒期に於て最も盛んで、十三四歳になると、全く休止して仕舞ふ。従つて各内分泌腺の活動の状態に照らして、生理的年齡を測定する事も出来る譯である。

學業年齢

學業(教育)年齢と言ふのは、精神年齢を決定するのとほぼ同一の方法で、既に學習した智識を測定し、この程度に由つて、小學校二年の智識があれば、その兒童の學業年齢は、滿八歳であると言ふ風に評定するのである。前にも述べた様に精神年齢は、智能の素質を測定するために用ひ、學業年齢は學習の結果を試験するために用ひるものであつて、今日一般に諸學校で行はれて居る試験が、學業年齢の測定に相當するのである。

社會年齢

最後に社會(道德)年齢に就いて考へて見よう。社會年齢と言ふのは、兒童が、家庭、學校、社會等、自己の屬する團體の風俗、習慣、道德などを理解して、これに適應し、實踐して行く能力の程度に由つて、評定する年齢を言ふのである。普通滿三歳迄の子供は自己的であつて、他人を理解しまた人と協同する事は出来ない。この時代を個人主義時代と言ふ。次に四歳以上六歳以下の小兒は數名のお友達や家族と協調する事が出来るのが普通である、この時代を家族時代と言ふ。更に小學校に入るやうになると、學校の規則に適應し、十人乃至二三十人位の人々と協同が出来る様になる。此の時代をギヤング時代と言ひ、十三歳から十八歳迄位をクラブ時代と云ひ、十八歳以上の男女になると普通自分の屬する國家の法律、道德、慣習に適應する能力が出來て來る。これを國家時代と言ひ、最後に三十歳以上に達すれば、國際時代と言つて、世界の情

勢を察知し、これを自己の國民生活や、家族生活に取り入れて行くことの出来る能力を有するに至るのである。此の標準に照して或る個人の社會年齢を評定し、若し極端に個人主義であつて、家庭や社會において圓滿を缺く人があるとすれば、此の人の社會年齢は、滿三歳であると測定するのである。また滿十五六歳の中等學校時代の少年を則定した結果、その少年は、我儘で學校に於て友人が出來ないと假定すれば、その人の社會年齢は滿六歳(家族時代)であると云ふ風に測定するのである。歐米各國においては、社會年齢を細目に分けて、協同とか寛容とか忍耐とか、正直などの各徳目に就いて、もつと精密な測定法を研究して居る。

其他の年齢測定法

以上の外血壓を以て生活年齢を測定する方法もある。これは九十を以て初生兒の基本血壓(上膊動脈)とし、血壓が百十五であれば、生活年齢が二十五歳であると測定する類である。また年齢の齡と云ふ字が示して居るやうに、齒の發育及び腐蝕の度合をもつて、年齢を測定する場合もある。警察醫が死後數ヶ月を経た、變死人などの年齢を測定するには、主として齒の磨滅の程度によるとの事である、齒の中には六歳臼齒などと言つて、年齢を冠した名稱さへ使用して居るものもある。

斯く考へて來ると、一口に年齢と云つても、決して簡單には行かない。正確に言ふならば、或る

人の年齢を表示するには、自然年齢が何才何ヶ月、解剖學的年齢が何歳と云ふ風に、各方面から測定した年齢を現はさなければならぬ譯である。然しこれは専ら個性調査の場合に必要なのであつて、一般には自然年齢を使用しても差支ない。

兒童の各時期

兒童は日に月に發達して行くものであるが、これを精細に觀察すると、その進歩の過程に於いても幾つかの階段がある。兒童を研究し、その特徴を知り、これを指導して行く上に於て、この階段を知り、これを數個の時期に分類して取扱ふのが便利である。本篇においては左の如く時期を區別し、各時期に於ける兒童の心理と、その家庭教育に就いて述べる事とする。

胎兒期（母胎内の二百八十日間）

乳兒期（零歳より滿一歳迄）

幼兒前期（滿三歳迄）

幼兒後期（滿六歳迄）

兒童前期（滿九歳迄）

兒童後期（滿十二歳迄）

少年少女期（滿十四歳迄）

青年期（滿十四歳より十七歳迄）

第十二章 胎兒期の教養

受胎の日から數へて、二百八十日間即ち出生の日までを胎兒期と云つて居る。

妊娠の生理

受胎と云ふ事實は、男子の精子と女子の卵子との結合する現象を言ふのである。

次に順序として受胎作用について簡単に述べる事とする。

女子の卵子は約四週間に、一回に一個づつ卵巢から喇叭管を通じて、子宮に送られるのである。また男子の精子は一耗立方の中に何千とあるほどに小さいもので、平素は精囊の中に閉息し、アルカリ性の液中においては、盛んに活動する事が出来るが、酸性の液體中にあつては活力を失つて仕舞ふものである。處が婦人の腔の内壁からは酸性の液を分泌し、子宮からはアルカリ性の粘液を分泌する。そこで腔内に這入つた多數の精子は、酸性の粘液と闘ひつゝ、アルカリ性の粘液を傳つて、子宮腔口に向つて進行して行く。その途中優勝劣敗の原則に従つて、最も優秀な精子が子宮内

に進入し、更に進んで喇叭管の膨大部にいたつて卵子と結合すると、こゝに初めて受胎と言ふ現象が起るのである。

妊娠の期日

精子の生命は一定して居ないが、女子の腔内に這入つてから、數時間乃至數日間生存して居る場合があると考へられて居る。故に體内に這入つて直ちに受胎しなくても、精子の生存期間中は何時受胎するかも分らないのである。また女子の卵子が卵巣から喇叭管に送られるのは、普通次の月経日より數へて十三日内外であると考へられて居る。また卵子が卵巣を出てから、受精能力を有する期間は約一週間であつて、その後は衰弱して遂には枯死して仕舞ふのである。従つて受胎即ち妊娠の期間は、一般に月経後十日頃から二十日頃までの間であると考へられて居るが、必ずしも確定した説ではない。

染色体と遺傳

精子及び卵子は、各々四十八本(二十四對)の精糸を有して居る。この男女の精糸は受胎に際して、減數分裂をなし相合して、矢張り四十八本の精糸となるのである。精糸には染色体と云つて、或る特種の色にのみ染まる性質をもつて居るものがある。而して女子の精糸中にはX染色体二本を有し、男子の精子の精糸中には、X染色体とY染色体とが各々一本づつある。而して男女の精糸が結合する場合において、一般に同種の染色体同志が相合し

て、一つになるのであるが、女子のX染色体と男子のY染色体とは例外である。女子のX染色体と男子のY染色体と結合する場合に、Y染色体が優勢だとXを驅逐してYとなり、これに反してX染色体が優勢の時には、XはYを併呑してXとなるのである。而して前者の場合には男子が生れ、後者の場合は女の子が生れると考へられて居る。また精糸はそれ／＼異つた遺傳要素をその中に包含して居ると考へられて居る。例へば或る精糸は肺臓に關し、他の精糸は神経系統に關する遺傳因子を傳達すると云ふ風に、四十八本の精糸は各自別々な遺傳の基礎となつて居ると言はれて居る。而してX染色体は智能の遺傳の媒介をなすものと信ぜられて居る。然るに前述のやうにX染色体は女子の精糸中には二本あるが、男子の精糸中には一本しかない。従つて親子間の智能の遺傳の相關係は、母親は父親の二倍となるのである。即ち母親の賢愚が子女に及ぼす影響を一とすれば、父親の智能の影響はその二分の一となる。昔は母は借腹などと云つて、母親の素質を軽く見て居つたが、これは間違つた考へであつて、受胎生理から云へば寧ろその反對である。

胎兒の成長

受胎した時の胎兒の大きさは約〇、〇二耗であつて、唯一つの細胞に過ぎない。この單細胞が次から次へと分裂によつて成長し、二百八十日の後には、その容積においては約二千五百萬倍となり、重量においては約十億倍となり、細胞の數においても約四百

兆倍となるのである。胎兒は受胎より出生の日迄の二百八十日間に、單細胞のアミーバ様の生物から、爬蟲類魚類等の時代を経て、哺乳動物から人類に至るまでの、進化の歴史を繰り返すものであると考へられて居る。例へば受胎後一ヶ月の頃は魚に類似し、また二ヶ月頃になると猿に類似し、徐々に發達して完全なる人の子として生れ出るのである。胎兒の發達の順序を略述すれば、一ヶ月目には鳩卵大となり、二ヶ月末には鶏卵位の大きさとなる。この頃の胎兒の頭は非常に大きく、全身の約半分を占め、手足は比較的小さい。三ヶ月目には鷲鳥の卵大となり、男女の性が判別し四ヶ月目には毳毛を生じ、性別が愈々明瞭となつてくる。五ヶ月目には頭髮を生じ、胎動を感じ心音も聞えるやうになる。六ヶ月目には胎動がだん／＼活潑となり、七ヶ月目には内臟諸器官が大體完備し、八ヶ月目には早産した場合においても、生きて行くに差支ない丈の體力が出來て来る。

胎兒の内臟機關

胎兒の心臓は成人に比して比較的小さく、母體より臍帶を経て血液を受け、血行を營むのである。而して胎兒の血液循環系統は、大人のそれとは甚だ趣を異にして居る。動脈は心臓に比して比較的大きく、これに反して靜脈は小さい、従つて脈搏は非常に多く、五六ヶ月の胎兒の脈搏は百三十回乃至百四十回を算する。また胎兒は全然肺呼吸をして居ない、従つて肺臓は比較的小さく、呼吸回数は多い。

胎兒の生活と榮養

胎兒の生活を一言に云へば、母體に對する寄生生活であると云ふ事が出る。彼等は直接には何等の生活活動をも營んで居ないのである。例へば胃腸の如き消化器にしても、直接には榮養物を攝取せず、臍帶を通じて母體から血液を受けて生活して居るのである。また耳や眼などの感覺器官にしても直接外部との交渉なく、彼等は全く音のない世界、光のない世界に閉居して居るのである。従つて胎兒の教育も、胎兒の衛生もみな母體を通じて行はれねばならない。母體と胎兒との交渉は、母體から胎兒に送られる血液を通じてなされる。一言にして言へば胎教は清淨な血液を、豊富に母體から胎兒に送る事にあるのである。これのために適度の運動も必要であり、また安靜な睡眠も必要となつてくる。申すまでもなく妊娠中の疾病は非常に胎兒に有害である、殊に熱病に罹る事は一番危険であるとされてゐる。母體がチフスやマラリヤ等を患つた場合、生れる子供の多くは低能又は白痴になると云はれて居る。伊豆大島の藤倉學園に收容されて居る低能兒を調査して見ると、その中約六十パーセントは、母體の熱病がその原因だと言ふ事である。

次に胎兒の榮養は母體の榮養によるのであるから、母親は妊娠中努めて消化のよい榮養物を攝らなければならぬ。惡阻つはりやその他の原因で、榮養不十分の場合の胎兒は生後概して病弱である。子

供の榮養は早いほど効果的である。少年期より兒童期の方がよく、兒童期より乳兒期の方が一層効果的であり、更に胎兒期の榮養は一層有効であるから、妊娠中の榮養は非常に大切であると言はなければならぬ。また妊娠中母體が餘り働き過ぎると、過勞の結果、血液内に毒素を生じ、従つて自然毒素を多量に混入した血液を胎兒に間接に供給する事となり、胎兒の衛生上有害である。著者の遠縁に當る某家の夫人は人一倍の働き者で、夫が政治運動に没頭して居つたにも拘はらず、一代に産をなして地方の大地主となつた人である。この婦人には九人の子供があつたが、子供の懐妊中にも夜を日に繼いで働いてゐた、その結果生れた子供達は何れも虚弱で、過半は幼年の頃に病死し、その他の子供も青年期に病歿して、結局母親獨り生き残つたのである。

胎教の原理

胎教を極端に主張する人は、母體の一舉手一投足が、すべて胎兒の肉體は勿論精神にも影響すると言つて居る、例へば妊婦が火事を見て驚くと、その子供は生後火事を恐れ、母が妊娠中犬に嘯まれると、生れた子供が犬を怖がり、甚だしきは妊娠中母の見た夢まで、その儘胎兒に影響すると言ふのである。これに反して胎教を全然否定する人達に言はせると、胎兒は母の體内にあつて成長するけれども、もと／＼別個の存在であつて、精神的にも肉體的にも、母體と胎兒とは全く無關係だと主張するのである。これは何れも極端な説であつて、正

鵠を得たものとは言はれない。實際はその中間であつて、或る程度迄母體の行動感情は、胎兒に影響を與へるものである。この關係を説明するには、感情の起原や心理を説明しなければならぬから、詳しい事は感情別家庭教育(第二十一章)に譲る事として、こゝにはその大略を述べて見よう。吾人が外界の刺戟を受けると、そこに種々の内分泌が起る。その分泌物が血液に混ざると、身體の諸機官に様々の變化を與へるのである(かくして起つた身體内の變化の感覺を感情と言ふ)。殊に母胎の血液には深い關係を及ぼすのである、故にその血液を受けて生活して居る胎兒に、多少の影響を與へるのは當然の事であつて、従つて同じ感情が屢々繰返される場合においては、その影響も一層深くなり、出生後多少これを認める事が出来るのである。而して感情は主として副腎と稱する腎臓の直ぐ上にある臓器から分泌されるアドレナリンに起因するものであるが、妊娠すると副腎が著しく肥大し、平素より外界の刺戟を受け易くなり、感情的となるのである。故に妊婦は、恐怖とか、忿怒とか、嫉妬とか云ふ様な、激情を避け、成る可く安靜な生活をするやうに努めなければならぬ。

妊婦の嗜み

昔から我國においては妊婦に對する嗜として、「婦人は妊娠すれば寝るに側たす、坐するにかたよらず、立つに跛せず、邪味を食せず、左道をふまず、割め正し

からざれば食せず、席正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せず、目に悪しき色を見ず、耳に悪しき聲を聴かず、口に悪しき言葉を出さず、手に悪しき器を執らず、夜は正しき書を読み、朝に起きては立居振舞を正しくすれば、その子形容端正にして、才徳人に勝る」などと教へて居るのである。

第十三章 乳兒期の心理と教養

出生期

誕生から約一ケ年までの兒童を乳兒と言ひ、その期間を乳兒期と言ふのである。然し人によつては、胎兒期と乳兒期との間に、出生期といふ時期を置く場合がある。

出生期とは、母胎の陣痛から始まつて誕生するまでの僅々數時間内外の短期間であるが、而もこの時期は、人生にとつて最も重要な時期なのである。この時には母子共に非常な苦痛を経験するものである。よく「生みの苦しみ」と言つて、母體の苦しみもさる事ながら、生れ出づる子供の苦痛は母胎のそれにも増して容易ならぬものであらうと想像される。頭が壓迫されたり、手足が枉げられたり、引張られたりするので、大抵の新生兒は多少の負傷をしないものはない。出生時に受ける負

傷を「出生の外傷」と云つて居る。母體も大切であるが新生兒は更に大切であるから、成る可く外傷を與へない様に注意しなければならない。出生時の苦痛は兒童の記憶には残らない、然しこの時期に於ける亂暴な取扱が原因となつて、肉體的には不具者となつたり、精神的にも種々の悪影響を受け、恐怖心を得て一生臆病な人となる場合がある。かく出生期において受ける精神的障害、主として恐怖の感情を、出生期の内傷と言つて居る。殊に此の種の内傷外傷は、難産の子供に最も多く見られるのである。

初生兒の取り扱ひ

更に出生後約一週間を新生兒又は初生兒と言つて居る。新生兒は前にも述べたやうに、退行作用を行ふものである。幼兒が曾て母胎内にあつた

時には、寒さ暖かさも程よく、しつかりと胎盤に包まれて子宮内壁に附着し、手足を縮めて、安樂に眠り續けて居つたのである。それが急に外氣に觸れ、自分の身を支へるものがなくなるのであるから、彼等が不安を感じるのも當然である。それで新生兒は出生後も、手を握り、足を縮めて、母胎内に居つた時の姿勢をとつて、ウト／＼と眠り續けるのである。この状態を新生兒の退行作用と言つて居る。故にこの時期に於ては、強ひて手足を伸ばさせたり、高く激しく上下したり、その他一般に不安を感じさせる様な動作は絶対に避けて、成る可く安靜にさせて置く方がよい。よく乳

兒を抱き上げて、高い／＼などをするが、あれは成人後高所恐怖症などの原因となるものであるから、注意しなければならぬ。

初生兒の産聲

初生兒劈頭第一の活動は、肺呼吸である。今まで母體から新鮮なる血液を受けて居つた彼は、胎盤を離れてから、暫時の間無呼吸の状態に置かれる。そのために血液中に炭酸ガスが鬱積し、その炭酸ガスが延髄に在る呼吸中樞を刺戟する爲め、肋骨が引き上げられ、肺の容積が自然に澎張するにつれて、その空虚を充たすため外氣が肺に流れ込むのである。これが即ち呼吸である。新生兒が始めて空氣を吸ひ込む音と、その爲めに感ずる痛みに對する叫び聲とが合して、産聲となるのである。産聲の勢の強弱は、新生兒の健康の程度を示すものであつて、勢のよい産聲をあげる子は、健康兒であり、虚弱な兒は、産聲も低く、中には無呼吸が長く續くため、假死の状態で生れるものもある。その場合には、人工的に肋骨や横隔膜を上下して、人工呼吸を施さなければならぬ。

乳兒の肺と心臓

乳兒の成長發育は胎兒に次いで急速である。然し、身體の各部分が同一の割合で發達するものではない。先づ體重について見れば、生後四ヶ月で約二倍となり、滿一年後には約三倍に達するのが普通である。また誕生時には、頭部は胸部より大きい、三四月後になると、胸圍が頭圍より大きくなる。乳兒の肺臟は比較的小さく、その呼吸は胸廓の運動によるよりも、横隔膜の上下運動による所謂腹式呼吸の方が盛んであるから、成るべく腹部が自由に運動の出来るやうに注意しなければならない。而してその呼吸回数は、一分間に三五回前後である。また心臓も胎兒時代と同じく、比較的小さく、これに比して動脈は大きい。従つて脈搏が速く、毎分百三十回内外を算する。

乳兒の齒牙

生後六七ヶ月頃になると、乳齒が生え始める。齒の生える前には急に唾液の分泌が盛んになつて、「よだれ」を流し、また屢々乳房を噛む事があるから警戒しなければならない(男子に於ては多少遅れる)。齒は非常に大切なものであつて、單に食物を咀嚼する丈けでなく、容貌を造る上に於ても、また發音機關としても、重要な役目を有して居るのであるから、充分保護しなければならない。乳齒は抜け替るものであるから、齶齒になつても、差支ないと考へて居る者もあるが、それは間違つて居る。乳齒にしても永久齒にしても、齒根は齒が外部に露出する以前から、齒齦の奥深くに潜んで居るのであつて、X光線で見るとまだ乳齒が生えない以前に、既に永久齒の根があるのである。而して乳齒と永久齒とは、相互に助け合つて生長するのであるから、乳齒が齶齒になると腐敗物を生じて自然永久齒を弱め、永久齒の養分吸収を妨げ、ま

た齒齶の發達をも妨害することとなるのである。而して齒牙の衛生は誰でも知つて居る様に、齒をよく磨いて、附着物を取り除く事である。故に成る可く早くから齒を磨く習慣をつけさせることが肝要である。

乳兒の成長

初生兒は生れると同時に、四肢を動かしたり、口や舌を無秩序に運動させるものである。それが生後三ヶ月頃になると、手に觸れる物を握り、四ヶ月頃頃から、自分の首を支へる事が出来るやうになり、五ヶ月頃頃から、眼に見えるものを積極的に握らうとし、また腹這ひをさせて置くと、頭部を上げて數分間持續し、六ヶ月の末には寝返りが出来るやうになり、七八ヶ月頃には獨坐し、九十ヶ月目には匍匐するやうになり、滿一ケ年の終りには獨りで立つ事が出来るやうになる。一般に乳兒期の成長が餘り早過ぎるのもよくないが、同時に餘り遅れて居るのもよくない。三四ヶ月を経ても、四肢の運動の不活潑な兒童には、低能なものが多い。また俚諺にもある様に、「匍へば立て、立てば歩めの親心」で兩親達は、早く成長發育させたさの一念から、まだ充分足や腰の發達しない乳兒の手を引張つて立たせて見たり、「あんよが上手」などをさせる事があるが、あれは幼兒にとつて、非常に迷惑なことでもあり、また健康上にも有害であるから、絶対に避けなければならない。乳兒の成長發達は衣服をゆるやかにし、自由に運動の出来る

やうにして、放任して置く事が一番よいやうである。

乳兒の感覺

次に五感の發達について述べて見る。兒童の感覺の發達を見ると、觸覺、味覺、嗅覺、聽覺、視覺と云ふ順序になつて居るやうである。この順序は、生物進化の過程と並行して居るのである。進化論者の説に據ると、アミーバのやうな下等動物は、全身が觸覺である。それが徐々に進化するにつれて味覺を生じ、次に嗅覺を生じ、更に聽覺を生じ、最後に、視覺が出來たのであると言つて居る。これに反して人が死する時には逆に一番先きに視覺が衰へ、その次に聽覺、最後に觸覺と言ふ順序になつて居る。また眠る時にも、同じ順序であつて、先づ眼を閉ぢ、次に耳が感覺を失ひ、觸覺は睡眠中でも全然無感覺にはなつて居ないやうである。故に睡眠中に電燈をつけても眼を覺まさないが、蠅が一匹たかつても、幼兒は眼をさますものである。また觸覺は母の胎内に居る時から既に多少存在して居る。胎兒が母體を通じて寒さ暑さを感じる際胎動をするのは、このためである。觸覺の内でも温覺、冷覺、痛覺などは最も鋭敏に働き、壓覺はやゝ後れる。故に乳兒を育てるには、寒暑の調節に周到なる注意を拂ひ、産湯なども餘り熱くなく、またぬるくなく、適當の温度を保たなければならない。而して産湯の温度は外氣の高低によつて多少の差はあるが、普通攝氏四十度前後がよいとされて居る。

乳兒の味覺は觸覺に次いで發達し、生後直ちに、活動を開始するが、耳や眼は誕生後暫くの間その働きを發揮する事が出来ない。先づ耳の方から言ふと、新生兒の中耳には、粘液が充滿して居る、それが徐々にユースタキ氏管と稱する管から流れ出で、その後空気が充滿する迄約一週間の間、幼兒は殆んど聾者である。かくて生後十日目頃から、彼等は漸やく音響を聞きとることが出来るやうになるのである、然し普通の音響を明瞭に聴取し得るのは約一ヶ月の後である。更に六十日目位になると、音楽に耳を傾けるやうになる。すべて乳兒は、繪を見るより歌を聴く事を喜ぶものである。彼等が搖籃の中にあつてララバイを聴きつゝ眠る姿は天使のやうである。

乳兒の視覺

次に乳兒の視覺に就いて考へて見よう。新生兒は殆んど盲人同様であつて、時々、多少明暗が分るやうになり、二三週間後には物の形體を識別し、更に二三ヶ月たつと、人の顔を見識る事が出来るやうになり、見慣れた人の顔を見ては笑顔をし、見知らぬ人を見てはベツをかいたりするのである。概して初生兒の眼は眼球の奥行が短いので一般に遠視である。また兩眼の協同運動が完全に行はれないため、片眼宛使ひ分けをするので、屢々一眼が右に、他の眼が左に向いたりする事もある。色彩の感覺に對しては更に長い日時を要する。普通赤色を最も早く識別し、最

後に紫色を知覺するものと考へられて居る。此の期間を六ヶ月であると言ふ學者もあり、また一年半を要すると言ふ人もある。古來乳兒に赤い着物を着せるのは、色彩感覺に對する自然の理法に叶つて居るものと言ふ事が出来る。

乳兒の生活と感化

乳兒の活動を見ると概して反射的であり、機械的であつて、意識的ではない。例へば掌を針の様なもので觸れると、掌を握つたり、足の裏を磨ると、足を引込ませたりする。また顔に蚊や蠅が止まると、顔をしかめるが、手で追ひ拂ふ事は出来ない。かく初生兒の活動は全く受動的であつて、積極的ではない。また手や足や、其の他體の各部の活動が部分的であり、無目的であつて統一がない。彼等は、自分の行爲を自分で意識したり、また支配したりする事は出来ない。その行動は全く生理的機械的である。従つて乳兒は、自分の行爲に對して、責任を有して居ないのである。

又乳兒は模倣的であつて、暗示を受け易く、他の子供が泣くと泣き出したり、また人が笑へば、ニコ／＼笑ひ出すのである。乳兒期の後半、即ち七八ヶ月以上の乳兒は、萬歳の眞似をして片手を挙げたり、カブ／＼とか、チヨチ／＼とか言ふ様な、稍々複雑な事を半ば意識的に模倣する様になる。彼等は眼に映するもの、耳に聞えるものから、深い印象を受けるが、これを記憶して後日想ひ

出す事は出来ない。即ち乳兒期又は幼兒期に受けた印象は、記憶として存在しないが、全部潜在意識として保存されるのである。この潜在意識こそ、家庭教育に於て、最も大切なのである。記憶して居る印象はそれが間違つて居る場合には、大きくなつてから、自らこれを訂正する事も出来るが、潜在意識は精神分析に由る外どうすることも出来ない。而してこの潜在意識は、人間の性格の基礎を形成するのである。例へばこの頃に熱いお湯に入れると一生お湯が嫌ひになつたり、母親が授乳の時悲觀した顔をして居ると、反射的に悲觀的な表情をして成長の後も悲觀的な人となるのである。また見慣れない人に突然抱かれて驚かされると、一生涯その人は勿論、似顔の人が嫌ひになるものである。その他成人後、理由の分らない癖とか、憎惡の念や、偏見などは、概して乳兒の頃無意識的に得た感化によるものであるから、乳幼兒の家庭教育は、環境に注意し、絶えず平和に朗らかに、和氣藹々たる内に育て、よき潜在意識を與へるやう努めなければならぬ。

乳兒の感情

初生兒の感情は主として、簡單感情であつて、恐怖心が最も早く現はれ、次に快不快の感情が現はれる。殊に快感よりも不快の感情を表はす方がより早く、より強い。これは幼弱な彼等を保護するために必要な武器である。生後六十日位になると、授乳の時には裸體にして自由に活動の出来るやうにしてやると、快い表情をするやうになる。然し初生兒

の感情の中で最も強いものは、何んと言つても恐怖の感情である。殊に彼等は墜落を恐れ、孤獨を怖れるのである。故に初生兒を揺つたり、高く差し上げたりすることは慎まなければならぬ。また乳兒期の後半になると愛情が現はれて来る。彼等はその初め自分を世話して呉れる、母や父に對して愛情を感じるのである。然し幼兒の愛の對象は、必ずしも血族關係に限られて居るものではない。乳母でも女中でも、自分を親切に愛護してくれる人なら誰でも愛慕するのである。世に生みの親より育ての親と云ふのは、この邊の消息を言ふのであらう。

乳兒の言語と泣聲

乳兒は言語を話す事は出来ない、その代り彼等はその要求を發表する手段として泣き叫ぶのである。苦痛を訴へるにも、飢餓を訴へるにも、淋しい時にも、眠い時にも又驚いた時にも泣くのである。然しよく氣をつけて聴くと、その場合々々によつて泣き方に區別がある。少し熱練して來ると泣聲の如何によつて乳兒の要求や感情を知る事が出来る。例へば驚いた時は手足を緊張させたり、體を慄はせたりして背高い聲で泣くのである。こんな場合には直ぐ抱かないで、先づ恐怖の原因を調べた上、それを取り除いてやるか、また居所を移してやるやうにすればよいのである。また空腹の時には眼を開いたまゝ呼びかけるやうな調子で節をつけ、或は高く或は低く涙を出さずに泣くのである。また苦痛を訴へる時には、涙を流して如

何にも危急を告げる様に激しく泣き、淋しい時には如何にも退屈相に、低く哀れつばい聲を出して泣くものである。母は愛兒の泣聲に對しては一種獨特な感覺力をもつて居る。一茶の句に「早乙女や泣く子の方に植ゑて行く」と言ふのがあるが、世のなべての母親はどんなに多忙な時でも、又如何に疲れて眠い時でも、我子の泣聲には耳を傾け、その要求を判別するものである。然し茲に注意しておかなくてはならない事は、子供が泣くからと云つて、直ぐ抱きかゝへる事はよくない。乳兒の泣くのは、單に自分の要求を訴へると云ふ事の他に、重要な役目をもつて居る、即ち彼等にとつて泣く事は、最もよい運動の手段なのである。これによつて四肢の運動は勿論、肺活量を増し、彼等にとつてこれほどよい運動はない。故に特種の場合を除く以外は、或る程度まで泣かせて置く事が嬰兒の體育にとつて極めて必要である。

第十四章 幼兒前期の心理と教養

幼兒期の區分

幼兒期とは普通滿一歳から、滿五歳の終りまでの丸四ヶ年間を言ふのである。この期間は成長も早く、また變化も甚だしい時代であるから、これを一時期

として取扱ふよりも、幼兒前期と幼兒後期との二つの時期に分けるのが妥當である。而して幼兒前期とは、滿一歳から滿三歳の終りまで、即ち幼稚園に行くまでの滿二ヶ年間である。この二ヶ年間における幼兒は家庭において、父母や兄弟との接觸が最も密接な時期であつて、性格の基礎は大體この期間に定まるのである。昔から「三つ兒の魂百までも」と言はれるほど、この時代は兒童自身にとつても、家庭教育においても大切な時期である。

幼兒と歩行

兒童前期は身長よりも體重の増加する時であつて、一般に手や足が丸々と肥え太り、頸が短く猪首になつて、見るからに可愛らしくなる時である。普通この頃を第一充實期と稱して居る。この時期の初めにおいて、特筆すべき事は、歩行が出来るやうになる事である。人間一生の間において初生兒が二本の足で歩行するのを學ぶ事ほど大事件はない。これは大人が飛行機を操縦するよりも難事業である。故に前にも述べたやうに、餘り早くから「あんだよが上手」などをしてやる事は慎まなくてはならないが、同時にまた無關心であつてはならない。必要に応じて彼等の體を支へてやつたり、適當な獎勵や聲援を與へてやる事が必要である。

幼兒と離乳

乳兒期の終りから、この時期の初めにかけて、幼兒達が經驗する他の事件は離乳である。離乳もまた彼等にとつて、重大なる事件であるから、その取扱ひに

は周到の注意を要するのである。離乳の時期については生後六ヶ月が適當だと言ふ人もあるが、先づ滿一ヶ年内外が一番適當である。然し子供の發育状態や性や性格の相違によつて、多少その時期を異にして來る。例へば病身の子供や、發育不良の兒童は、自然離乳期も遅れ勝ちである。また男の子は一般に女の子より離乳が遅くなるやうである。而して分娩後一年以上経過した母乳は營養價値に乏しく、何時までもこれを飲ませて居ると栄養不良となるばかりでなく、また精神的にも悪影響を與へ、幼兒の依頼心を増長させる原因となるから、萬難を排して離乳を決行しなければならぬ。離乳時の幼兒の食慾は、恰も腸チブスの病後の人が食物を欲するが如くに旺盛である。そのため屢々食傷に陥り、消化器の障害を起す事があるから注意しなければならぬ。幼兒期の死亡率は乳兒期に次いで、最も多いと言はれて居るが、その主なる原因は不消化に基く營養の缺乏や、疫痢や赤痢などの消化器系統の病氣が數へられる。

自己の發見と我儘

幼兒は初めの間自分の身體と、他の物との區別がはつきりつかない、これがために彼等はよく自分の手足を引つ張つたり、つねつたり嘔んだりする事さへある。それがだん／＼成長發達するに従つて自他の區別を認識するやうになり、滿二歳頃になると始めて本能我と言つて、肉體の自己、欲望の自己を發見するのである。これは少年少女

期における精神的自己即ち理想我の發見と相俟つて、入生生活において特筆す可き出來事である。幼兒は小さな自己を發見すると同時に、父や母の存在をも發見するのである。そこで彼等は無力な自分と、偉大な父や母と比較して、大いに怖れをなし急に臆病になる。その結果、彼等は我儘になつて父母に甘えたり、またイラ／＼した氣持ちになるものである。普通この状態を稱して疍が出たと言つて居る。また幼兒は自己を發見すると共に、著しく自己中心となり、何んでも彼でも自己本位となるのである。この頃は所謂欲張りの時代で、食物は勿論、新聞であらうが、玩具であらうが、總てのものを自分で獨占しなければやまないものである。また感情が強く、自分の思ふやうに行かなければ、泣いたり蹴つたり、散々亂暴をしたりする。父母を始め周圍の人々は、この我儘亂暴に驚いて、この分では將來どうなるものかと、眉を擧め途方にくれ、兒童に嚴罰を與へてこらしめたりするのである。然しこれは決して最善の方法とは考へられない。幼兒達が暴れたり我儘勝手な振舞ひをするのは、少年少女期における反抗心と同じやうに、自己の發見に由る心理状態の變化に基くものであつて、決して不道德とか罪惡とか言ふ可きものではなく、彼等の發育の過程において、一度は當然經なければならぬ道筋なのである。かゝる場合において兒童を手荒く懲罰すれば、彼等は恐れをなして、一時は亂暴をやめるかも知れない、然しその結果は決してよくない。こ

れによつて兒童の自己肯定欲が壓迫され、その不平不満がそのまま次の時代に持ち越され、成長の後まで残存して、何時まで立つても、小供らしい自己主義を固執し、感情や性格の發達を見る事が出来ない。或る心理學者がこの頃の子供の傾向を批評して、これは丁度麻疹のやうなものだと言つて居る。麻疹は誰も知つて居る通り一度はどうしても罹るものとされて居る。然し一度かゝれば先づ免疫となるのである。また普通麻疹は早期にかゝれば経過が軽く、遅れば遅れる程重くなるものである。それと同様に幼時のこの傾向も一度経過しなければならぬ道筋であるとしたら、なるべく早期において、或る程度までこれを満足せしめ、免疫にしてやる方がよい。勿論これも程度問題であつて、程度を越えた亂暴を看過する事は出来ない。

幼兒の言語

幼兒は此の時代に於て初めて言語を習得するのである。前節にも述べた様に、泣く事もある意味において意志の表示であるが言語と言ふ事は出来ない。乳兒期の後半から嬰兒は「ウマー」とか、「ババー」とか極く單純な發聲をする様になるが、これも未だ正確の意味に於て言語ではなく、發聲の練習であり、また一種の喉の遊戯である。幼兒期の初めになると、この傾向が一層顯著になり、彼等は自分の發聲に耳を傾け、反覆しつゝ半ば遊戯のうちに、言葉の基本となる發音の練習をするのである。これが所謂幼兒の片言である。それから暫くすると、

今度は母や周圍の人々の言葉に耳を傾け始める。さうなると今迄の出鱈目の片言をやめ、二三月月の間比較的無口の時期が続くのである。この無言時代が過ぎると、獨語時代となり、こんどは盛んに獨言を語るものである。而して此の場合の獨語は、意志を發表すると言ふよりも、寧ろ半ば遊戯的に言葉を練習するのであるから、周圍の人々が、からかふ事はよろしくない。ピヤゼーの研究によれば、三歳前後の子供の言葉の三四割までは、獨語であると言ふ事である。獨語の中には、屢々幼兒の無意識の願望を現はす場合もあるから、注意して聽いて居ると意外な事を發見し、幼兒の指導上参考となる事がある。次に模倣時代が来る。此の時代の幼兒は父母や兄弟の言葉を無暗に眞似るのである。それが一寸意地悪でもあるかのやうに、誤解される事もあるが、決してさう言ふ譯ではない。彼等の口眞似は、言葉や發音の學習手段であるから、寛大に見てやらなければならぬ。またこの頃に覺えた幼兒の言葉は、一生涯ぬけないものである。故に父母はその言葉遣ひに充分注意しなければならぬ。幼兒は一般に自分で發表するより、遙かに多くの言葉を理解するものだと考へられて居る。故に幼兒が分らないと思つて、彼等の面前で不謹慎な事を言つたり、また彼等を批評したりする事は差し控へられなければならない。これと反對に幼兒は自分の使つてゐる言葉を、正當に理解してゐるかと言ふと、必ずしもさうは限らないものであるから、父母はその邊の心

得が必要である。また言葉の學習は人間の智能教育の基礎であるから、成る可く早く然も正確に教へる事が肝要である。因みに満二歳位の子供の使ふ語数は、百五十語内外、満三歳頃になると、四百語内外の言語を使ふのが普通であると考へられて居る。

幼児の遊戯

幼児の生活は一言で言へば遊戯である。彼等は眠つて居る時間の外は何時でも遊んで居るのである。彼等の行動には、作業と遊戯との間に、判然たる區別はない、總べてが遊戯であると言ふ事も出来れば、また總てが作業であると言ふ事も出来るほど彼等の遊戯は眞剣なのである。彼等の遊戯は學習の主要なる手段であつて、幼児期によく遊ぶものは成人の後も働き者となる可能性が多い。従つて幼児の遊戯を指導すると云ふ事が家庭教育において大切な事となつて来る。幼児の遊び道具は決して制限されて居ない。自己の周囲のものは、鉄でも、火箸でも、茶碗でも、手當り次第に玩弄するのである。教育的見地から見ると玩具は玩具店から買ひ求めた精巧のものよりも、寧ろ茶碗や、棒や、土砂など、日常生活に必要なありふれたものの方がよい。然るに高價な玩具を買ひ與へて惜しまない親達も、まゝ事遊びのお茶碗一つを愛兒達に貸さないと云つた様な、矛盾をやつてゐるのである。さりとて幼児はどんなに好きな玩具であつても、一つのものを持つて長く遊ぶ事は出来ない。今折紙をもつて遊んで居つたかと思ふと、その次には

電車を弄んで居ると云ふ風で、非常にあきやすい彼等である。或る心理學者の研究の結果によれば、満二歳の兒童が同一玩具で遊ぶ事の出来る最長時間は約二十分であり、満三歳の子供の場合は三分内外だと云つてゐる。玩具は兒童の想像力を促がすやうなものを選ぶのがよい。積木はその中でも最も適當なものであると考へられてゐる。自分の知つてゐる某教育家は、積木萬能論を唱へて、日本の兒童に積木を與へて、その創造力を養成する事によつて、日本人は將來世界の覇者となる事が出来ることさへ言つて居る。

幼児の病弱とその原因

幼児前期の小兒は、乳兒と同じく暗示を受けやすく、母が憂鬱な顔をして居れば、彼等もまた憂鬱な表情をし、そはくして居れば子供も落着かなくなるものである。子供が外で轉んで歸つて來た時など、痛かつたでせうと勞はると、痛いと言つて泣き出し、痛くはないでせうと云へば、うん痛くないと言ふのである。故に彼等を指導するには、萬事においてこの呼吸を呑み込んで置く必要がある。元來人間は苦痛を避けて、快樂を求めたいと言ふ本能がある。故に普通ならば石に躓いて倒れた場合再び轉ばないやうに注意するのであるが、幼児が轉んだ時母が起してやつたり、同情し過ぎたりすると、躓き倒れた時の苦痛より、母に勞はれてお菓子と與へられるために得る快感の方が強くなり、その結果子供はそ

の後も轉ぶ事を何んとも思はず、却つて無意識的にもせよ、轉ぶ事を獎勵するやうになる事さへある。殊に病氣の時などに、餘り看護や同情が過ぎたり、可愛がり過ぎたりすると、兒童は健康で叱られて居るより、寧ろ病氣で勞はられてゐる事を欲し、病弱の子供となるものである。子供を失つた家庭の子供が病弱なのはこれがためである。

幼兒の虚言

幼兒の記憶は相變らず印象的である。彼等は周圍の有ゆるものから印象を受けるが、これを想起する事は不得手である。而して彼等が毎日見たり聞いたりする事の大部分は、矢張り潜在意識の世界に沈んで行くのである。乳兒期の場合にも述べた様に、この潜在意識は將來彼等の性格の基礎となるのであるから、深甚なる注意を要する。稀には満三歳前の事を一生記憶して居る人もあるが、概して彼等の記憶は數時間又は數ヶ月を出でない。自分は満三歳の時、湯治に行つて二週間目に歸つて來た、母親の顔を忘れたと言ふ事である。また幼兒の記憶は不正確である。それは彼等の感覺や觀察が不正確であり部分的であるのと、彼等の記憶が彼等の希望や、空想と混合するためである。幼兒はよく物事を誇張して話したり、虚言をはいたりするものであるが、彼等の虚言は、不正確な記憶の結果であつたり、彼等の記憶が彼等の希望と混同するためであつて、決して故意や惡意によるものではない。

幼兒の感情

幼兒の生活を見ると、感情的であり衝動的である。乳兒期の感情は前にも述べたやうに、主として恐怖や快不快などの簡單感情であつたが、この頃になると、嫉妬や憤怒や、同情や愛情や、また繪畫音楽などに對する審美感情なども、荒削りながら芽生えて來るのである。従つて幼兒期において最も大切な事は、この新に芽生えた情緒を指導する事である。從來一般に感情の教育が等閑に附されて居つたのは遺憾である。感情の指導は非常に六ヶ敷いものであつて、若し一步を誤れば成長の後偏屈になつたり、病弱になつたり、泥棒になつたり、左傾したり、自殺したり、際限もなく悶著の種となるのである。吾人はこの問題について特に第三篇の感情より觀たる家庭教育に於て詳述する事とする。

幼兒の心の芽生え

幼兒前期の頃の兒童は所謂無邪氣であつて、はつきりとした意志とか、心とか言ふものはもつてゐないのである。彼等は本能のまに／＼、矛盾の多い不調和極まる生活を送つて居るのである。それが内部の充實につれ、また外部的に種々の經驗を積むに従つて、先づ矛盾を感じ始めるやうになる。而して矛盾を意識する事を、煩悶と言つて居る。兒童はこの矛盾を解決し、煩悶より救はれたために、種々の努力をするのである。かく兒童が自からその矛盾を調節し解決せんとする過程において心が發生する。従つて幼兒の心を發達させ

ようとするには、彼等をして自由に自分自身の問題を取扱はせ、また困難に遭遇せしめ、或る程度まで煩悶を経験させる事が必要である。然るに所謂教育に熱心なる父や母が、動もすると一から十まで子供の問題を彼等に代つて考へてやつたり、解決してやつたりするが、これは決してよい事ではない。教育は注入する事ではなくて、兒童のもつて生れた素質を引出す事であつて、家庭教育の重點は、彼等を保護するのみでなく、寧ろ彼等の年齢や趣味に適した刺戟を與へ、問題を課して彼等の精神活動を促がす事にあるのである。一見無力のやうに見える彼等も、仔細に觀察すれば、偉大なる可能性をもつて居るのである。彼等は團栗の實の様に、その初めは小さい頼りない存在であるが、育て方によつては、空の鳥をも宿す大木となるのである。而してこの生命の神秘は、決して外から加へられるものではなくて、内から湧き出づる力である。要するに幼児期の教養は、何を教へるかと言ふ事より、如何に學ばせるかと言ふ事にあるのである。故に幼児達は學習の當初から、自學自習の習慣をつけ、假初めにも世話をやき過ぎたり、干渉し過ぎたりしてはならない。

第十五章 幼児後期の心理と教養

幼児後期と社交性

幼児後期は満三歳から満六歳に至る二ケ年である。この時期と前期と異なる點は社會生活の基礎である社交性の出現である。幼時前期の終り頃から此の時期の初めにかけて幼児等は急に友を求めめる様になるものである。著者の末子が二歳八ヶ月の頃夢から覺めた様に、或朝母にお菓子をおねだつて自分で紙に包み、その儘出て行つてお隣の門を獨りで開けて「弘さんお菓子をあげませう」と呼びかけ、弘さんが出て來ると直ぐお菓子を無理に與へて「遊ぼう」と云つて手をとつて誘つたのである。その前日までお菓子を呉れなければ、誰れにも玩具も貸さなかつた子が、一朝にして變化するのを目撃したのである。これは重要な變化であつて、この社交性を利用し、またこれを伸ばしてやる事が、この時期の家庭教育の要點である。

幼児後期の身體

幼児後期は體重よりも身長の伸びる時期である。二三歳頃迄太つて居つたのが、四五歳になると、細くなり、姿がすらりとして來る。故に此の時代を、第一伸長期と稱して居る。健康は前期よりもよく、一般に抵抗力を増し、死亡率は徐々に低下して來る。然し筋肉の力が比較的弱く、従つて元氣がよい割合に疲労し易いから、長時間繼續して運動をさせる事は無理であり、また却つて有害である。乳齒は既に満二歳頃までに全部生え揃ひ、この時期の終りにはそろ／＼永久齒が生え始める。

質問時代

彼等の接觸する世界は急に廣くなる。彼等は今やその完備した感覺器官と、鋭い好奇心とを以て、彼等を取り巻いてゐる環境の中に突進して行くのである。従つて向上心と新しき事物に對する智識慾と感受性は、一生を通じてこの時代ほど強い時はない。彼等の全身が眼であり耳である。彼等は眼に映るもの耳に聞ゆるもの、總べてを知らうとする。而してこの旺盛な欲求が質問となつて現はれるのである。この頃の子女を持つ母親が、困らせられるのはこの質問である。「あれは何」「これは何」とお星さまの事から、自分がどこから生れて來たのかと言つたやうな事まで尋ねるのである。此の質問を上手に取扱ふ事が家庭における智育の根本である。勿論何から何まで答へる必要もないが、自分に解らないからと云つて叱つたり、忙はしいからと言つて五月蠅がつてはならない。彼等は質問する度毎に父や母に叱られると、質問を止めて仕舞ふのである。その結果兒童の求知心が鈍り、智能の發達が妨げられることになる。

幼兒後期の言語

此頃の兒童は社會性がその萌芽を現はし、お友達を求めらるやうになる事は前にも述べたが、それが爲めに言葉が一層必要になつてくる。その結果言語が急速に發達し、此の時期の末までには、約二千の言葉を習得すると言ふ事である。言語の發達の過程を見るに、始めには名詞に限られて居る。然しこれは單なる名詞ではなく「水」と云ふ場合

に水が欲しいと云ふ意味を現はして居り、「犬」と言へば、犬が怖いとか犬と遊びたいと云ふ意味を現はして居るのである。その次に動詞が加はり、お菓子が食べたいとか、犬が怖いとか言ふ様になる。次に代名詞や形容詞を學び、最後に接續詞や、副詞などを覚える。この頃になつて話の出來ないのは、言語中樞の缺陷から來る場合が多く、生れつきの啞者、言語理解不能症等の原因に基くものであるから、専門家の診断を要する。然し話はするが非常に幼稚で、語數の少ないと言ふ場合には後天的の躑の結果と見るべきである。概して山間僻地などに育ち、お友達のない子供や、可愛いがられて、搔ゆい所に手の届く様に育てられ、言葉を用ひる必要が少ない子供は言語の發達が遅れる。また此の頃から少しづつ吃る子供がある。これは屢々恐怖や、劣等感などの感情異常に基く場合が多いから、感情を正常に復する事が、その根本療法である。

早教育と言語

言葉といふものは觀念を整理し、思考を進行させる最善の道具である。犬と言ふ言葉を知らずに犬と云ふ觀念を記憶し、又これを發表する事は、かなり繁雜である。例へば犬と言ふ言葉を用ひる代りに、四本足で狐に似て居るが狐よりも頭が大きく、夜間家を守り、人に慣れ易い動物などと言ふとすれば、非常に複雑であつて、精神的の浪費である。故に言葉は出來る丈早く、また正確に教へてやらなければならぬ。兒童の早教育の秘訣は實に言

語の早教育にあるのである。お母さん方の言語教育を見ると「話し上手の聞き下手」の感がある。お伽噺などを可なり面白可笑しく話すお母さんも、幼児がその折々の経験や面白かつた事などを、お母さんに話さうとする場合に、熱心に聽いて呉れない場合が少なくない。そんな事では幼児の教育は出来ない。それどころか子供が黙つて居る時などには、却つてこちらから引出すやうに、話題を持ちかけてやる様に仕向けて行かなければならない。

数の觀念

此の時期の幼児の智能は、前期に比較すれば著しく發達する。然しこれは相對的の話で、一般的に言へば幼稚なものである。彼等は感情的であつて觀念も思考も感情に支配され易く、興味や、愛憎や、期待などが思考の内に加味されるのである。数の觀念の如きも、その初めに於ては、物の名の如くに考へられ、一二と言ふ順序に言はずに、一、三、五、などと出鱈目に呼ぶのである。三歳頃の子供は数を物の順序位に考へて居る。彼等には抽象的の数の觀念はない、従つて物がなければ數へられないのである。數字の中でも一、二、の數は可なり早くから數へ、暫くして三を數へる事が出来るやうになるが、四を數へるには可なり間隔がある。それから滿五歳で漸く五の數を數へるやうになるのが普通である。それから十まで數へるのは比較的早い。然し東西南北左右などの解るやうになるのは、小學校入學後の事である。

時の觀念とその指導

「時」の觀念もまた幼稚である。勿論、時とは如何なるものかと云ふ様な哲學的な事に就いては、大人にもなほ解し難い難問題である。然し常識的に考へると、「時」の觀念はその間に起つた出來事に由つて計るのである。幼児前期の子供には、昨日と明日との使ひ分けは出来ない。彼等がよく「明日海岸に行つた」とか「昨日お祭りに行くだ」などと言ふのを聞く事がある。また彼等は抽象的な言葉を使はずに、一つねんねするとお正月などと具體的な表現法を用ゐる場合もある。幼児達が「時」を表現する言葉の中には、未來と將來を現はす言葉が多い。これは老人達が過去に言及する言葉の多いのと正反對である。家庭教育においては幼児の頃より出来る丈け正確な時の觀念を與へ、將來の事に對して少しでも長く時間を待つ様な躰をする事が大切である。その時の事情によつても多少異なるが、滿三歳位の子供は、數時間待つ事が出来るやうでなければならぬ。例へば午前中よく遊べば、午後から動物園に連れて行つてやると云ふやうな時に、よく聞き分けてその時間を待つ様でなければならぬ。五歳頃には半日、滿六歳に達すると二日とか、十五六歳になれば一年と云つた様に、だん／＼年齢の進むに従つてその時間を長く延ばす様な訓練が必要である。

幼兒と繪畫

滿三歳頃から繪を畫く事に興味をもち始める。初めの間は別に秩序立つたもの

ではなく、滅茶々に線や圓を畫くのである。さうして居る中に偶然にお日様の形が出来たり、犬のやうな形を發見するのである。殊に満四五歳位の子供は非常に繪をかく事に興味を覚え、盛んに鉛筆と紙とを要求する。幼兒の繪は實物寫生ではなくて一種の印象畫である。例へば人物を畫いても、胴がなくて首から足と手が出たり、鼻の向きが變つて居たりする事もある。又文字を解せない幼兒にとつて繪畫は文字の代用となるのである。従つて盛んに繪をかくばかりでなく、繪本を見ることも非常に好きである。故に成る可く兒童の喜ぶやうな天然自然の繪や、動植物の繪や、繪物語などを與へるがよい。満五六歳から學齡期になると、だん／＼寫生畫をかく様になり、更に年齢が進み文字を學習するに従つて、繪より文字、又は文學へと轉向し、少年少女期になると、特種な人丈けが繪を好んで畫き續けるのである。この頃まで繪を熱心にかく人々の中には、將來畫家として大成する天分を藏して居る人も少なくない。

幼兒と習慣

幼兒の頃は習慣を作る時代である。習慣は第二の天性と云はれて居るが、特に幼時期に出来た習慣は人の一生を支配するものであるから、よき習慣を澤山養成するやうに努めなければならぬ。殊に齒を磨く事や、洗面、入浴などの習慣や、また食事の時間や、食卓に於ける作法や、便通や就眠等に就いても一定の習慣が必要である。また自分のものは、

衣服、繪本、玩具、手拭、齒ブラシなどにいたるまで、總て自分で整頓する様に躑けて置かなければならない。これがために出来れば子供専用の室を與へ、粗末でもよいから、各自の本箱、筆筒、机等を備へ付けてやるとよい。如何に幼兒教育は自由主義がよいと言つても、何時も自由に放任して置いてはよくない。殊に服従の習慣をつけて置く事は大切である。父母が一旦いけないと言つた事には絶対に服従させ、決して例外があつてはならない。習慣は單に起居動作などのみに限つたものではなく、感情の習慣もあり、考へ方の習慣もある。感情が習慣化される事コンヂションド・エモーシヨンを感情の條件化とも言つて居る。一例を擧げて言へば、幼兒が髭の生えた巡查に屢々叱られると、その後は髭のある人は誰でも怖がると云ふやうな類である。これは恐怖と言ふ感情が髭と云ふ條件に結びつけられて、習慣化されたのである。感情の習慣化については第二十三章において詳述する。

お伽噺と家庭教育

多くの子供達は、二三歳の頃から話を聞いたがるやうになる。それも初めの頃は、彼等の日常生活に關係のある様な小話を喜んで聴くものである。例へばお隣の坊ちゃんがお母さんの言ふ事を聞かないで、お菓子を食べ過ぎてお腹を悪くして病氣になつたとか、犬と猫とが喧嘩をしたと言つたやうな事を話すと、飽く事を知らずに聞くのである。更に四歳前後になると、お伽噺を好むやうになる。彼等はお伽噺の中で自分の實現の出来な

い様な空想に近い願望を満足せしめ、また彼等の強い好奇心や、想像力を満足させるのである。彼等には現實の世界とお伽の世界との區別がない。従つて獸がものを言つたり、人が鳥に乗つて飛んだりしても別に不思議だとも思はない。この時代の子供に話す童話は變化に富んだ、活動的、冒險的な話でなければならぬ。また彼等は同じ話を、何十回でも聴きたがるものである。然しその場合必ず同じ言葉で、一言一句間違はない様に話さなければならぬ。桃太郎さんの話を聴きながら、彼等は話し手の話す先きから先きを想像し、こんどは何と言ふだらうとか、その次はどんな話をするだらうなどと期待し乍らきくのである。さうして自分の期待通りに話してくれると満足を感じ、これに反する場合には、不快を感じるのである。また五六歳の頃になると、男子は特に冒險的なお話、女子は特に悲劇的なお話を好んできくやうになる。更に八九歳以上になると歴史的實話物語が好きになる。童話は兒童の見聞を廣め、言語を習得せしめ、想像力を養成するなど、多くの教育的價值があるものである。然し童話を教訓で結んではならない、よく正直爺さんの話の終りに、ですから皆さんも正直にしなければなりませんと、つけ加へるものであるが、それでは折角のお話も臺なしになる。故に童話はお話の筋丈けにし、後は兒童の想像力に任せて置けば、彼等は自分自身の力に應じて自ら結論を作り、その中から教訓を發見するのである。

幼兒後期の指導

幼童が五六歳になると、從來漠然として居つた空想と希望と、現實との區別が多少出來て來る。而して彼等は幼少ではあるが、自分の希望を實現させようとして種々の努力をする。例へば木の枝を以て家を作らうとしたり、砂で山を造つたり、河を掘つて見たり、一枚の板を水に浮べてこれを船に擬し、鹽をもつて大海を航海して遠い外國に行つて見たいと考へたり、また木の實を蒔いてそれが生長したなら、材木屋に賣つて澤山お金を儲けて自動車を買ふ計畫を立てたり、その他様々の事を考へたり計畫したりする。成人から見れば、子供のするこれ等の計畫や努力は馬鹿げた事であつて、つまらない事をして居るやうに貶したり、叱つたりする場合もあるが、折角努力して集めて來た木の枝を捨てられたり、蒔いた種を無理解な成人に踏み荒らされたりする時ほど、彼等にとつて悲しい事はない。さういふ事が度重さなると彼等は、失望して自暴自棄となり、夢想の世界へと這入つて仕舞ふのである。即ち彼等はかゝる悲しい經驗を自分の胸に深く秘めたまゝ、もはや想像や希望を實現に移さうと努力しなくなり、愈々空想の世界に蟄居し、現實の世界を離れて空想家となり、夢想家となり、成人の後も意志の弱い妄想的の人となつて仕舞ふものである。故にこの頃の子供が自發的に行動し、努力して居る場合には、多少それが馬鹿げた事であつても、成る可く干渉しないで、彼等の意志を實行させる方がよい。彼等

は失敗もする、また時には多少の成功も收め、種々の経験を積んで行くに従つて、幼時の夢想や空想から解放され、一面において希望の實現に向つて努力奮闘する習慣を得ると同時に、他面に於ては實現の出来ない空想と、可能性のある希望とを區別する判斷力を得、意志の力、注意の集中、自信力等を増し、依頼心から解除されるやうになる。

第十六章 兒童前期の心理と教養

兒童前期の身體

滿六歳から九歳までの兒童は、最も健康に恵まれた時期である。この時代は第二充實期と言つて、身長が増加よりも體重の増加の方が早くなる時である。殊に彼等の手や足の筋肉の發達は顯著である、従つて手足を使用する運動に興味をもち、細飛び、鬼ごっこ、木登り駆け競べ等、何んと言ふ事なくたゞ追ひかけたり、追ひかけられたりして喜んで居る。此の頃の小兒の心臓は比較的大きく、また血管も割合に太いから、大人のように激しい運動を連続しても、息が切れたり、胸苦しくなる様なことはない。呼吸の形式も幼少の頃は腹式であつたのが、この時代になると呼吸筋の發育につれて胸式呼吸になつてくる。

小學校入學と兒童

此の時代の最大なる出來事は、兒童が家庭を離れて小學校に入學すると言ふ事である。これは人生に於ける二大轉換期の一つであつて（他の一つは全然兩親を離れて、結婚して獨立獨歩の生活に入る時）、その取扱ひには格別の注意を要するものである。學校に入學したからと言つて、學校ばかりに任せて置く譯には行かない。元來學校と言ふものは、家庭教育の缺陷を補ふために出來たのであつて、智育でも徳育でも、また體育でも、學校だけで完全に行くものではない。従つてこの時代の家庭教育は、小學校の擔任教師と連絡をとり、協力して行く事にあるのである。

兒童の缺陷は家庭に於てはさほど目立たないが、一度家庭を離れて學校と言ふ新しい社會に入り、新しいお友達と交はり、教師と云ふ新しい指導者によつて客觀的に觀察されると、始めて今までの驕の善惡が明るみに出てくるのである。學校に行くのを好まないとか、學校に行くと黙つて居つて元氣がないとか、お友達が出來なくて困るとか、獨りで通學が出來ないとか、先生がきらひであるとか、讀方は好きだが、算術が嫌ひだとか言つた様な問題を起す子供は、みな幼兒期における家庭教育の缺陷の然らしむる處であるから、これを矯正するには、遡つて家庭に於ける原因を調査しなければならぬ。然しこの原因を調査する事は、決して容易の事ではない。米國の小學校には近頃

訪問ビインタク・テイチャー教師と言つて専門の智識を有する教師が、問題の兒童の家庭を訪問し、家庭と協力して生徒の悪癖や缺陷を矯正する方法をとつて居る。

幼兒の頃家庭において可愛がられ、保護されすぎた子供は、學校に行くとき急に不自由や不安を感じ、元氣を失つて臆病になり、従つて學習も手につかないものである。殊に獨り兒とか末子とか言ふ様に、家庭において獨り天下であつたものは、その傾向が顯著である。これに反して嚴格な家庭に育つた兒童や、また繼父母などの許に育つたものは、家庭より學校の方が自由でのんきなため、學校を遊び場の如く考へ、別に學習すると言ふ譯でもなく、學校が濟んでも遊び廻つて居たりして歸宅が遅くなり、年の進むにつれて次第にその傾向が増長して、放浪性などを帯びる様になる。また貧家の子弟の中には、幼兒の頃満足出来なかつた所有欲を満足させるため、他人の學用品などを盗む事もある。また先生が嫌ひだとか、怖いとか云ふために、學校に行くのを厭ひ、そのために學業が進歩しなくなる場合もある。これは前にも述べた様に、先生の顔が、幼兒の頃怖かつた髭の生えた巡査によく似て居るとか、親戚の嫌なをばさんと酷似して居ると言ふやうな原因からくる場合もあるから、よく調査してその禍根を取り除いてやらなければならぬ。

學校と家庭の連絡

學校は家庭の延長であり、又社會の縮圖であるべき筈である。であるか

ら、低學年の頃は主として家庭本位に管理せられ、高學年に進むに従つて社會意識をより多く取り入れ、徐々に社會人としての訓練をなすべきである。また就學年齢の兒童をもつ家庭においては、就學前から、漸次家庭を解放し、家庭に於て他の子供達と接觸する機會を作り、また他方には學用品などを買ひ與へ、入學に對する精神的用意をなし、入學後は愛兒の擔任教師を尊敬し、若し教育方針において擔任教師と一致しない點があつても、子供の前で先生や校長を非難する事のない様に注意す可きである。

小學校入學の試問事項

或る小學校で入學の際に用ひた試問事項は、就學兒童の智能や性格が、良好であるか、正常であるか、異常であるかを、知るによき暗示を與へるのであるから、左にその主なるものを掲げて参考に供することとする。(括弧内は著者の意見)

一、氣分が變り易いか(氣分の急變するのはよくない)。

二、いつまでも感情にこだはつて居るか(一例を舉げて云へば、昨日叱られた事をまだ氣にかけて居る様な類である。これは感情が強すぎ、こだはりすぎてよくない。さうかと云うて叱られても無關心であつたり、すぐ忘れて仕舞ふのもよくない)。

- 三、綺麗好きか(勿論綺麗好きがよいのであるが、これも度を過ぎて神経質なのはよくない)。
- 四、自分の持物を大切にし、また自分で始末するか(自分のものは自分で始末するのがよい)。
- 五、植木や、草花や、小鳥や、犬などが好きか(好きなのがよい)。
- 六、人づきがよいか、他人に親切か(親切なのがよい)。
- 七、家庭でお手傳ひをするか(お手傳ひをするのがよい)。
- 八、新しいお友達が出来るか(出来るのがよい)。
- 九、疳癩にさはることが多いか(多くてはいけない)。
- 十、恥かしがるか、また人に慣れ過ぎるか(何れもいけない)。
- 十一、人に褒められたり、おだてられたりすると慢心するか(慢心してはいけない)。
- 十二、物事に熱中し、興味が持続するか(する方がよい)。
- 十三、仕事の速度は早いのか、遅いか(早くて正確なのがよい)。
- 十四、無駄遣ひをするか、ものの好き嫌ひをするか(勿論無駄遣ひをするのはよくない、物の好き嫌ひをするのも程度問題で、餘り極端なのはよくないが、多少好き嫌ひのあるのは、判断力や、選擇力のある證據であつて、必ずしも悪くはない)。

- 十五、自分の思ふ事を發表するか(する方がよい)。
- 十六、自分の行爲に言譯をするか(これも程度問題で餘りし過ぎるのはよくない)。
- 十七、自分のものをお友達に貸すか(貸す方がよいのであるが、これも程度問題である)。
- 十八、物の分りはよいか(よい方がよい)。
- 十九、早合點をするか(早合點はよくない)。
- 二〇、物の觀察が緻密か(緻密の方がよい、物事を面倒くさがるのはよくない)。
- 二一、人のお話をよく聞くか(聞く方がよい)。
- 二二、出鱈目をいふか(云ふのはよくない)。

以上の各項を自分の子女にあてはめて見ると、正常か異常かを判別する参考となるのである。

兒童の好奇心

この頃の兒童は非常に好奇心が強く、正常兒だと何事にでも興味を持ち、木でも草でも蟲でも、詳しく觀察し吟味したがるのが普通である。花の蕾などでも、無理に開けて調べて見たいと云ふ様な氣持ちがする時代である。お客さんが來れば一番先きに飛び出して、お客の側を離れないで、頭の先きから爪の先きまで凝視し、大人同志の話は一句も聞き洩すまいとして傾聴する。幼兒後期と同じく、彼等の身體は全身が眼であり、耳であると云つ

てもよいほどである。或る學者の研究によると、好奇心は満七歳が最高であると云つて居る。試みに好奇心の強弱を數字で示せば、

五歳	三十、	六歳	三五、
七歳	六五、	八歳	一二一、
九歳	二十、		

と云ふ割合となつて居る。好奇心は學習の最良の動機であるから、これを利用し一面に於て兒童の本能を満たせると同時に、他面に於て學習上のよき手段としなければならぬ。

兒童の遊戯

七八歳の頃の子供の遊ぶのを見るとそれは個人的遊戯ではない。彼等は二三人のお友達と共に、簡単な規則を持つゲームをやりたがる。殊に手足を使ふ活動的な遊びや、競争心に訴へる様な遊戯を好んでやる。この傾向は年と共に進み、だんだんゲームに参加する人数が増し、遊戯の規則も複雑化し、遂に競技となるのである。前にも述べた通り、遊戯は兒童の生活の重要な部分を占めて居るものであつて、體育上から見ても、徳育上から言つても非常に大切である。近來各方面でスポーツを奨励して居るのもそのためである。故に家庭に於てもこの頃から、男女に拘はらず、その兒童の體質や、性格等を考慮して、適當なゲームやスポーツ

を選択し、その指導獎勵に當らなければならぬ。

兒童の記憶力

満八歳の頃の兒童の記憶力は、一生涯を通じて最も旺盛である。それは腦の發達に深い関係をもつて居るのである、この頃の子供の腦中樞の發育は殆んど

最高點に達し、その後は量においても質においても餘り變化しないものであると考へられて居る。元來、兒童と大人との記憶力の内容には多少の差がある。大人の記憶は論理的であつて、記憶する材料の意味を理解し、その内容に連絡をつけて記憶するのであるが、小供の記憶は機械的であつて、記憶する材料の意味や、内容の連絡の如何に拘はらず、鵜呑みに覺えるのである。故にこの時代は語學を教へたり、經典や詩歌などを誦記させるに適して居る。また兒童期の記憶の特色は、保持する期間が長いと言ふことである。成人は覺えるのも早いがまた忘れるのも早い。これに反して兒童の記憶は覺えるのはやゝ遅いが、忘れるのも遅いのである。殊に老年になると、成人後に記憶した事柄をだん／＼忘れて、青年の頃の記憶から少年少女の頃の記憶と云ふ風に遡つて忘れ、最後に残るのは子供時代の記憶である。老人が昔の事を繰り返へし、子供らしくなるのは、これが爲めである。

記憶の個人差

記憶は個人によつて種々異つた型がある、例へば或る人は限から受けた印象

をよく記憶する。これを視覚型と言つて居る。視覚型の人は、學者や畫家に適してゐる。また或る人は聽いた事を一番よく記憶する。これを聽覚型と云つてゐる。聽覚型の人は音樂家に適してゐる。また運動型といつて、手で書いた事や、行爲に訴へると、非常によく印象を受けてこれを理解し、記憶する人がある。この型の人は、實際運動家や、商工業家に適して居る。然し普通の人は混合型といつて何れにも偏せず、三つの型を平等に持つて居るのである。混合型の人が物事を記憶する場合には、視覚と聽覚と運動感覺との三つを同時に用ゐるのがよい。或る學者の研究に由れば、眼で見たる事は平均十分の一しか記憶しないが、同じ事を他人に讀んで聽かせて貰ふと十分の二記憶し、また同じ事を自分の手で書いて見ると十分の三記憶すると言つてゐる。更にこの三方法を併用すると十分の七乃至八記憶すると言ふ事である。父母は兒童の學習を指導する上に、自分の子供の記憶が、どの型に屬するかを知つておく必要がある。

兒童の思考力

思考力もまた非常に進歩する。前にも述べた様に、幼兒の思考は自己本位で、自分の欲望と想像とを無批判的に結合させてそれで思考だと思つて居るのである。それが兒童前期になると、著しく理解力を増し、また一面社會性が發達するにつれて、自分のする事なす事總てを、父母を始め周圍の人々の承認や賛成を得ようと努力する傾向を示してくる。

従つて彼等の思考は合理的となり、客觀的となり、自己の行動に對して一々理由を述べたり、また證據を挙げたりするやうになるのである。處が、何事についても一本調子な兒童は、この傾向が極端になり、理窟ぼくなる。殊にこの頃の男の子は一寸とした事でも理窟ぼつて、一々理窟がつかないと承知しないものである。故に父母は兒童のこの傾向を察知し、適當に指導しなければならぬ。この外兒童の注意力も漸次に増大し、その持続時間も、年と共に増して来る。また觀察力も進歩し、幼兒の頃は單に外形の觀察だけであつたのが、だん／＼内容に對する觀察へと進み、事物と事物との相互關係や、事物の價值觀念なども生じ、各方面に亘つて物事を觀るやうになる。實に小學校二三年級は何れの點から見ても、進歩の著しい時であつて、大切な時期であるからその指導を誤つてはならない。

第十七章 兒童後期の心理と教養

兒童後期の身體

兒童後期と言ふのは、滿九歳から滿十二歳までの三年間である。この時期の研究は心理學の方面から見ても、生理學の方面から見ても、幼兒期や青

年期に比して等閑視されてゐる。これはこの頃の子供は比較的問題が少ないためであらう。生理的に見れば、この時期の男女は身長においても、體重においても、その増加率が幾分鈍つてくる様である。即ち男子はこの期間に身長において、平均十三・四センチメートルを増加し、體重において七・〇五キログラムを増し、女子は同期間に身長において十七・〇三センチメートル、同體重において八・六三キログラムの増加を示すのである。これによつて見ると、この時期の女子は身長體重共に男子を凌駕してゐる。

天才と低能兒

健康状態は兒童前期より一層良好であつて、一生涯を通じて一番死亡率の少ない時である。内臓の諸機關も愈々整備し、また感覺も發達し、軟骨の骨化も段々完成に近づき、文字通り勢力旺盛である。然し色盲や近眼その他の遺傳的缺陷をもつてゐるものは、この時期に現はれて来る。智能の方面においても、大體平常兒か、劣等兒か、また天才兒か、と言ふことが判明するのである。概して舉動が活潑で、敏捷なものは優良兒で、動作が緩慢で表情の變化の少ない子供は劣等兒である。然し詳細な事は、専門家に智能検査及び適性検査を乞ふて、愛兒の將來のためによき計畫を立てる方がよい。天才には一般的天才と、特殊能力の天才とがある。一般的天才は何をやつて頭角を現はす事が出来るが、特殊天才の場合には、屢々智能や感情

が非常に偏頗のものが多く、従つて何をやつてもよいと言ふ譯には行かない。これと同じく劣等兒にもまた一般劣等兒と、特殊劣等兒とがある。一般劣等兒は總ての點において劣つて居るが、特殊劣等兒は特殊能力のみの缺陷を有する子供であつて、他の能力においては屢々平常兒を凌駕してゐる場合が少くない。例へば數學のやうな計算能力は劣つて居るが、手工や技藝などにおいては、優秀だと言ふやうなものがある。故に兒童の個性を調査し、それ／＼その長所を伸ばしてやるやうに努めなければならぬ。

兒童と讀物

この時代の兒童の特徴の一つは、讀書欲の旺盛と言ふ事である。彼等は自分の好きな本や雑誌だと、數時間の間食するやうに讀み、その熱心さは全く驚くばかりである。一生涯を通じてこの頃程讀書慾の盛んな時はない。然し彼等には教科書があり、日々の豫習復習があるのであるから、餘り課外の讀物に耽ることにはよくないが、學習の妨害とならない程度の讀書は、却つて劃一的教育の不備を補ふ事となり有益である。書物の選擇は可なり六ヶ敷いものである、たゞ單に爲めになる本だと言つても、興味のある書物でなければ駄目である。小學校の一二年の生徒達はお伽噺や童話などを好むが、高學年になると實話殊に傳記物や、冒險記などを喜んで讀むやうである。今日の如く種々雑多な營利的な圖書や雑誌が出版される時代においては、安

價な感傷的な讀物が少くないから、注意しなければならない。そして偉人の傳記や科學物語などのやうな、健全な良書を読ませるやうに指導する必要がある。然しこれは理想であつて、實際はなかなか行はれるものではない。いくら制限しても友達から借りて讀んだり、また新聞の社會面の記事などを隠れて讀むのである。寧ろ制限すればするほど、さう言つた傾向を示すものであるから、兒童の讀書は杓子定規的に制限しない方がよい。但し讀んだ本の内容は必ず母なり父なりに報告させ、所感を述べさせることにするのがよい。さうする事によつて、多少内容の如何はしいものであつても、大した害はなくなる。精神衛生の立場から見ると、多少悪い事をして、又悪い手紙を受け、ても、悪い本を讀んでも、秘密にしないで、これを他人に報告させる事によつて免疫となり、精神的悪感化を與へないのみか、時には良い經驗となる事さへあると考へられるのである。

觀察に由る創造教育

讀書慾の發達は智識慾の旺盛を物語り、智識慾の旺盛は兒童の記憶力や、注意力の盛んな事を裏書きするものである。この頃の兒童の注意は、その範圍が廣くなるばかりでなく、有意注意と言つて、興味のあるなしに拘はらず、努力して注意する能力が現はれてくる。また兒童の興味を見ると、大人の興味と著しく異つてゐる。大人には興味のある事でも、彼等にとつては興味のない事があり、また成人から見れば陳腐な事でも、兒童には珍しい事がある。故に兒童の興味を尊重し、これを獎勵し、守り育ててやらなければならぬ。而して興味のある處に努力が湧き、そこに創造の教育がなされるのである。創作には豊富な經驗と、緻密な觀察とが必要である。これは何れも集中された注意力と、強い興味から生れて来る。觀察の粗雑なものは事物の異同を看過し易い。これに反して觀察の緻密なものは、一見無差別の如きものの内にも、多少の差別のある事を發見する。不注意に見れば、何れも同じ緑に見える樹の葉も、詳細に檢すれば、一つ／＼色彩を異にして居るのである。音響についても同様であつて、注意力の足りない人は多少の高低に對して無關心であるが、音樂に興味のある人は稀には一秒間一振動の音差さも發見すると言ふ事である。この様に色彩感覺の鋭敏な人は畫家となる天分を有し、音響感覺に鋭敏な人は音樂的天分を有する人であると言ふことが出来る。要するにこの頃の兒童の學習は、この興味と注意力から来る觀察力の指導にあるのである。これが近頃頻りに唱へられる、創造教育の根本原理である。かく考へて見ると、今日行はれてゐる教育、殊に入學試験準備と言ふものが如何に無理でありまた有害であるかを痛切に感ずるのである。

家事の手傳ひ

この頃の子女は盛んに遊びたがる。兩親の目から見れば、十歳以上にもなつたのであるから、家事の手傳ひもさせたいのである。處が、手傳はせようと

すれば、やれ勉強だとか、宿題だとか言つてなかなか手傳はない。これは一つには用事の言ひつけ方が悪いのである。彼等は強い名譽心をもつてゐるから、この名譽心に訴へなければならぬ、然るに頭から叱るやうな物の言ひ付け方をしたのでは、却つて彼等の名譽心を傷けて仕舞ふ事になる。また彼等は力自慢であるから、その力自慢を利用するのもよい。殊に兒童には強い競争心がある、故に彼等の競争心に訴へる事も一つの方法である。その他兒童の心理を考察して、手際よく物事をさせる事が、家庭の作業教育においては肝腎である。元來遊びと仕事との間には、判然たる區別はない。何が遊戯で何が仕事であるかと言ふことは、する事柄によつて分類する事は到底出来るものではない。例へば繪をかく事は普通娛樂であり、遊戯であるが、生活の資を得るために、いや／＼乍ら繪をかく場合には、それが仕事となるのである。またベース・ボールは遊戯である。然も職業野球團の場合には遊戯でなくて勞働であり仕事である。要するに仕事と遊戯との差別は、事物の區別でなくて、寧ろ心のもち方や態度の差である。従つて子供に仕事をさせる場合においても、言ひつけ方によつては、仕事となり勞働となり、また遊戯となり娛樂となるのである。

家庭における作業教育

この頃の兒童に家事を手傳はせると言ふ事は、家庭教育において極めて大切である。これによつてやゝもすると智育に偏し易き、

學校教育の缺點を補ひ、作業による教育を奨励し、勤勞を楽しむ善い習慣をつける事が出来るのである。然し家事に手傳はせる事、六ヶ敷言へば家庭における作業教育は、決して容易に出来るものではない。それには子供は勿論、父母も祖父母も家事を分擔しなければならぬ。また年齢に應じ性によつて、各々興味を異にするものであるから、分擔する仕事も異ならなければならぬ。例へばお部屋のお掃除は誰、植木に水をやるのは誰、靴みがきは誰、食卓のお給仕は誰と言ふ風に責任を定め、偏頗のないやうに分擔させる事が必要である。處が、多くの家庭においてはお母さん獨りが、二人前も三人前も働いて、お父さんや子供達は知らん顔をして居る。これはたゞに子女に悪習慣をつけるばかりでなく、家庭の和樂を致す所以でない。家庭教育において大切な事は、母親が一人で働く事ではなくて、家族が家事を分擔し、協力して行く事にあるのである。或る教育家が言つた様に、「現代人は愛兒の教育のために、總てを與へて惜まないが、たゞ一つ最も大切な勞作を與へない」と言つてゐるが味ふ可き言葉である。學習と言ふ點から見ても、性格の陶冶と言ふ點から見ても作業は非常に大切である。近時、作業を學校教育にとり入れやうとする傾向が盛んになり、所謂作業學校なども出來て來たが、作業の教育は學校でやるより、家庭教育にとり入れる方が更に一層効果的である。

英雄崇拜とその指導

前にも述べた様に、兒童後期の特徴の一つは、英雄崇拜と言ふ事で

ある。然し彼等の崇拜する理想的人物の標準は、比較的單純でまた具體的である。例へば腕力の強い人とか、運動の選手とか、また自分のグループのリーダーなどである。それが年齢の進むに従つて啓發され、學者を崇拜し、不出世の聖者を敬仰し、更に現實の人間を飛び越えて抽象的理想へと進み、遂には宗教に對する信仰となるのである。崇拜する人をもたないものはない、また理想のない人もない。然しその理想の標準については、人各々異つて居る。人はこの理想に生きて行くのである。人生の價値は、大體において彼が抱いてゐる理想の如何に由つてきまるのであるから、兒童の教育においては、年齢に應じて適當なる理想の人を指示してやる事が必要である。何時までも父や教師のみを理想とさせようとする事は無理であり、危険である。殊に最近のやうに教育界の腐敗して居る時代には、特にその感が深い。昔は人格者でなければ教育は出来ないと考へて居たが、必ずしもさうではない。私達の仕事は兒童に、我を見よ、と言ふ事ではなくて、孔子を見よ、釋迦を見よ、キリストを見よ、と指し示してやる事である。實際自ら反省で、お父さんを見よとか、私を見よとか言ひ得るものは少ない。こゝに信仰の必要があり、宗教々育の必要があるのである。

性教育の必要

兒童後期の子女は、性別の意識が明瞭となつて来る。この頃の男の子は女の子を輕蔑し、また女の子は男の子を嫌ふものである。然しこれは彼等の先天

的傾向と言ふよりも、寧ろ社會的傳統の然らしむる惡弊であるから、教育の力をもつて、正しく導いて行かなければならない。性的意識の覺醒と共に、性に對する好奇心をもつやうになつて来る。故に性教育はこの頃から徐々に始めなければならぬ。性に對する好奇心は先天的傾向の一つであるが、然も不自然な環境によつて歪められ勝ちであるから注意しなければならぬ。由來、性に對して有する偏見は、「性」は汚れたものであると言ふ考へ方である。従つて性の事になると何も彼も嚴禁で、兒童がこれを口にする事を許さない。深い意味もない兒童の性に對する質問に、父母が慌て困じたり、無邪氣な子供が風呂から出てくると驚いて局部を隠したりする事が、どれだけ彼等に不思議な感を抱かしめるか分らないのである。その結果彼等は性については、父母兄弟にも相談をせず、秘密主義となり、種々の惡癖を得るやうになる。

社交性と少年團

社交性の發達も、またこの頃の兒童の特徴の一つに數へなければならぬ。彼等は社交心の發達と共に今まで理解の出来なかつた、他人の境遇や氣持なるお友達を越えて、黨員であり、クラブの會員と言つた形をとるのである。彼等は自己の屬する團體に忠勤を勵み、よくその指導者に服従する。また前にも述べたやうに、彼等は強い名譽

心や羞恥心をもつて居る、故にこの氣持ちを尊重し、これを適當に指導して行けば、愛郷心となり、愛郷心となり、愛國心となるのである。この心理を巧みに捉へたのが、近來流行の少年團である。ボーイスカウト從來の訓練は年齢の異つた成人が、子供に理解の出来ないやうな抽象的な言葉で、道徳のエツキスを與へる事にあつた。その結果はどうかと言ふと、良薬は口に苦しの譬に漏れなかつたのである。これに反して少年團の訓練は、餘り年齢の違はない指導者を通じ、團員の共同生活や、自治生活の内に織り込んで、良薬をおいしく食べさせるのが目的である。然し何んなものにも弊害を伴ふものであるから、今後少年團や青年團の指導者の指導を重んじ、その効果を上げて行くやうに努めなければならぬ。

小學校卒業前後

最後に小學校卒業前後のことについて述べて見たい。小學校卒業後中等學校へ進むものもあり、また實生活に入るものもあるが、何れにしてもそろそろ人生の方針をきめなければならなくなつてくる。多くの場合においては子供が自分の方針をきめると言ふより、両親がきめてくれるのである。而して両親が自分の子供を評價し、方針を極める場合に、二つの傾向があるやうである。その一つは自分の子供の才能を買ひかぶり、高く値踏し、誰が何んと言つても自分の子供だけは將來有望だと自惚れるものである。今一つの傾向は、極端に我が子を見下げる事である。あんな奴に何が出来るものかと、頭から馬鹿呼ばりをしたり、低能抜ひをする類である。然しこれは何れも間違つて居る。兒童の價値は高く見過ぎても、低く見過ぎても弊害があるから、何れにも偏せず親の希望や感情を抜きにして、有りの儘に見てやらなければならぬ。然しこれは決して簡単な事ではない。子女の傾向や適不適が分れば、次は職業の選擇や學校の選擇である。處が學校の選擇もまた決して容易ではない。誰しも評判のよい學校に入りたいのは親心であるが、子供の能不能は勿論、家庭の雰圍氣と學校の校風との關係などを考慮に入れ、また卒業後の方針なども考へて選擇されなければならない。

第十八章 少年少女期の心理と指導

少年少女期の身體

少年少女期とは滿十二歳から十四歳迄の頃を言ふのである。彼等は社會的には六ヶ年の義務教育を卒へて、世の中へ出て働くか、また更に進んで中等學校に入學する時期である。何れにしてもより廣き社會へと進出する轉換期である。彼等は子供でもなければ、さうかと言つて青年でもない、どつちつかずの過渡期である。時には子供らしく

見えたり、また時にはなか／＼ませた事を言つて、子供らしくなくも見える。自分でさへ自分の體をもて餘す時であり、また父母にとつても、最も取扱ひ難い時期である。

身體の方面を言へば、一生の中で乳兒期に次いで、成長の最も旺盛な時であつて、横にも縦にも盛んに成長するのである。よくこの頃の子女をもつ家庭では、毎年着物が短くなつたり、履物が小さくなるので驚かされる。殊に手や足が目立つて大きくなるものである。これは上膊骨や、大腿骨などが急速に發達するからである。その他女子においては鼻や腰部や乳房が著しく肥大する。また骨格の急速な發達や、皮下脂肪の増加などのために、多少顔形が變つてくるものである。従つて今まで可愛らしかつた子供が、不恰好になつたり、舉動が不器用になつたりする。それがたにお茶碗を落して壊したり、お辭儀をするにもどことなくごちなくなるものである。然しこれ等は何れも少年少女期に特有な生理的特徴に基づくのであるから、怒つたり叱つたりしては無理である。彼等の身體の發達有様を見ると、各部の成長が不均整である。或る時は骨が急に伸びるかと思ふと、その次には筋肉丈けが發達すると言ふ有様である。それがために臆がつれたり、筋肉が壓迫されたりして關節が痛み、恰も神経痛か、レウマチスにでもかゝつたやうな感じがある場合があるが、これは成長痛と言つて、この頃の子女に特有な筋骨の不均整な發達に基く痛みであるから、心配するには及ばない。

筋肉や骨が急速に成長する割合に、内臟諸機關の發育は緩慢である。そのために身體が疲勞し易いから、運動も過度に亘らないやうに注意を要する。かく少年少女達の身體は急に成長して大きくなるが、内容はこれに伴はず、所謂ウドの大木で體の割合に仕事の能率があがらない。そのために周圍のものから、横着者とか怠けものとか考へられる。然しこれは彼等を理解しない不當の考へ方である。彼等の健康は別に悪くはないが、兒童期に比すると稍々劣るやうである。食欲なども不規則であつて、或る時は大變進むかと思ふと、その次には減退すると言ふやうに、非常に不安定である。また嗜好などにも變化が起り、今まで好きだつたものが嫌ひになり、嫌ひだつたものが好きになつたりする。一般にこの時期における女子は、男子より成長發達が早く、普通一ケ年乃至二ケ年早熟する。多數の女子はこの期の終りまでに月經を経験する。また血行や呼吸や、内分泌などにも變化を起し、胃腸の障害や、流行病などに罹り易い年頃である。

理想我の發見

少年少女期における身體的方面の變化もさることながら、精神的方面の變化は更に一層顯著なものがある。この時代の精神的特徴の一つは、自我の發見である。前にも述べた通り、幼兒は満二三歳の頃始めて自分と言ふものを發見する。然しその頃の

自我は食ひたい、飲みたい、遊びたいと願ふ、欲望の我であり、本能の我であつた。處が少年少女期の自我は思索する我である。デカルトと言ふ哲學者が「我考ふ。故に我あり」と言つて居るが、少年少女達の發見する自我は、デカルトの言ふ「考へる我」であり、創作する我であり、理想に憧れる我である。一體人間の誕生は何時であるかと言ふと、或る人は受胎の時だと答へるであらうし、多數の人は分娩された時だと答へる。然しこれは何れも肉體の誕生であつて、人として眞に覺醒し、その魂の誕生するのは實に少年少女期である。而して肉體の生れ出づるのも苦痛であるが、精神的誕生も決して樂ではない。故に父母は彼等のイラ／＼した感情や、煩悶や疑問などに對して同情と理解とをもち、その終りを完うするやうに心懸けてやらなければならぬ。

少年の新入式

古來各民族間に、一定の年齢に達すると、彼等を新しく社會に受入れ、これに大人と同様な權利を與へ、且つ義務を分擔せしむるための、イニシエーション新入式の様な儀式が行はれて居つた。それが文化の進歩につれ、一種舊弊の如くに考へられてだん／＼廢れて來たが、未開人種の間には今日でもこの儀式が行はれてゐる。オーストラリヤのメラネシヤ人の間に行はれてゐる青少年男子の新入式は、非常に興味のあるものである。儀式は毎年秋貿易風の吹き始める頃に行はれ、先づ後補者を人里離れた山地に連れ行き、ココアナツトの果實の殻を焼いた炭を

顔に塗り、體をミヤ蘆で包んだ儘一晝夜放置し、翌日同時刻になると蘆に包まれたまゝ群集の前に引き出す、すると群集は彼等のために樂を奏し、舞を舞ふ、その間に後補者の母親が前列に進み出で、蘆に包まれたまゝ、我が子を奠長に引き渡す、奠長はこれを受けて祝福し、これに祖先傳來の秘傳や、教訓を與へるといふのである。我國でも明治維新の頃まで元服と言ふ儀式があつたが、今日ではちよんまげと共に廢れて仕舞つた。勿論元服をその儘行ふ事は出來ない、然し何等かの方法で、青少年の轉換期を記念することは望ましい事である。私の知人某の家庭では、子女が中等學校に入學する日を記念し、朝暗い中に起きて、蠟燭を點し、赤飯を炊いてお祝をする。この程度の儀式でも、彼等に深い印象を與へ、責任感を與へることになる。

理想我の發見と獨立心

自我の發見に伴うて、彼等の魂に獨立自治の精神が根強く芽生えてくる。彼等は從來のやうに、父や母の意見のみに頼らないで、自ら考へて行動せんとするのである。而して青少年のこの傾向は、重大な意義をもつてゐるものであるから、適當にこれを伸ばし育てて行かなければならない。前にも述べたやうに、教育の根本目的は、子女をして經濟的にも、精神的にも獨立自治の人とすることにあり。然るに父母は、屢々子女のこの傾向を目して、恰も彼等が不良少年にでもなつたかの如く思ひ過し、彼等の言動に不必要

な干渉を加へ、折角獨立しようとする勇猛心を粉碎せんとするのである。吾人はかゝる父母の心事を理解する事は出来る、またその動機の善意より出づる事を疑はない。然しその方法の當を得たものでないと言ふ事が言はれる。

両親の心配の意義

父母が青少年の獨立心を壓迫する最も普通の手段は、心配する事である。學校の歸りが遅いと言つて心配し、また早いと言つて心配し、御飯を食べると言つて心配し、食べないと言つて心配し、勉強しないと云つて心配し、勉強すると言つて心配する。父母の老婆心から考へれば、心配する事は親の愛である。然し子供の立場から見れば、父母の優越感であり、また無用の干渉である。その結果彼等の反抗心を挑發し、両親に反抗するばかりでなく、學校においては教師に反抗し、社會に出でては長上や權威に對して反對するやうになるのである。かくして折角の恩が仇となつて、親不孝な子となり、叛逆者が出來上るのである。箱入式の教育は昔でも成功しなかつた、況んや今日の如き複雑な社會においてをやである。勿論急遽な變化は避けなければならぬ、何事も中庸が必要である。若し放任して置けば經驗の少ない彼等は、却つて父母の助言を求めるものである。近來病氣豫防のため豫防注射が流行する。豫防注射は多くの場合積極的に病毒を身體内に注入し、その病毒に對する抵抗力を養ふのである。子女の教育にお

いても、この邊の事を多少參酌して行く必要はあるまいか。

少年少女と犯罪

少年少女期に入ると、急に犯罪が殖えて、所謂不良少年少女が簇出する。これは幼兒期や兒童期の頃に蒔かれた悪い躰が、人生の春において獨立心の發芽と共に、一時に惡の芽をふいてくるからである。いま迄は親が煙草を吸ひ酒を飲んでも、彼等は子供だと言ふ理由で、禁酒禁煙を餘儀なくされて居つたものが、この時期になると、どんなに抑へてもとめる事が出來なくなるのである。その他幼兒の頃に受けた悪い感化や、満たす事の出來なかつた欲望が擡頭して來て、種々の不良な傾向となつて現はれてくる。而してこれの取扱ひが、重要な社會問題となつてくる。今日一般に行はれてる感化の方法は不徹底であつて、外部に現はれた行爲のみを云々して居るやうな嫌はあるまいか。何事でもさうであるが、成る日に成るのでなく、因つて來る原因があるのである。殊に不良少年などの出來るのは、決して一朝一夕の事ではない。吾人は彼等の感化矯正に當つて枝葉の問題にのみ拘泥せず、その根本の原因に遡つて考へてやらなければだめである。

放浪性とその取扱ひ

獨立心の發達に伴つて發生する他の特徴は放浪性である。或る人はこの時代を特に彷徨時代などと呼んでゐるほど、彼等は彷徨癖を有し、

旅行や登山やキャンプなどに興味をもつ様になる。これはやがて彼等が生家を離れて他家に嫁し、また別に一家を建てるための豫備行爲であるから、同情をもつて或る適度までこれを満足させてやらなければならない。學校の修學旅行などにしても、教師の方では名所舊蹟の見學をさせるつもりで居るが、生徒の方ではそんな事はついたり、恰も籠の鳥が解放された時のやうな馬鹿騒ぎをする。然しこの馬鹿騒ぎも決して無意味ではない。また近時制服の處女が屢々問題になつてゐる。あんな眞面目な顔をしてゐながらと驚くものもあるが、吾人から見れば堅苦しい學校生活からくる反動なのである。偽善と言へば言へるが、彼等から見れば已むを得ない事なのである。

自己中心的傾向

自我の目覺めに伴ふ他の心理状態は、彼等が自己中心になると言ふ事である。然しこれは必ずしも利己主義と言ふのではない、たゞ物事の考へ方が主觀的となり、非常に自分の事ばかり氣にかけ、他人が自分をどう思つて居るかと言ふ事に強い關心をもつのである。人に褒められると喜び、非難されると悲觀し、人が笑ふと自分が嘲笑されたのではないかと氣を廻はし、殊に女子は顔形に氣をとられ、また自己の將來などに深く想ひ耽るのである。彼等は時に自分ほど偉いものはないと考へて見たり、また時には自分ほどつまらないものはないと考へて、一喜一憂するのである。殊に父母の批評や評價などに對しては、非常に神經過敏で

あつて、両親や教師が何んの氣なしに口走つた事を、重大な意味のある事のやうに誤解する事があから、當事者は慎まなければならない。

少年少女期の智能

少年少女期の智能を觀察すると、一般に學習能力が低下して來るやうである。これは身體の發達が急劇なものと、性本能の目覺めに伴ふ、感情の興奮などに由り、精力が過剰に消費されるために起る一時的現象であると見て差支ない。殊に彼等の學習能力は彼等の感情に由つて著しく支配されるものである。例へば自分の好きな事は記憶し、嫌な物は忘れ、好きな先生に教へられるとよく勉強し、嫌な教師に教へられると一向に進歩しないものである。故に彼等の學習を指導するには、たゞ表面の現象のみに囚はれず、彼等の心の底を流れてゐる感情の方向を見極めなければならない。また前にも述べた様に、この頃の男女の身體は變化が甚だしく、近眼の素質のあるものは、急にその傾向が顯著となり、その他アデノイドや扁桃腺肥大などのために、學習能力が低下する場合も少なくない。また彼等の讀書慾は最高頂に達し、英雄崇拜の傾向も愈々旺盛になるのであるから、これ等の心理状態を察知して適當に指導しなければならない。

お友達の感化

父母を離れて行く少年少女達は、何處へ行くかと言ふと、先づ第一に同性の友へと向ふのである。幼い頃には母より他に戀しい人はないと思つて居つた

彼等が、父母より教師へ、教師よりお友達へと愛を移して行くのである。少年少女達にとつてお友達ほど戀しいものはない。彼等はお友達に感化を與へ、またお友達から感化を受け、お友達次第でどうにでもなるのである。故に父母は直接彼等の指導に當るより、お友達を通じて間接に指導する方がよい。それがためには出来るだけ家庭を解放し、時々お友達を招いてその性格などを知つて置く必要がある。なほお友達の親達同志とも交際して居れば一層結構である。この時代に出来たお友達こそ一生涯の友であり、或る場合においては親兄弟よりも親しく、人間の生活を豊富にさせるものである。萬一この頃の子女でお友達が出来ないで、孤獨を樂しむと言ふやうな傾向が現はれる場合には、何等かの精神的缺陷に基くものであるから、その原因を調査して、適當に指導してやらなければならぬ。

少年少女期の感情

少年少女の身體の不均衡である事は既に述べた所であるが、それにも増して彼等の感情は不均衡である。今笑つて居つたかと思ふと、次の瞬間には泣いたり、感心な子供だと思つて居ると、勝手氣儘な事を言ひ出したり、全く氣まぐれである。彼等は實に多情多感であり、センチメンタルである。然しこれは彼等の生理的原因に基くものであつて、主として生殖腺や副腎の内分泌の旺盛に基くのであるから、むげに抑壓する事なく、寧ろ動

搖極まりなき強い彼等の感情に、適當なはけ口を與へてやるやうにしなければならぬ。彼等が小説を読んで怒つたり怨んだりするのも、また芝居を見て泣いたり笑つたりするのも、興奮に對する緩和手段であり、一種の安全瓣であるから、多少寛大に見てやらなければならぬ。殊に彼等は何事に對しても熱情をもち、成人が單に成程と頷くやうな事でも、彼等の胸には強い感激となるのである。大人はよいと思つた事でも容易に實行に移さないが、彼はよいと思つたら、直ちに行動に現はさなくては承知が出来ない。従つて彼等は成人の冷淡な態度に憤慨するのである。これ等の事に對しても少年少女の指導者は、深い理解と同情とを要する。

性愛とその指導

少年少女期の問題の中で、最も重要でありまたデリケートなのは、性の問題である。彼等が從來深い意味もなく、僕は男だとか、私は女だとか言つて居つた事が、今や重大な意味をもつやうになるのである。即ち生殖機關の成熟と共に第二次性愛が現はれ、これに伴ふ身體的變化を起し、男女の相違がだん／＼顯著になり、男子は咽喉部が突出して聲變りがし、冒險的となり、何かにつけて急に男らしさを發揮し、女子は女らしくなつてくる。また性愛の目覺めと共に、男も女も著しく同情深くなり、男子は義侠心に富み、犠牲的となり、女子は柔和となり、慈善的となつてくる。この愛と奉仕の精神が、前に述べた感激性と相合して、彼

等を宗教や藝術へと向はしめるのである。歐米諸國において洗禮を受けて、基督教の信仰に入る年齢を調査して見ると、満十四歳が最も多數を占めて居る。これを見ても人生において、最も尊い信念の養成は、年少少女の時代であると言ふ事が出来る。故にこの感激に富んだ若人を善導し、彼等の心の奥底に敬神愛國の精神を植ゑつけることこそ、家庭教育の最高使命でなくてはならない。

第十九章 青年期の心理と指導

青年期の身體

青年期とは満十四五歳から二十歳前後までの、數年間を言ふのである。この期間は家庭における最後の時期であつて、謂はゞ家庭教育の仕上げをする時期である。従つてその取扱ひや指導は非常に重要であり、また六ヶ敷いのである。この六ヶ年間は變化の甚だしい時期であるから、これを二分して満十六歳までを青年前期とし、その以後を青年後期として取扱ふ人もある。

年少少女期から青年期の始めにかけて、女子は男子より一ヶ年乃至二ヶ年早熟し、身長においても體重においても男子をリードすると言ふ事は既に述べた所であるが、青年後期になると、男子は

身長體重とも一躍女子を凌駕するに至る。青年期の男女は筋骨が著しく發達し、その結果握力なども急に増加し、満十六歳の時の握力は、満十二歳の時の握力の二倍となる。また心臓の發達も筋肉の發達に劣らない、即ち心臓の容積は同期間において倍加する、然し動脈の發達は心臓の容積の増大に伴はない、従つて血壓が高くなつてくる。肺の發達もまた顯著であつて肺活量が増加し、それにつれて呼吸度數が減少する。また男女の性別にともなふ容姿がそれ／＼その特徴を現し、男女共頭髮が艶を帯び、男子は肩幅を増し、女子は骨盤の發達につれて腰幅を増す。また生殖腺や甲状腺の内分泌が愈々旺盛となり、その結果血液の内容にも著しい變化を生じ、延いては彼等の感情生活にも影響を及ぼしてくる。不均整であつた年少少女期の身體が、青年期になるとその均整を恢復し、身體的成熟の觀を呈して来る。従つてこの時代における體育は、足や手の部分的運動に偏せず、成る可く全身を総合的に活動させるやうな、水泳とかテニスなどの運動が適當である。健康は別して悪いと言ふほどではないが、身體の變成期であるから病氣にかゝり易い。故に勢力に任せて無理な勉強をしたり、過度の運動をする事は避けなければならない。

五感の發達

青春期を草木に譬へて言へば、櫻花爛漫たる陽春四月の季節で、總てのものが若々しき装ひをもつて現はれてくる時期である。先づ感覺の方面から見れば、

五感共にその機能が鋭敏となり、強い刺激を求めて已まない。觸覺にしても著しく精緻となり、彼等は優美なる感觸より受ける快感に隨喜するのである。嗅覺の感觸もまた非常に尖鋭化されてくる、彼等は子供や成人の感じないやうな、微かな香をも嗅ぎ分ける事が出来るのである。この頃の男女ほど香について八釜しい時代はない、殊に女子の嗅覺は男子よりも一層敏感である。青年男女が好んで香料を愛用するのはこれがためである。また味覺の方面から見ると少年少女期の頃から、嗜好が徐々に變化し始める事は前に述べたが、青年期になるとその傾向が一層顯著となり、從來甘い物の好きだつたのが、急に鹹いものや、酸いものなどが好きになり、男子は酒や煙草などに對しても、強い誘惑を感じるやうになる。元來食欲は何時でも、人間最大の欲求であるが、生活慾の旺盛なる青年期において特に然りである。殊にこの頃の男女は食物の選り好みをするものであるから、母は彼等の嗜好物を知悉し、手料理をもつて彼等の胃袋を満たしてやり、カフェーや料理屋の誘惑に對抗しなければならぬ。聽覺の發達もまた決して他の感覺の發達に劣つてゐない。彼等は音樂に對する鋭利なる感受性をもつてゐる。誰れでもこの時代には音樂が好きになり、樂器の一つ位もたないものはない。春の夕ハモニカを吹きながら田舎道を行く若人、秋の夜月下にヴァイオリンを奏する青年の姿は決して珍らしくはない。またネオンサインの下でジャズのリズムに陶醉し、身も魂も

奪はれて仕舞ふ青年も少なくない。青年期の男女は屢々將來音樂をもつて、身をたてようと思つたり、父母もまた我が子を音樂的天才ではないかと、思ひ迷つたりするものである。家庭に音樂の必要な事は申すまでもないが、殊に青年期の子女をもつ家庭には、一層その必要を痛感する。高尚なる音樂は、青年男女の情操教育に、一種の神秘的な力をもつて居るものである。次に色彩感覺について述べて見よう。兒童の頃量的であり、具體的であつた視覺は、青年期になると抽象的となり、また神秘的となつてくる。彼等の投ずる強い視線は、ものの表面や、形態の認識丈けでなく、事物の内部を突き通して事物の眞隨を直感するのである。今まで白色を見て、たゞ單に白としか感じてゐなかつたものが、白衣に純潔を聯想し、また天の藍色を仰いでは、敬虔なる感激に打たれるのである。ペスタロツチやフレーベルは早くからこの事實を認め、從來皮相的であると思はれて居た感覺殊に視覺に直感力のある事を高調し、この直感力を通して清い高い靈魂の教育が可能であると説いたのである。近來イエンシュなども少年少女期から青年前期における特有の現象である、直觀像アイデテックの研究に専念し、これを青年期の教育に應用せんと努力して居る。かゝる事實より見ても、青年期の教養は外部より注入したり、命令したりする事でなく、内より湧き溢るる感覺の力を、天然の音樂に耳を傾けしめ、美しき自然より來る神秘的感激へと導き、森羅萬象の中に現はれてゐる、眞善美

の世界に觸れしめ、直接教へると言ふより、間接に指導する方が一層有効である。

青年期の智能

次に青年期の記憶、思考、想像、言葉を替へて言へば智能について考へて見よう。兒童の記憶は機械的であつて、印象されるまゝ何んでも鵜呑みに憶えてゐた、ところがこの頃の男女になると、総合的となり分解的となり抽象的となつてくる。例へば記憶した事實と事實との間に關係をつけたり、解釋を與へたり、また幾つかの要素に分解して、思考や想像の材料とする事が出来るやうになる。彼等の記憶は少年少女期における如く、その時々感情に由つて、著しく支配を受けるのである。一般に不快のものは記憶し難く、若し記憶しても忘れ易く、これに反して興味のあるものや、特に恐怖や苦悶の對象となるものなどは、よく記憶して居るものである。詳しく言へば、記憶と言ふ心の働きは、記銘と把持と追想と認識との四つの心理現象から成立つて居るのであるが、その内で最も感情の支配を受け易いのは追想である。彼等が過去を追想する時には、決して過去にあつたその儘を追想するものではない。追想の因つて起る興味や、希望などを自由に添加するのである。言葉を替へて言へば、彼等の記憶はその時々気分に従ひ、自分の都合のよい様に追想するのである。従つて青年期の記憶は主觀的となり、不正確たるを免れなう。

思考

思考もまた青年期の強い感情の影響を受けるのである。普通の場合における思考は、問題の發見、問題の定義、問題の假設的解決、解決に對する證明と言ふやうな階段を経て進んで行くのである。例へば私が横濱の埠頭に立つて、沖にかゝつて居る小蒸氣船の甲板に旗竿に似た異様な竿を發見し、ハテあれはなんだらうと考へ始める。これは問題の發見である。次にその竿の長さ太さを目測し、その上端にある金箔の玉などを吟味する。これが問題の定義である。次に旗竿ではないか、帆柱ではないか、それとも無電のアンテナでないかなどと、二三の假設的解決を試み、最後にこれを實際にあてはめて證明し、遂に結論に到着すると言ふ順序をとるのである。處が青年男女の考へ方は、感情や希望の影響を受けて、問題から結論へと一足飛びに斷定を下し、後から逆に證明するのである。従つて彼等の思考は敏速であり、一本調子でありまた偏頗になり易い。

想像

智能の中で最も高尚な機能である青年期の想像について述べて見よう。幼時の想像は荒唐無稽で、何等纏つてゐない。今この事を想像してゐるかと思ふと、次の瞬間には他の事を想像すると言つた有様である。處が青年期に達すると、尖鋭な目的を有し、一定の願望と渴仰との下に、組織的に行はれるのである。従つて彼等の想像力は集中され、強く狭く深く行はれるのである。勿論この場合にも強い感情の支配を受け、屢々空想に近い奔放なる、青年期特有のローマ

ンチックの色彩を免れないが、彼等の想像力には成人の及ばない特異性をもつてゐる。これが青年をして小説や詩歌などの創作をなさしめ、また稀れには新発見にも導くのである。然し青年達が日常生活に不満を感じてゐたり、また感情の發表を極度に抑へつけられたりして居ると、彼等は現實の世界を離れて、その不平不満を空想の世界において満足させるやうになり、想像が病的傾向を帯びて、妄想的となるのである。従つて健全なる想像力を養成するには、徒らに彼等の感情を壓迫せず、また直接彼等の思考や想像の不正確な事を指摘する事なく、出来るだけ彼等を實生活に親ましめ、日常生活の内に味ふ成功や失敗の經驗を通して、自然に自分の想像や思考の誤つて居る點等を自から發見し、訂正して行くやうに仕向ける事が肝要である。

思想的傾向

青年男女ほど智識慾の旺盛なものはない。彼等は一面において既成の眞理を疑ひまた過去の一切に對して懷疑的となるが、他面においては新しい理論や學說に對して、強き好奇心を現はすのである。かゝる傾向は必ずしも悪くはない、この疑ひの心があつてこそ、新しい智識に對する進歩が可能なのである。然し彼等は過去の經驗に乏しく、批判力がなから、やゝもすると無批判的に新學說を取り入れる虞れがある。彼等は概して打算的な事を忌み、妥協や溫情を排斥し、理論が合はない場合には血肉とも争ひ、殆んど空論に近いやうな思想を尊重

し、思想家を無條件に崇拜する。彼等にとつて思想は何物にも替へ難い生命である。また彼等は何事に對しても、絶對的法則とか、純粹眞理とかを追究しなければ満足が出来ない。彼等の考へ方は白か黒か、善か悪かの、極端から極端へと走るのである。また彼等の思想は屢々思想の假面を被つた強い感情である場合が少くない。而して彼等の思想の歪むのは感情の歪んでゐるためであり、不平不満が現はれて思想悪化となるのである。従つて彼等の思想の善導は決して簡單に行くものではない。この傾向を危険視したり、壓迫したりすると、却つて彼等の不平不満を増長し、反抗心を挑發して思想を悪化させる事になる。故に思想善導の端緒は、彼等の鬱積せる不平不満が那邊にあるかを知り、何等かの手段で歪める彼等の感情を是正してやる事から始められなければならない。

性愛の發達

この時期の男女は、生殖機能が完備し、性愛の發達もまた顯著である。少年少女期における性愛は主として同性愛的傾向を帯びて居つたが、青年期になるとそれが徐々に異性愛へと向ひ、男女互に相惹くものが出來て、この頃になると軽い初戀を経験するものも少なくない。元來性愛本能は食慾に次ぐ強い本能であつて、先づ自演行爲となつて現はれるものであるから、これが指導は非常に重要である(第二十七章参照)。青年男女の性愛の指導の根本は、徒らに性愛を壓迫する事ではなくて、これを圓滿に發達させ、適當なる配偶者の選擇、圓滿なる結婚

生活へと導いて行く事である。處が近來經濟的理由のために、一般に男女とも婚期が遅れ、その結果種々なる性的亂行が増加して來た事は憂うべき事である。昔は早婚の害を説いた時代もあつたが、今日では晩婚の弊を説く必要があるまいか。

青年の道德

青年男女は他人の感情を理解し、責任とか、權利とか、義務とか言ふやうな分別を生じ、道德的責任行爲が可能である。子供の頃の行爲は主として賞罰によつて支配され功利的であつた。彼等が善をなすのは、譽められたためであり、惡をなさないのは罰を免れたいためである。大人の道德行爲もまた打算的であつて、その動機が利害關係に支配される場合が少なくない。處が、青年の道德行爲は利害關係を超越した、所謂彼等自身の純眞なる道德的觀念から出發するものであつて打算的ではない。勿論彼等の有する道德的觀念は、必ずしも正確ではないがその動機は買つてやらなければならない。現代青年の道德が頽廢したやうに考へる人もある。成程見方によつてはさうも見られる。殊に交通機關の進歩や都市の發達、物質文明の發展につれて、現代人は誘惑を受ける機会が多くなつて來た事は事實である。然し他の一面から見れば、昔の道德と今日の道德との標準が、徐々に變化し向上しつゝある事も見通す事は出來ない。昔の道德は主として個人主義的であり、現代の道德は社會道德がその基調を爲して居るのである。而して

今日頽廢しつゝあるのは、この個人主義の道德ではあつて社會的道德の方面は却つて進歩して居ると言ふ事が出来る。

職業の指導

配遇者の選擇の大切な事は既に述べたが、職業の選擇は更に大切である。マツセエニーは「人生は使命である」と言つて居るが、實際使命のない人生は無意義である、而してこの人生の使命の大半は職業を通じて果たされるのである。不適當な職業を選擇すれば、社會國家を益さないのは勿論、自からも幸福でない。また人間の性格はその職業の如何によつて、多くの影響を受けるものである。軍人が軍人らしくなり、教師が教師らしくなり、金貸しが金貸しらしくなるのは、多くは彼等の有する職業意識の然らしむる所である。故に成る可く青年の適性を調査し、合理的に職業補導の道を講じてやらなければならない。然るに世間には、父母の野心を標準として、子女の職業を選擇する場合が少なくない。私の知つて居る某銀行家の令息は、文學好きの青年であつた。彼が高等學校を卒業した時、文科大學に入學を志願したが、父母は頑として許さなかつたので、彼は已むを得ず父の希望通り經濟科に入學し、卒業後も父のお膳立てに従つて某銀行に奉職したのである。處が、銀行に二ケ年ほど働いて居つたが、一向に進歩しないのみか、遂には強度の神經衰弱にかゝつて退職を餘儀なくされたるに至つた。そこで父も我を折つて彼

の希望を許し、文藝方面に携はらせる事とした結果間もなく彼の病氣も恢復し、毎夜一時過ぎまで小説をかくと云ふ精動振りを示し、今日ではその方面において相當の名をなして居る。

第二十章 兒童の退行作用について

人生變化の階梯

人生は進歩發達の階段であつて、今日の行程は昨日のそれと異り、また明日歩む可き道は、今日の道とは變つてゐる。これを旅行に譬へて見れば、恰も毎日未踏の處女地を跋涉して行く旅人のやうである。生理的に見ても、昨日の身體と今日の身體とでは決して同一ではない。血液が人體を一周する最短時間は、僅々數十秒を出でない。血液の内容にしても、その時々健康状態や、氣分によつて同一ではない。内臓の諸機關は勿論のこと、皮膚や毛髮に至るまで、時々刻々に新陳代謝して行くのである。かく人間の生活が變化して行く事は一面において、非常な強味である。變化のある所に進歩があり、發達があるのである。生物と無生物との差は、實にこの可變性の有無にある譯である。また生物の内でも高等なものになるほど、變化が甚だしく、同じ人間でも文明人になるに従つて變化の可能性が多い。處が他の一面から見る

と、變化は一種のハンデキャップであり、また不利である。絶えず變化し新しい境遇に處して行くためには、非常に精力を要するのである。従つて屢々臆病となり、恐怖心を抱き、時には進歩を中止し、退行せんとする傾向さへ示すものである。

退行作用は何時起るか

殊に最も變化の起り易い轉換期においては、この退行的態度が最も顯著に現はれるのである。例へば出生期の初めや、乳兒期から幼兒期に移る時期、更に幼兒期から兒童期に移る頃、即ち家庭を離れて學校に入學する時期、兒童期から少年少女期に入る過渡期、更に青年期、老衰期などである。人の一生を見ると、先づ單細胞として母の胎内に生を受け、二百八十日間の目ぐるしいやうな、變化發達を遂げて誕生し、歩む事も語る事も出来なかつた無力の一ヶ年を過し、滿六歳に及んで小學校に入學し、より廣き社會の人となり、徐々に成長發達して社會に出でて職を求め、結婚して家をなし、父となり母となり、壯年期を経て圓熟期に入り、遂に老衰期に達する數十年は、生きた小説であり一幅の繪卷物である。而して人生のコースを旅する人にとつて大切な事は、その都度登る可き階段をためらはず登り、曲る可き角を間違はずに曲る事である。處がこれは決して簡單ではない、殊に分別の足りない兒童にとつてその困難は一層甚だしいのである。彼等には變化を欲する一面があると同時に、變化を恐れる

他の一面がある。兒童は漫然と、早く大きくなつて新しい世界に進出したいと望んで居ると同時に、新奇の世界に這入る事を怖れてゐる。殊に幼少の頃可愛がられ過ぎた子供や、特殊の環境（例へば子供の頃に母を失つたもの）に育つた兒童は、この傾向が強く、屢々全然進歩を中止して退嬰的となり、退行するものが少くない。

退行作用の四階段

退行作用はその程度によつて大體四つの階段に分ける事が出来る。その程度なものは過去に對する追慕とか、單に過去が戀しいと言ふ程度である、而してこの程度のもは殆んど總ての人に共通のものである。それが更に進むと、退行作用となるのである。退行作用と言ふのは、たゞに回顧的となるばかりでなく進歩を中止し、後退して前の時代に戻らうとする心理状態を言ふのである。従つて退行作用の強い子供は智能の發達が鈍るばかりでなく、依頼心が強くなりまた怠惰となる傾がある。彼は何事をさせても緩慢で、遠足などに行つても一番遅くなり、更にそれが寢小便や朝寢坊や病氣などの原因となる事がある。第三の階段は内向性的性格者となる事である。兒童が退行的心理状態にあるとき、周囲の人々が冷淡である場合には、兒童は全然自己の内に逃避して仕舞ふのである。かゝる兒童は一面において内省的であり思索的であるが、他面においては引込思案で、内氣で自己中心である。藝術家にはこの部類に屬す

る人が少くない。これが甚だしくなると實社會を嫌ひ、空想的となり、空中樓閣を描き、病的妄想を抱くやうになるのである。退行作用の最も甚だしいものは自殺である。病氣が退行作用の手段として用ひられる事は、既に述べたが、自殺はその極端な場合である。勿論自殺の總てが退行作用ではないが、自殺には退行的作用によるものが少くない。最近某新聞に掲載された婦人の自殺などは明かにそれである。この婦人は本年三十三歳である。十歳の頃父が死んで母親は里に歸り、自分は父方の祖父母に引取られて育てられた。二十歳の頃に祖父母が死し、一時花柳界に身を落して二十八歳の時さる妻子のある人と相思の間柄となつて同棲したが、昨年暮男に捨てられた。するとそれまで何んとも思はなかつた二十年前に別れた母が急に戀しくなつて、やつと捜し出して尋ねて行つて見ると、母は異父弟妹に取り圍まれて幸福に暮して居り、自分が期待して居つた慰めの優しい言葉もかけてくれないので、失望して遂に自殺してしまつたのである。この婦人が母を尋ねて行きたくなつたのは、既に幼き時の思ひ出に歸らんとする退行作用である。ところがそこでも自分の満足を得ず、安全を期し難かつたので、とうとう人間が最後に歸る可き永遠の眠りに就いたのである。よく歐洲戦争の時に、軍人が戦場で死ぬ時に「お母さん」と母の名を呼びつゝ死んだと言ふ事であるが、これなども多くの人々の考へるやうに、母に感謝しつゝ死んで行くのではなくて、寧ろ最後

の際に地位も名譽も忘れて幼き昔に退行したためだと見るべきである。またホームシックなどもこの退行作用の心理によつて説明さる可きものである。

乳兒期の退行作用

吾人は以下順を追うて乳兒期の退行作用から述べて見よう。今まで母の胎内にあつて、謂はゞ寄生的生活をして居つた胎兒が、始めてこの世に生れ出た時ほど、人生において大なる境遇の變化はない。従つて初生兒が退嬰的態度をとり、掌を握りしめ、手や足を縮かめ、背を屈めて退行的態度をとるのも無理ではない。故に生れたばかりの兒童の掌を無理に開けたり、足を伸ばしたりすると、却つて恐怖心を増して、徒に退行心を増長し、進歩發達を阻害する事となるから、成る可く安靜を保たしめ、徐々に新しき境遇に慣れしめるやうに努めなければならぬ。また嬰兒は一日の中大部分眠つて居るのであるが、彼等の睡眠は別に疲勞して居るから眠ると言ふのでなくて、一種の退行的手段であり、新奇なる世界から逃避しようとする意味をも含んでゐる（睡眠は嬰兒に限らず、老人の場合においても、大人の場合においても、退行的意義を有して居る）。故に嬰兒には成るべく安眠をさせるやうに努め、眠つてゐる場合に急にゆすり起して授乳したり、お湯に入れたりする事は慎まなければならぬ。かくする事によつて、初生兒は驚き怖れて泣き叫び、それが原因となつて寝起きが悪くなつたりする場合が少くない。ま

た前にも述べたやうに胎兒の頃には、胎盤に包まれて堅く母體に附着して居つたのが、急にその支持を失ふために、不安の感が強く彼等を支配し、それが退行の原因となるものであるから、嬰兒は襁褓ひづきや衣服をもつて、しつかり包み餘り抱きかかへない方がよい。若し抱くとしても子供などに抱かせないで、大人がしつかりとあぶなくないやうに抱く事が必要である。

幼兒期の退行作用

次に幼兒の退行作用について考へて見よう。乳兒期から幼兒期に至る階段の一つは、離乳と言ふ階段である。この階段を登る事は決して容易の事ではない。然し是非共登らなければならないものであるから、可愛相だと言ふやうな姑息な考を捨てて、手際よく登らせてやらなければならない。殊にこの時期において特記す可き事は、自己（本能我）に目覺める事である、而して彼等が弱き小さき自己に目覺めたとき、不安にかられて母の後を追つたり、急に我儘になり依頼心を現はすのは、明かに退行的意義を有して居るのである。故にこの頃の幼兒の取扱は、その手心をもつてやる方がよい。一般に子供心を支配する通念は、大きくなると段々可愛がられなくなると言ふ考である。殊に乳兒期や幼兒期の初期において、可愛がられ過ぎた子供は退行感が強く、それがために精神的には發達が遅れ、肉體的には病弱となるものであるから手加減が必要である。また次の子供が生れて、兄となり姉となる事も、可なり大きな境遇の

變化であつて、退行の機會となるものであるから、注意が必要である。

兒童期の退行作用

幼兒期から兒童期に進む道程に横はる溝は、家庭と小學校との間に横はる溝である。この溝を越えて行く事も決して樂ではない、今まで父母の許に數人の家族と楽しく暮して居つたのが、急に數十人又は數百人雜居する新しい社會に進出するのであるから、多少退行的となるのも自然である。殊に家庭において保護され過ぎて居つた獨り兒などには、特にこの感が強く起るものである。故にこの溝を狭くし、越え易くしてやらなければならぬ。それには就學前から家庭において出来るだけ獨立自治の精神を奨励し、また學校においては成る可く兒童を家庭的に指導し、學校や教師に親ませるやうにする事が肝要である。この時期における他の一つの溝は、自己主義から利愛主義への道程である。普通の場合においては、幼兒は徐々に利己主義から利他主義へと轉向するのであるが、前にも述べたやうに無理に利愛主義を強ひられるやうな場合には、却つて不安を感じ、自信を失ひ、自己主義に固着し没入して仕舞ふ事がある。この結果兒童はたゞに非社交的になるばかりでなく、學業が進歩せず、精神的にも種々な悪影響を受けるものである。

退行の手段としての病氣

吾人はいま退行の手段として使はれる二三の事について述べて

見よう。前にも述べたやうに、甘えたり我儘を言つたり、強い依頼心を起したりするのは一種の退行的心理の現はれである。また寢小便も退行的手段と見る事が出来るのである。殊に四五歳になつても寢小便をするのは、その内に嬰兒の昔に歸つて、母の世話になりたいと言ふ深い願望を含んで居るのである。病氣も退行手段として使はれるのである。殊に兒童が小學校に入學後學校生活になじまない場合には、病氣となつて缺席して、家庭に蟄居する理由を作り、然も父母の看護を受け、幼兒の昔に歸つて、安逸に浸る特權を確保するのである。困難が來ると直ぐ頭痛や、腹痛を起し、急に吐瀉を催したり、痙攣を起したり、試験の度毎に熱を出して缺席するなどは、退行手段と見て差支がない。かう言ふやうな病氣の子供を大事に取り扱ひ過ぎると、彼等はその味をしめ屢々同じ病氣を繰返し、その結果本物の病身となる事が少なくない。この種の病氣は單純な病氣ではなく、一種の精神的缺陷に基因して起る病氣であつて、子供ばかりでなく大人にもよくあるものである。例へば事業に失敗した場合などに、急に病氣になつたりするのはそれである。外から見ると病氣になつたために事業が失敗したのか、それとも事業に失敗したから病氣になつたのか見分け難いのである。退行性疾患の著しい例は、歐洲戰爭の際、戰場において急に失明したり、聾になつたりした多數の傷病兵士達であつた。彼等は戰場の砲煙や、毒瓦斯の恐しい光景に怖えて、所謂眼が暗んで失

明し、また爆彈の音を聞くに堪へかねて、聾者となつて外部の刺戟から遮斷され自己の内に退却しやうとしたのである。これらの病氣は何れも主として心のもち方や、感情に基因するものである。健康な身體は健康な精神を宿すと言ふ事も出来るが、多くの場合健康なる精神が健康なる肉體のとなるのである。故に病身の子供の治療は、從來のやうな身體の衛生のみでなく、精神の鍛鍊即ち精神衛生に依らなければならぬ。昔から信仰によつて病氣が治つたと言ふやうな事實は澤山あるが、これは一種の精神の鍛鍊に由るものであつて單なる迷信とのみは考へられない。

退行手段としての睡眠

睡眠が退行的機構を有する事は既に述べたが、學童の朝寢坊などもこの心理によつて説明する事が出来るのである。兒童が朝寢坊をするから學校を遅刻するのだと考へる父母や教師もあるが、遅刻や朝寢坊はそんな簡單なものはない。彼等は朝寢坊をすれば學校が遅れる位の事は百も承知である。それだのにどうして朝寢をし學校を遅刻するかと言ふと、學校生活と家庭生活との間の不調和があるからである。分り易く言へば學校に行かずに、家庭に居りたいと言ふ潜在意識が働いて居るからである。若し反對に家庭に居るより、學校に行つてお友達と遊ぶのが楽しいと言ふやうな場合には、學校が始まるより一時間も前に行つたり、三時に終るのに五時まで居残つたりして、却つてそのために親や教師に心配をか

けるのである。また平素朝寢の小供でも、遠足の日などには早く起きるものである。これに反して一時間目に嫌な學課のある日などには、なか／＼起きようとしぬ。故に彼等の朝寢坊を矯正するには、この間の事情を洞察して、學課に興味を持たせ、學校や教師に親しませるやうに指導しなければならぬ。

少年少女期の退行作用

小學校を卒業して直ぐ社會に出て働く人達は、境遇上の激變を経験し、従つて種々の精神的打撃を受けるものである。然し今日では可なり多數の子供が、高等小學や中等學校へ進むやうになつて來た。小學校から上級學校へ進むのは、學校の選擇さへ誤らなければ左程困難ではない。而して上級學校を選擇する場合に、學校の校風と兒童の家庭の家風と餘り違はないものがよい。一般的に言へば學校や教師は家庭的なのがよい。元來學校は家庭の延長だと言はれる程であつて、精神衛生の見地から見、成る可く家庭的の學校を選ぶべきである。また兒童期から少年少女期への轉換は、兩親から解放されて、獨立自治の生活に入る可き門出であつて、心理的に見て重要な時である。少年少女期の前提である兒童期の教養を誤ると、この時代になつても依頼心が強く、父なり母なりに固着して進取の氣象に乏しく、悲觀的となり非社交的となる事がある。前にも述べた様に、この時期の常態は父母を離れて行かうと